女鑑



第十八年第四號

大日本淑女學會

會員募集

講義録は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい體裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ヶ年完結とす

◉詳しい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）大日本淑女學會

春と化粧

美人となる秘法

近來化粧の方法が盛んに研究せられる樣になりましたが、多くは白粉等の研究のみでして、どふしたならば美くしい化粧が出來るかと云ふ事を忘れられて居る有樣です、一體化粧の上から見れば、白粉は枝であつて其の下には根の物があるのです、つまり白粉を美くしくつけるには先づ完全な皮膚でなくてはなりませぬ、若しきたない皮膚に美れいな仕粧を仕樣としますのは、丁度ヨゴレタ「ヌメ」へ立派な畫を書かふとする如く、到底不可能の事で御座います、故に美つくしい化粧をなさりたい方は、まづ第一に皮膚を良くしなければなりません、之は極く譯もない事で、即ち常にローヤル水を用ゐて後白粉を御つけになる事を御忘れにならなければ、自然に好い皮膚と成つて美るはしい化粧が出來ます。

寒氣日增しに酷しく、今後人の皮膚はやゝもすれば荒れ易いのであります故、婦人方は固より殿方も常に注意して夫を豫防せねばなりません、夫れにはローヤル水を御使になるに限ります。

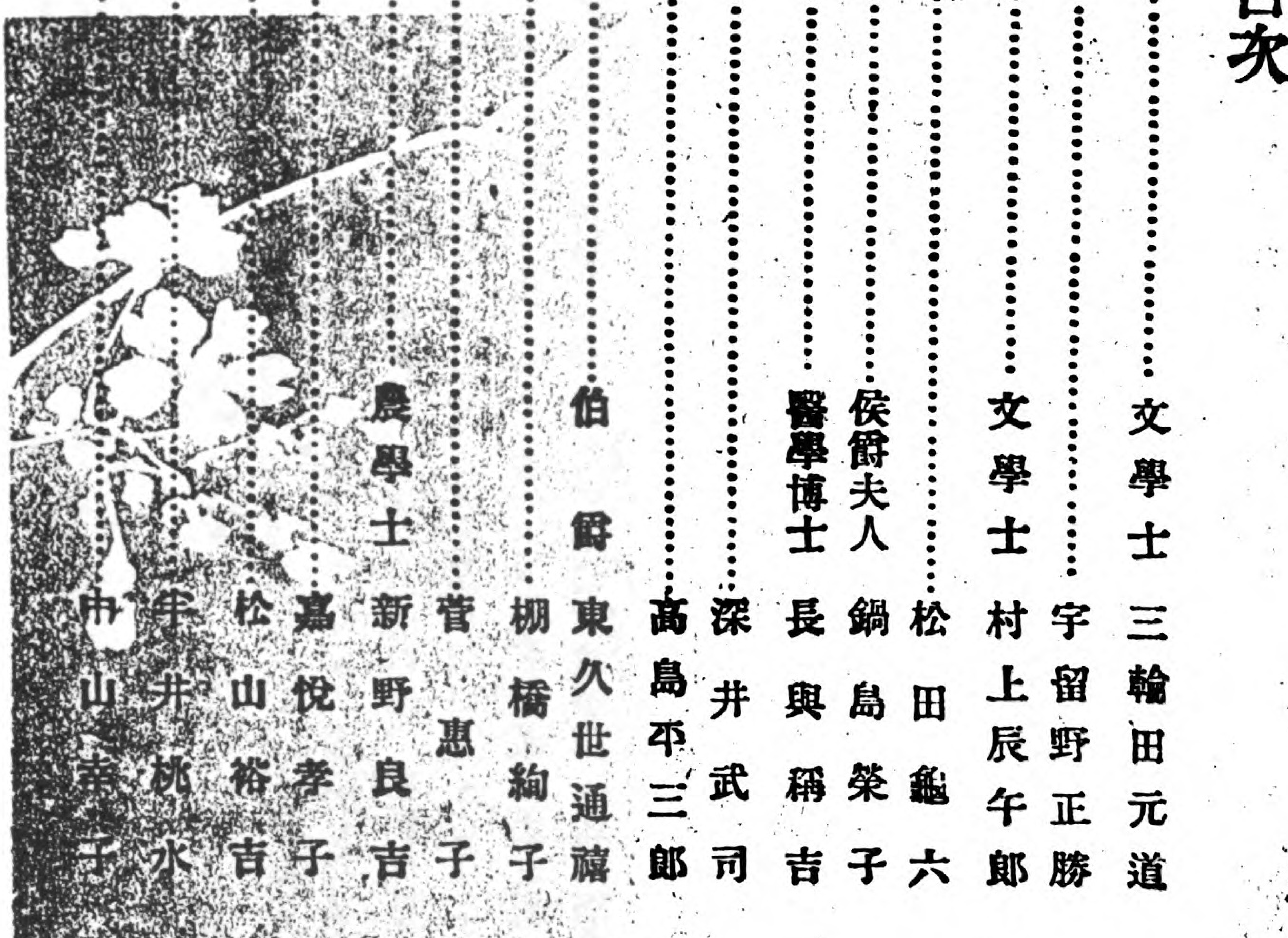
ローヤル水は此の外種々の特色がありまして、例ば脂肪分の多い爲めニキビの出來る人は、洗面の後にローヤル水を御使になれば非常の効があります、又脂肪分の少ない爲め皮膚のアレる方には適當い脂肪分を與へ、皮膚の營養を増す等、他の化粧水では見る事の出來ない多の効があります、故に世間でローヤル水を稱して萬能化粧水と申しますは偶然で御座いません。

◎定價　特大　一圓　大　五十錢　中　卅五錢　小　廿錢

郵税は十二錢販賣店は全國至る處の化粧品店洋品店小間物店賣藥店に在ります。

發賣元は東京銀座一丁目佐々木商店です。

女鑑第十八年第四號目次



懐中要薬

登録 商標 高木



東京市日本橋區元大坂町八番地

本舖 髙木與兵衛

獨逸國ロールメチシンス會社製品

皮膚特効美白新劑（一名にきび知らず）

◎◎◎

濃厚なる化粧液 チプリ

○本品は濃厚なる原液なれば三倍程の水を加へ常に御用ひあれば自然白色艶麗の美顔たらしむる事を保證す

○本品は最も「ニキビ」「ハタケ」「日ニヤケ」其他「顔のアレ」に奇効あれば朝夕洗面後手の掌に四五滴たらして塗布せば重きも十日輕きは五日位にて効あり

本品の縮圖



小瓶 二十五錢

○本品の効能顯著なる爲め遂に政府の印紙を貼用するに至れり本邦に於て化粧水に印紙を貼用せるは本品を以て嚆矢とす

○市内は勿論到る處の賣藥小間物化粧品店にあり品切れの節は送料八錢（四瓶迄）相添へ代理店へ御注文あれば直送す

日本一手販賣 東京日本橋區本石町四 松澤常吉

夕さくら




（犬の聲！）
何と云ふ藥が
欲しいのですか
THE BEST POCKET MEDICINE
SEIKAIGAN
（令嬢の答）
私は高橋盛大堂の
清快丸が欲しいのです
あの藥は勉強して肩が凝たり氣が鬱いだりした
時に能く奏効ますからね
清快丸
價金十錢、廿錢、五十錢、一圓
捻布着二十錢藥罐廿五錢

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

壽美禮おしろい

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫れしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の塲所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ、流行せり

五二會品評會 功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製

錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮れしろい

ヴワイオレツト水製

ねり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

錫栓附乳白硝子壜入

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩蝶香ひ 鑵詰八錢 別製鑵詰五拾錢 大袋二錢 小袋一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗ひに御用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜るし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登錄商標

四洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE
WASHLNG IOWDER

壽美禮あらい粉



製造本舗 東京東兩國元町(兩國橋際) 壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求め在乞ふ

德川家の繁榮



華族會館に於ける德川公銀婚式紀念

東伏見宮妃殿下の御逍遙



心の光



公爵母堂　毛利安子君

男爵夫人　千家俊子君

男爵夫人　小澤桑子君

三輪田高等女學校



校長 三輪田眞佐子刀自

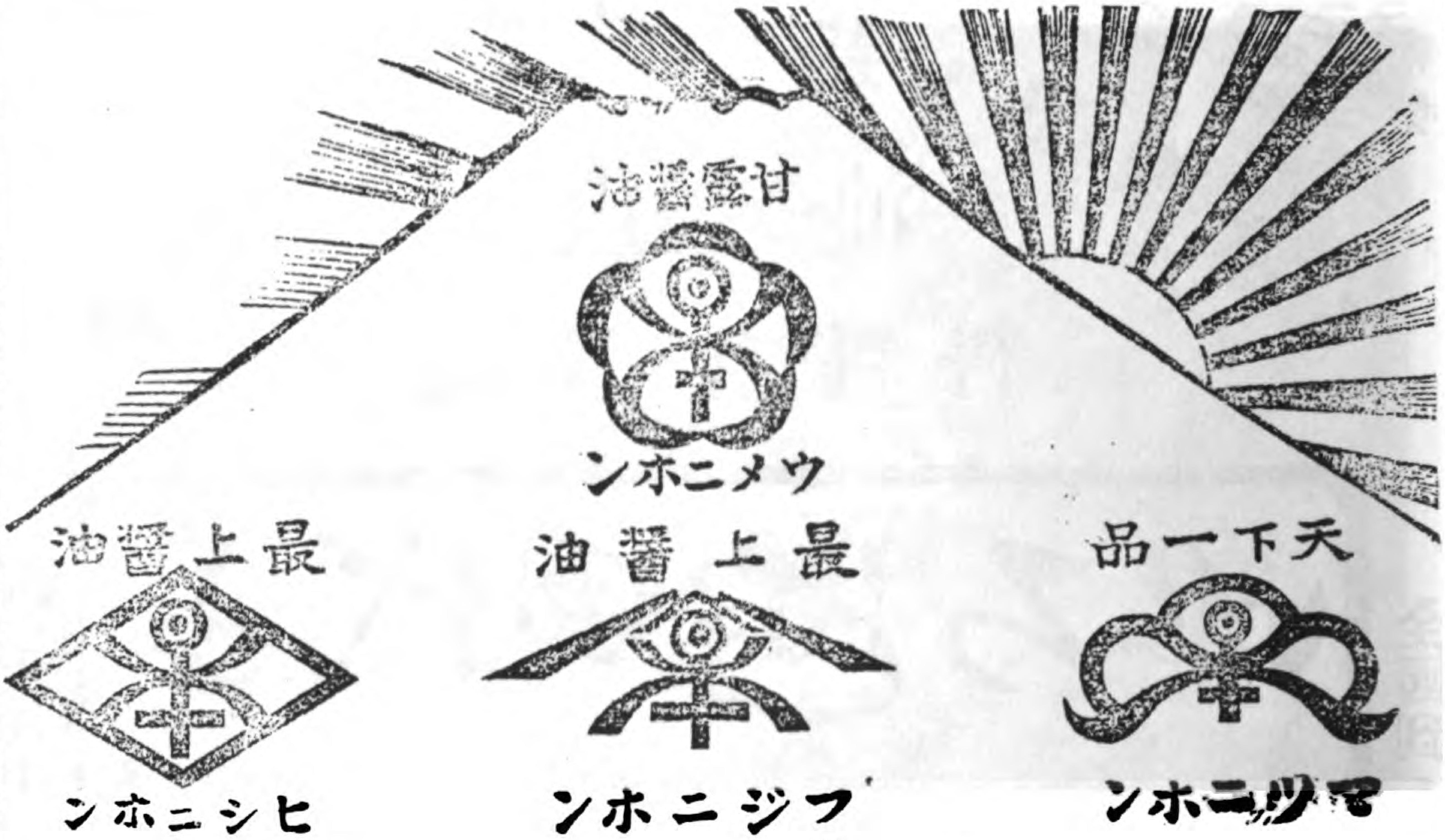






教頭 三輪田元道君

優等卒業生 岡部鐙子 千澤長子



特約販賣店

東京日本橋區北新堀町
合資會社日本醬油東京販賣所
（電話浪花一一四六番）

東京酒類問屋組合
其他
酒醬油仲買店及
各小賣店に於て
販賣致候

●最上醬油以下
數種あり

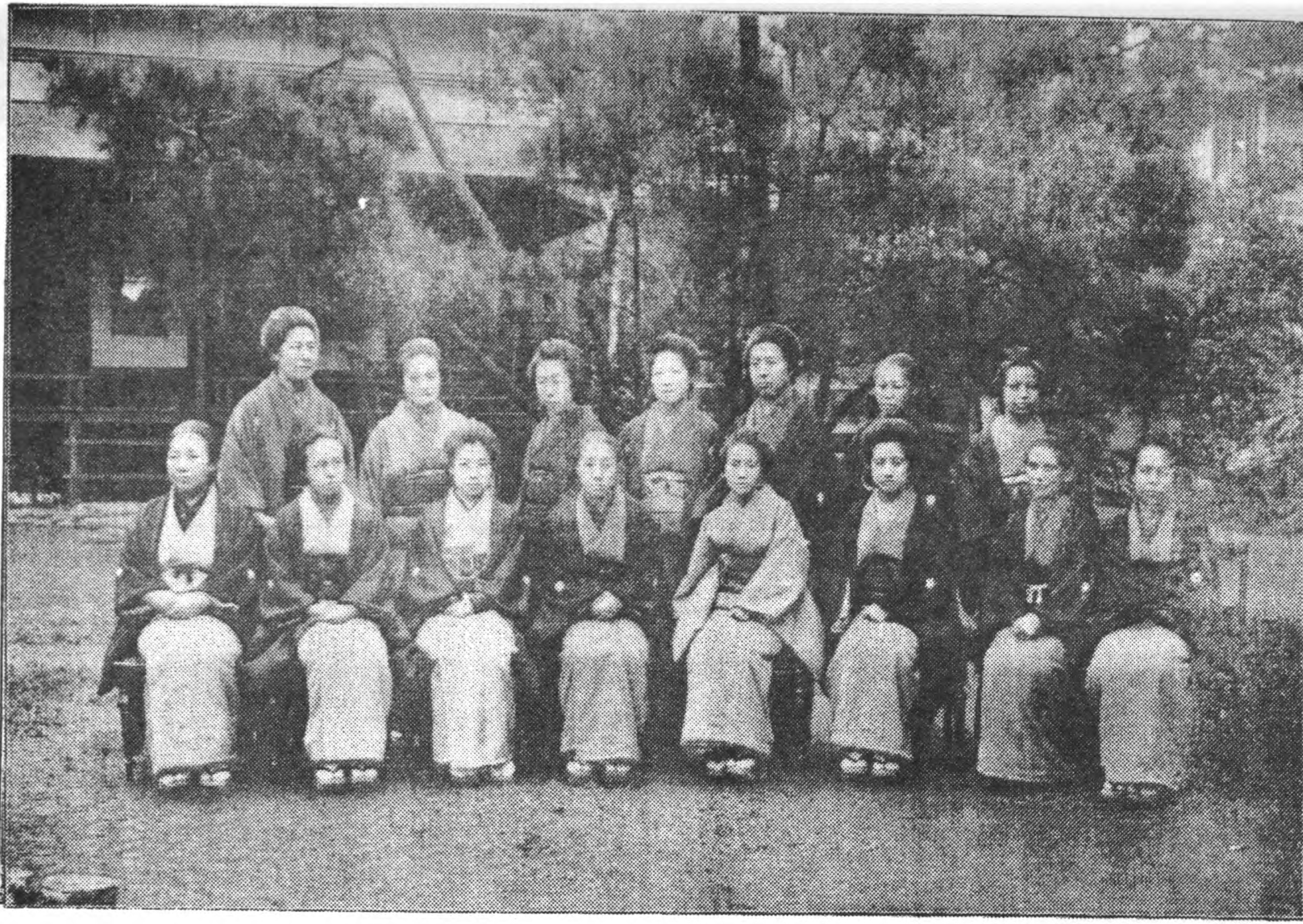
資本金壹千萬圓

釀造元

日本醬油釀造株式會社

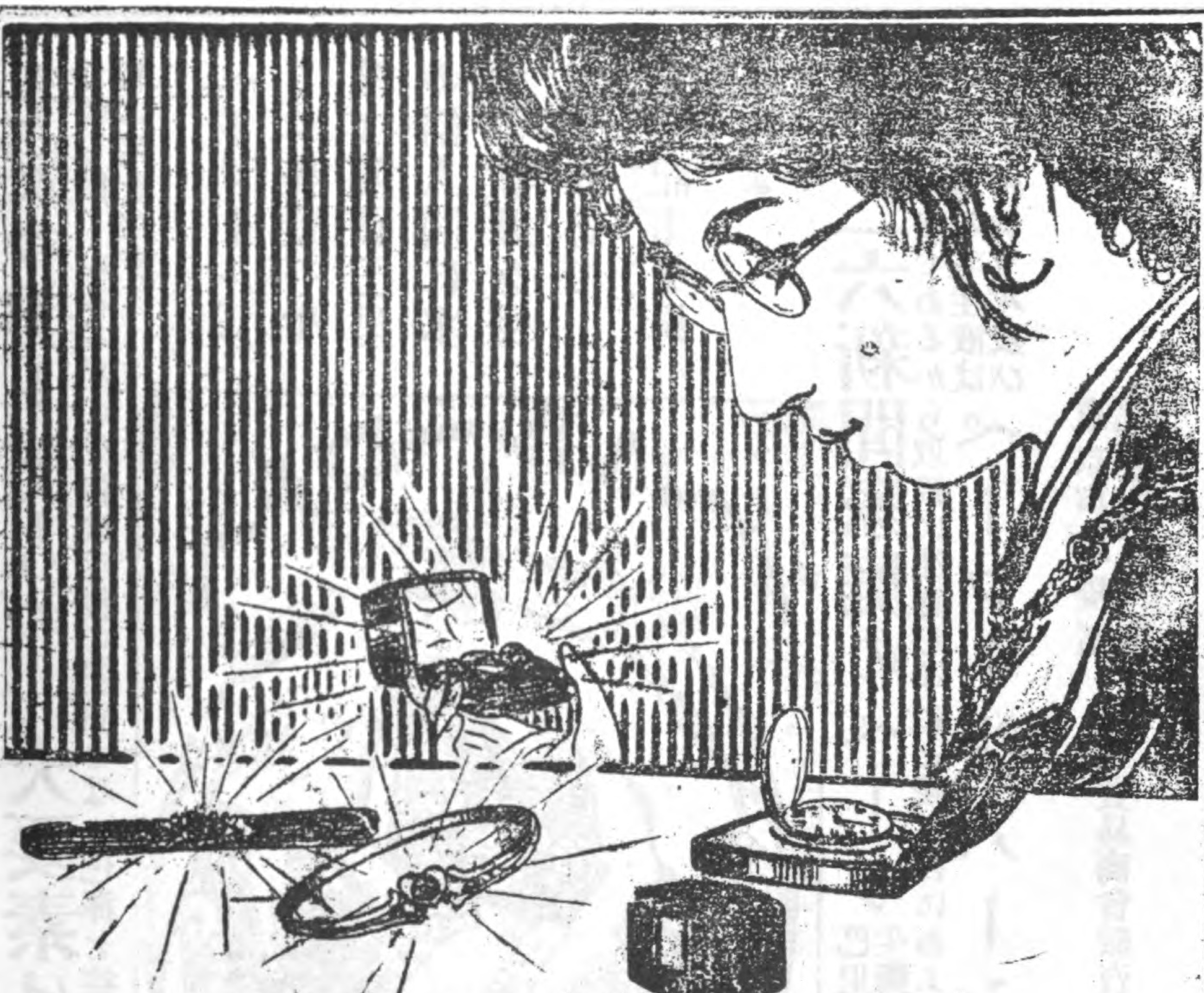
東京深川小名木川通　電話浪花（長三七七三番 一五九五番）

竹橋女學校の出身

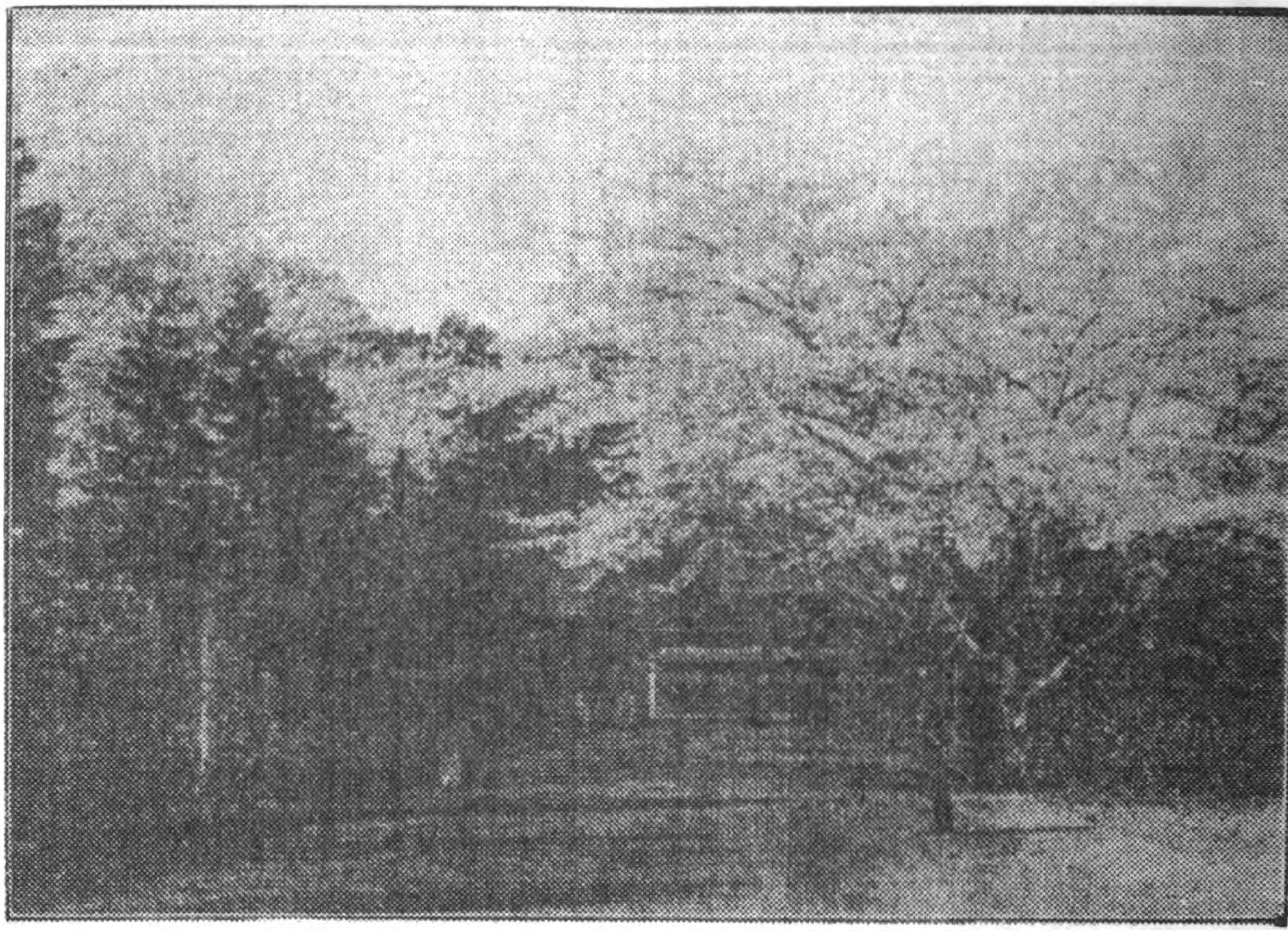


2 園田孝吉氏夫人 柱子君 4 穂積博士夫人 歌子君 6 鳩山博士夫人 春子君 8 菊池博士夫人 武子君

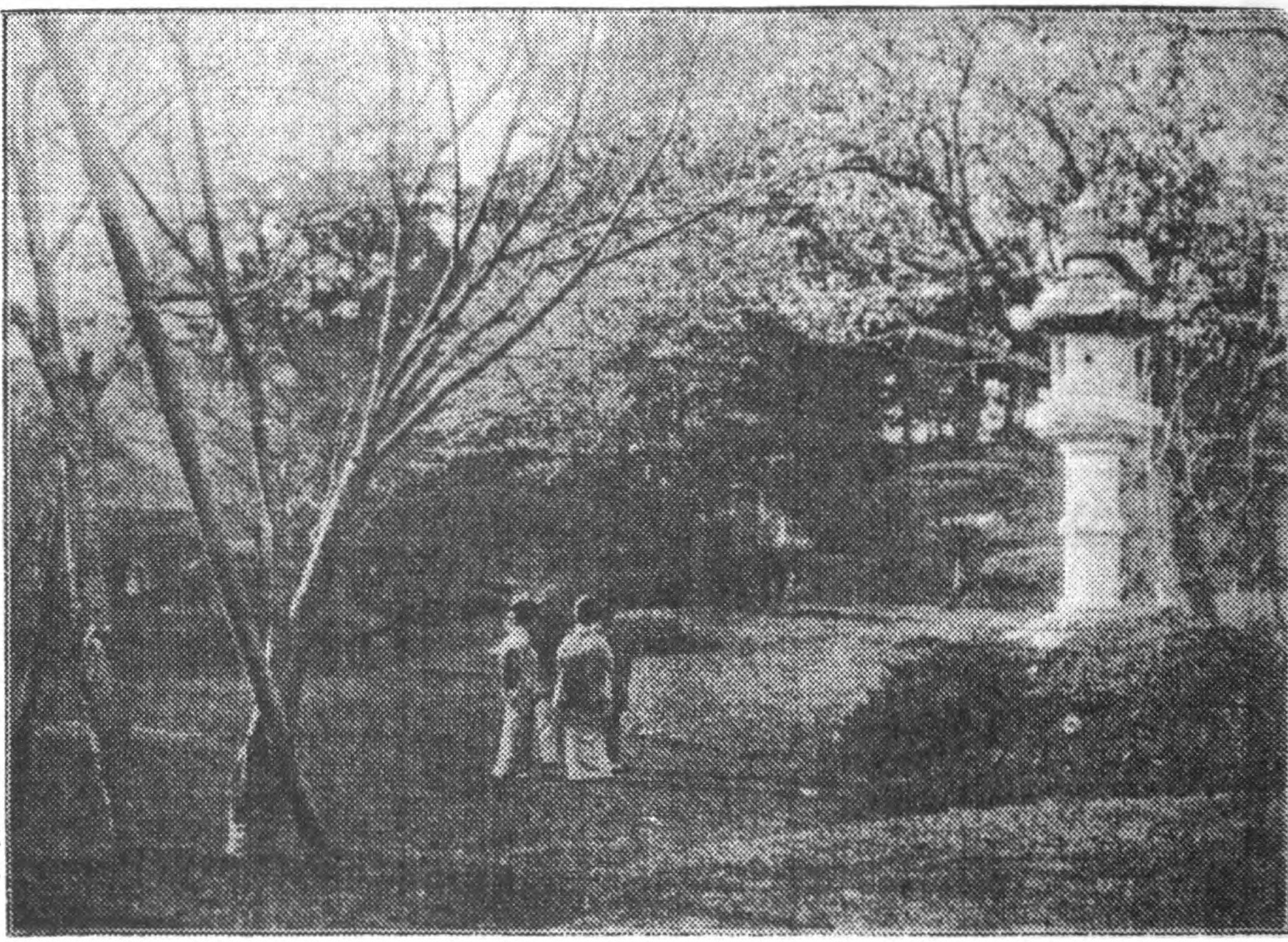
後列 3 片山博士夫人 龜子君 [illegible] 博士夫人 安子君 7 長谷川博士夫人 仲子君



花ざかり



德川公邸前の花



蜂須賀侯庭園の花

德川男爵撮影

汐干狩

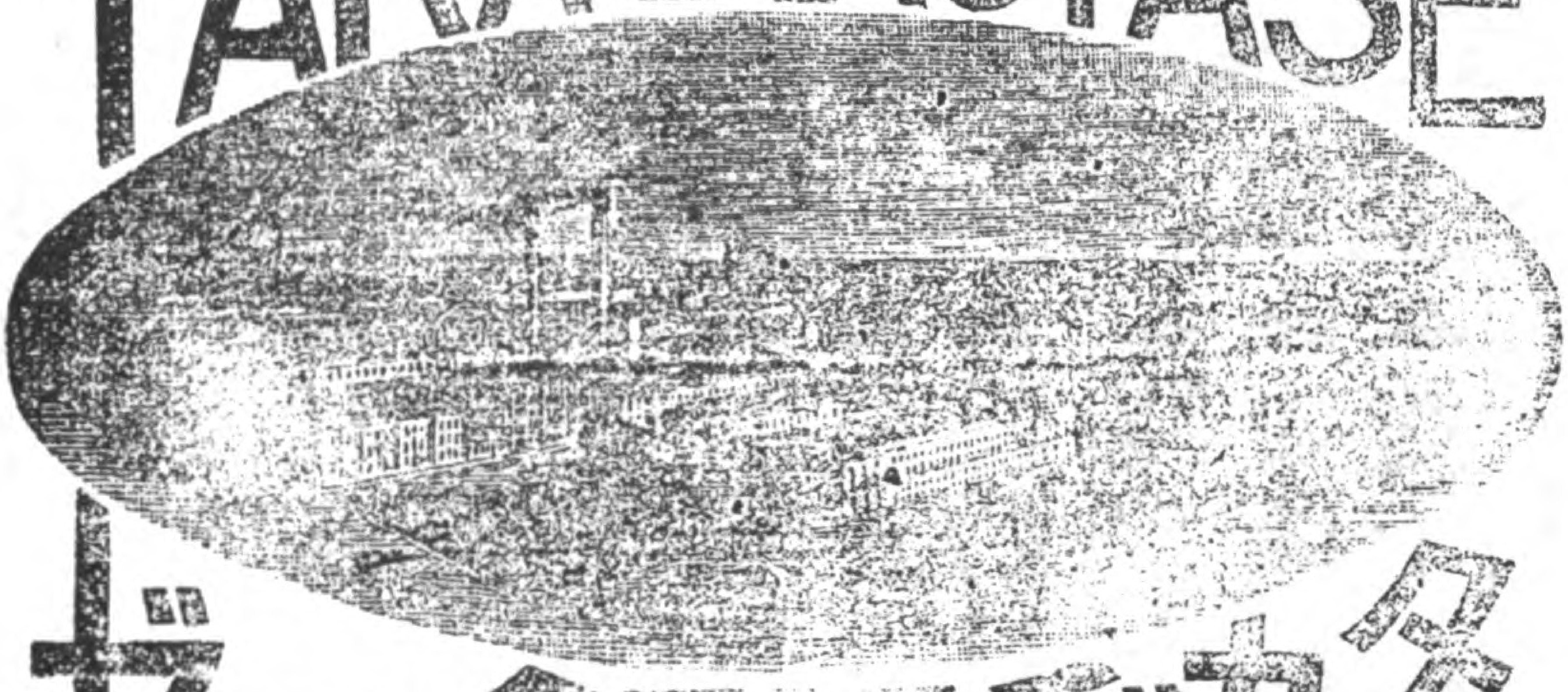




井伊直方君撮影

德川男爵撮影

TAKA-DIASTASE



タカヂアスターゼ

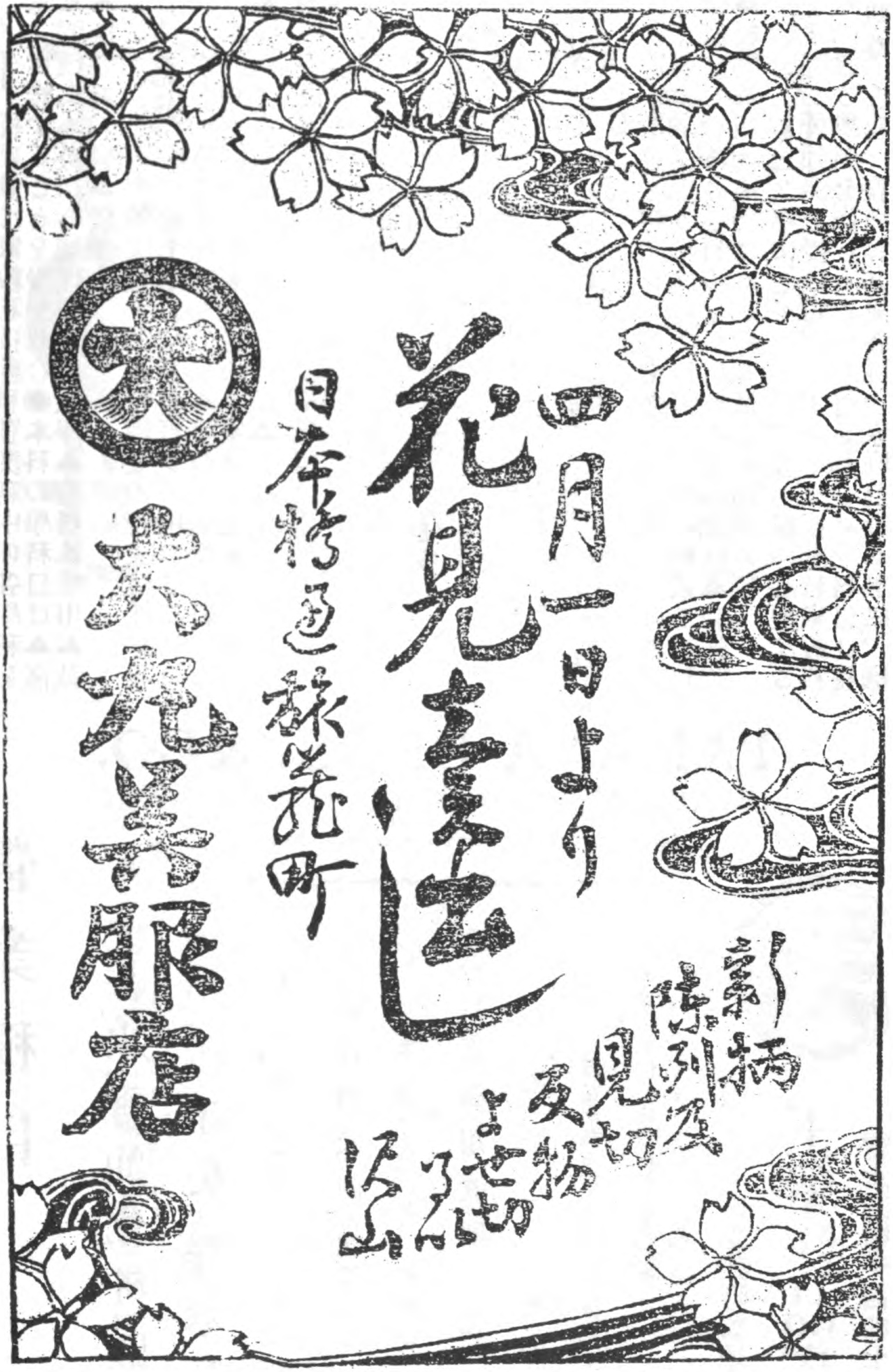
世界最大の製藥工場

パークデビス社は完全なる設備を有する世界最大の製藥會社にして、上圖は其デトロイトに於ける本社工場の全景なり。此他同社は加奈陀及英國に同一規摸の分工場を有し、世界の醫家が要求せらる、總ての醫藥品を製造す。

高峯氏發見消化新劑

タカヂアスターゼはパークデビス社の製品なり。完備せる裝置の下に熟練なる技術者に依り、製出せらる、本劑は品質純良、毎瓶強度均一にして、又其効力永久不變なり。醫師及藥舖諸彦！模造品製造者の誇大なる虚偽的廣告に誤らる、勿れ、世上本劑以上の實品なきは歐米及吾多數醫學大家の實驗報告に徵し確認せらるべし、需用者は必らず高峯氏タカヂアスターゼと指定せられよ、本劑は粉末錠劑水劑の三種として發賣せり各地藥舖にて販賣す

代理店　東京商茅場町　三共藥品合資會社


四月一日より
花見売出し
日本橋通旅籠町
大丸呉服店
新柄陳列及
見切反物
よせ切
沢山

春の日



つみくさ



おはなし

上野香畝君撮影

◎大懸賞案は◎

いよ〳〵來る五月一日發行の本誌に於て、賞品とゝもに發行すべし

繪さがし解答は左の用箋に限る

繪さがし	
住所	姓名

三越呉服店假營業場の建築

この工事は明治四十年八月起工し二百四日にして同四十一年三月竣工す、建築一體の方式は輓近のレエーサンス式により、内部の裝飾は適宜歐洲古今の諸方法を參酌したり、

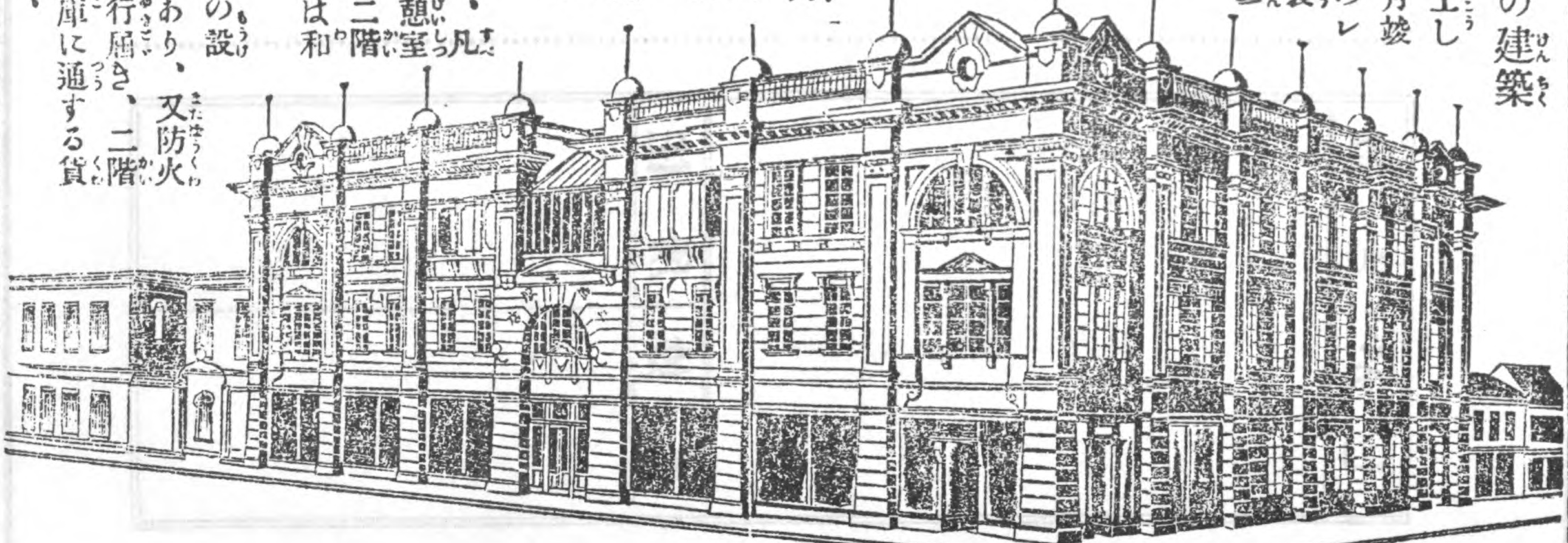
入口正面は駿河町通り三井本館に相對し、入口内玄關あり、敷石は凡て霰大理石及石盤石を用ひ、機方に下足室を設く、

陳列室は駿河町通り延長二十一間、西河岸通り七間にして高さ十尺、其西北隅の一角は特に通路を陳列室の間に設け從つて其一角は五角形の箱列室となり、晝間は通行自由あり、

賣場はその面積一階百六十六坪二階二百八十二坪、三階百四十七坪あり、

貴賓室及休憩室は三階を通して、凡て本館の東北隅を占め、一階休憩室は階内裝飾をゴシック式とし、二階は佛國路易十五世式とし、三階は和洋折衷式とす。

猶來客の餘興に供する爲演奏臺の設あり、其他寫眞室あり、化粧室あり、又防火及室内通氣の裝置もそれ〴〵行屆き、二階の仕入係室より三階の仕入係倉庫に通ずる貨物昇降に供する手働裝置等あり、





上圖より繪のうち四つを探し當てたる方に、左の方法により賞品を呈す　〆切　四月十五日

一等　勸業貯蓄債券

二等　編物模様圖按

三等　刺繍教科書

右の外解答者三百人迄優美なる繪葉書を呈す、

解答者中より抽籤にて等級を定む、抽籤は四月十七日午後一時本社編輯局にて行ふ、解答書の封皮には『繪探し解答』と記入ありたし、



四月一日より

一、第十五回新柄陳列會

一懸賞課題模樣圖案陳列
一懸賞當選優等印畫陳列
一新流行歐米雜貨見本陳列
一新古御婚儀用調度品陳列

一、寄せ裂れ見切り反物大賣出し

右新柄會は我國染織業の改良發達を圖るを目的とし今回全國機業家の賛成を得て是迄に類なく一層盛大に開催致し候ものに有之候尙は寄せ裂れ類は假營業場新築紀念の爲め特別澤山に準備致置候間營業奬勵の爲めと思召され新陳列場の御遊覽を兼ね賑々敷御來觀御高評を給はり候樣偏に奉願上候

東京日本橋駿河町

三越吳服店





理想と實際

文學士　三輪田元道

斯樣な問題を掲げましては、少々女子方には硬過ぎるかも知れない、從つて或は直接に利する所が無いかも知れない、けれども必ず將來になつてから必ず利するであらう、否、必ず益する所がある、斯ういふ事は自分にも覺えのある事である故に、聊か之に就て御咄いたさうと考へる、昔亞米利加に、左まで敎育を受けた事のない一女子が、頗る英詩を解する事を能くすると云ふので、それは不思議だ奇妙な事であると云つて、是が當時一つの問題となつて、醫者や學者の間で取り〴〵の評議があつて、それは精神病の爲であらうとか、或は神經に異狀を來して居るのであらうなど、區々で、殊に心理學者などは精神病に罹つて居るのであると云ふ風で、それから其と評判が高くなつたので、當時知

名のドクトルが診察研究せられた結果、全くその者は脳病に侵され居るといふ事は解つたが、分らないのは克く英詩を解するの一事である、ソコデ段々と其者の過去の歴史を調べて見た所が、此者は今を去ること十數年の前、或宣敎師の許に奉公をして居た、然るに斯宣敎師殿は頗る英詩が好で、時折庭園の散歩や椽端を逍遙する際に、毎時も英詩を朗吟したのである、その際其女子は水仕などの勞に服しながら、敢て聞くとは無しに其を聞き覺えしたので、別に習つた譯でも何でも無い、一體聽官といふものは、喩へて見れば寫眞機のやうなもので、一たび耳の穴から入つた事は、印象と申して確り寫眞のやうに寫るといふのも可笑いが、マア寫つて居るのであります、それを脳病のために此女子は思出して朗吟したのである、その習つたので無い證據には、それを書けと云つても書けない、又此方から書いて是は何であるかと尋ねても、之に答へる事は能う爲なんだのでも解る、日本でも昔は論語とか孟子とかいふやうな六ケしい書物を讀ませたもので、何だか讀んでも薩張と意味は解らない、解らないけれども讀ませたので、私も讀ませられた一人である、斯樣な敎育の仕方は今日では惡いとなつて居るが、兎に角その頃の敎育の仕方は、斯うやつて暗記せしめたもので、私も今尙ほ論語や孟子は暗記して居る、成程以前習ふ時には、何だか些とも意味も解らなんだけれども、偖今日となつて見ると、例へば、一つの文章を書くにしても、ア、論語に何とか云ふ句があつた筈ぢや、此所には孟子の彼の語が適當であると思うても、之を暗記して居なければ、一々その度毎に論語や孟子を引繰返すの手數と時間とを費さなければならぬ、けれども是等暗記して居りさへすれば其手數等は要しない譯である、斯樣に物に由つては、今が今役に立たないでも、將來になつてから用を爲すものがある、それ故に今私が御咄をする此事も其積りで御聞き、否御覽を願ひたい、

近頃の新聞や雜誌等を見ると、頻りに理想といふ文字が流行で、例へば、理想の家庭とか、理想の生活

とか、或は理想の良人など丶云ふ類が澤山に見えるが、それも結構でわらうけれど、之を一面より觀來るときは、甚だ現社會に取りて容易ならざる現象ではあるまいかと思はれる、尤も我々は斯理想とびふものを極めて置かねばならぬのである、併し現今世上で謂ふ所の理想なるものを見れば、先づ位が高いとか、金が澤山欲しいとか、立派な家屋に住みたいとか、どうか長壽を保ちたいとか云ふに過ぎないのである、是等は同じ理想と云ふ中でも最も下等に屬するもので、我々はモット高尙なる理想を懷かねばならぬのである、古昔の女子は如何なる理想を懷いて居つたかと云ふに、歷史上より云へば當時の演劇や小說に現はれたるが如き所の理想を懷いて居たのである、即ち何の誰は忠義の爲に、時としては自己の生命を賭してまでも盡した、又何某は家庭および良人に對して能く貞節を守つたと云ふやうに、約めて云へば忠義若くは貞節といふものを以て理想として居つたのである、是等の例は今一々擧ぐるまでも無い、古歌等の中にも見えて居る、併し今日より云へば、それは低い卑い理想であると云ふのであるが、兎に角當時女子の理想は此に一致して居たのである、故に其頃の芝居や小說は專ら意を此に注いだものであるから、今日六十歲以上の女子は、別に方今のやうな學校は無いから、重に是等の兩方面から薰陶せられたものである、又芝居の脚色も其所に基て居るので、換言すれば、社會の敎訓として演劇を仕組み、さうして眼から直ちに敎へたものである、それは今日唱ふる所の舊派の俳優が演ずる藝題を見ても知らる丶のである、單に芝居ばかりではない、當時の小說も又御伽噺も皆其である、故に社會殊に婦人社會は其感化を受けて、理想も却々淸く高いのであつた、然るに當今は非常に趣を異にして、盛んに個人主義といふものが唱へらる丶のみならず、君臣とは假りに設けられたる名稱であつて、少しも其間に輕重のあるものでは無いなど丶云ふてときへも叫ぶやうに爲つて來たのである、その手近な例を云へば、昨今下女の薄情に爲つた事は最も的證

である、給金を頂戴すればこそ召使であるけれども、其を戴かなければ、アカの他人で何でも無い、縦んば給金と云つた所が、僅のものを貰ふのであるから、何うして左様働けるものでは無いなど丶云ふ事を口走るのを屢次耳に致すが、是といふも畢竟は、利己主義即ち個人主義を餘り世の中で唱導するに基くのである、それが爲に何うも何處の家でも下女の拂底を訴へるのであるが、その利己主義に騙られて長居をしないからである、尤も之は一様に言切れない場合もあらう、それは其家庭の事情等にも由る事があらうけれども、先づ一般に下婢の薄情になつたと云ふ事は今日世間に認められたる事實である、否、單に下婢のみでは無い、今日堂々たる政治家と稱する者までが薄情に流れつ丶あるので、例へば、國家の重要問題を論ずるに方つても、毎時も自分の立場から割出して、毫も國家の休戚などには思ひ及ぼさないのである、此の如き世の風潮であるから、三歳の兒童に至るまでも皆この濁浪の渦中に卷込まれつ丶あるのである、殊に青年の女子などの心の裡を透して觀れば、何うかお嫁に行くなら外交官の所か、軍人の所か、若くは教師のやうな方の許に行きたいと考へて居る、その考は惡いとは云は無い、けれども多くの女子は自己の貫目を覺らない、凡て世の中の事といふものは、自己が拂つた丈の物を貰へば宜いのである、それをより以上求むるのは貪慾である、僅か一厘乃至五厘の賽錢を抛つて、何うか家内安全、延命息災、商賣繁昌など丶神佛に向つて祈願するものがある、けれども是は願ふ者が無理であるといふ事は申すまでも無い、それは皆樣御承知の事である、といふものは、僅かの賽錢で多くを祈る、即ち貪るからである、換言すれば、自己が拂つた物よりは、より以上の物を求めつ丶あるからである、どうして其結果が美く行かう筈がない、而も多くの女子は此の如き要求を爲しつ丶あるので、若しも其要

求を充たす事が出來ないと、遂には

煩悶を懷き華嚴病

などいふ一種の病氣さへも惹起すのである、是は單に我國のみでは無い、世界を通じて文明國の有する弊である、

どうも現今の女子は餘りに望が高い、而して其腦裏に描く所の理想なるものは、その眞實の理想では無くして乃て空想である、彼の加茂の長明翁の方丈記にあるゴワウの如きは、實に品性の高いもので、別にアノ境遇に在つて失望も無ければ煩悶も無い、實に見上げた者である、之に反して當今は、寧ろ男子よりも女子の側に此傾向が最も多い、といふものは、是までの女子は、縱ひ狹くとも家庭の小天地に安んじて居た者であるが、今日は家庭以外に頭を出して來たのである、ソコデ實際は女子に於ける社會上の位置の程度が分らない、故に彼を望んで成らざれば失望し、此を企てゝ及ばざれば華嚴病に陷るといふやうに爲つたのであるから、女子の爲に餘計に注意すべき時代と爲つたのである、

云ふまでもなく理想は空想であつてはならぬ、是は往昔のみでは無い、明治の時代も亦同樣である、併し維新の後、殊に近年に至りてよりは、どうも凡て昔の名稱などを唱へては古臭くて不可ないと云ふ考へよりして、何か新しい名前は有るまいかと云ふので、ソコデ理想即ち英語でアイデアルと云ふ語を捉へ來つて、物珍らしさうに之を唱へるのであるが、サテその內容はといふと、依然忠孝義節貞操などいふ事に外ならぬのである、一體理想そのものは、

道德上の爲に竭す

といふものでなければならぬ、人の爲になると云ふ行で無ければならぬ、當時衆議員の議院に濱口擔君と

いふ人がある、此人は曾てケンブリッヂ大學に學んだ人であるが、まだ其校に在學中、日本女子の事に就て彼地で講演したいと云ふので、私の知己なる自己の親戚濱口某氏まで材料を送つて呉れと云越されたので、某氏より私まで申越されたから、及ばずながら材料を蒐集して送つて遣りますと、それらを以て擔君が講演せられ、軈て其講演が了ると、席末から一人の令孃が直ちに濱口君の傍へ來りて言ふやう、貴君は日本の濱口さんを御存知ですか、私は小泉八雲さん（英人にして日本に歸化し、曾て文科大學の教授を勸め、且つ日本の文學および事情等に精通せられし人、今は亡し）の著書で見たのでありますが、その日本の濱口さんは、或年銚子の濱に海嘯のあがつた時、自己の財產も生命も斯危難のあるにも拘はらず、只ある高い丘の上に炬火を焚て衆くの人々に便宜を與へ、また其丘陵の麓にわりし御倉米を出して罹災民を賑はし、事が收まつて後、藩主へ自首して出て罪を乞ふた所が、却つて藩主から御褒めがあつたといふ事實であります、之を聞くと濱口君は、それは私の祖父であると答へると、その令孃は心の底から喜悅の情を表はして、實に貴君は私の理想の人であると申して握手したさうである、我國で此の如き場合に、貴君は私の理想の人である抔と申したら、必ず一種異樣の感を惹起すであらうけれども、その令孃は決して卑しむべきやうな心持は有つて居らないのである、右に咄すが如く、事實は誠に單純なるものであるが、深く之を研究する時は決して輕々に看過すべからざるものがあるのです、即ち自己も他の者と同じく海嘯の災厄に罹りつゝあるので、先づ大抵の者なら他人は扨置き、自己の生命と財產等に氣を配るが尋常であるのに、その濱口翁は毫も夫等を顧みないのみか、殆んど自分は海嘯の襲



來つたのを知らざるものゝ如くで、專ら衆くの人の身の上にのみ心を注いで、特に丘陵の上で炬火を挾て衆人に便宜を與ふるさへあるに、この掛替の無い自己の一命を賭して御倉を發き、さうして衆人の饑餓を救ふといふ事は、却々尋常一樣の人の爲し得らるゝ事で無い、ソコデ其令孃は濱口翁の事蹟を讀んで深く自から感じたものから、それを紀念せんが爲に室内の或油畫に濱口と名を命じて、今に至るも朝夕愛翫嘆賞して居るとの事であるが、眞の理想は是で無くてはならぬ、古來理想の高い方は、孰れも皆他人の爲を計らない方は無いのである、例へば、お釋迦さんの如き、一切の衆生を濟度したいと思召し、また基督は我敵を愛せよと仰せられたのでも分る、此他ソクラテス氏の如きは、當時盛んに道德の事を說いて世人を感化しやうとした所が、世人は餘りに其說が四角張つて居るのみならず、七面倒で聞くも嫌だと云ふので、ソクラテス氏を捕まへて、毒を吞ませるが其でもまだ八ケましい事を說くかと云ふと、ソクラテス氏は其でも止めない說くと云はれながら、悠然として毒を仰いで歿くなられた、それから皆樣御存じの孔子さんも同樣で、生涯世の人の爲に仁義の道を說き廻られたのである、要するに偉人といはれ聖賢と尊ばるゝ



方は、孰れも皆

我を捨て、人の爲を計らる、のである、以上は男子の側であるが、女子の側にも亦斯ういふ人がある、即ち

ナイチンゲール女史の如き

は其人である。女史はクリミヤ戰爭の時に、自から看護婦となつて親しく將卒の負傷を劬つたのである、また我國往古の和氣の廣蟲の如き、孰も女性として人の爲に盡したものである、然るに明治の今日では之が大いに反對となつて、卑近な例が、電車の中で、兎角女子は男子に對して席を讓つて吳さうなものだ、若しまた自分が已に腰をかけて居れば、たとひ老人が來ても知らぬ顏をして居るといふやうな事は往々見受る事であるが、どうかお互に公徳を重じて戴たいものだと思ふ、即ち電車の中でも自分が人に除て貰つたよりは

除けてあげた方が理想が高い

のである、仕事も人に仕て貰つたよりは、自分で仕了せた方が貴いのである、

最後に尙ほ一言して置きたいのは、昔獨逸の片田舍に一つの小學校があつて、其所の或一人の先生は、每時も途中で生徒に出遇ふと帽子を脫して禮をする、或時その友人は先生に向つて、それは甚だ先生の威嚴を損するであらうと言はれると、先生は少しも誇る氣色もなく、私が每に脫帽敬禮するのは、一は自己の赤子の如く之を愛するのと、一は將來此中から如何なる偉人傑士が輩出するやも測られぬから之を敬するのであると云はれたさうだが、後果して其兒童の中から、宗敎改革を以て名高きマルチンルーテルが出たといふ事である、今この讀者中にも、彼の紫式部などのやうな偉丈夫が將來輩出しないとも限らぬので、私は今玆に尊敬を拂つて置く、ソコデ必しも紫式部や淸少納言のやうな偉い人物とお成なされといふ譯では無い、例へ商家であらうが、又は工匠の妻君とならうが、必ず高く淸い理想を有て世に立れんことを切に望むのである、

小兒の不平

宇留野正勝

一口に小兒と云つても分らない、即ち一歳二歳の者もあれば、また五歳乃至十歳の者もあるので、中〻その階級が廣いのであるが、今こゝに話題とするのは三四歳以上の者を指すのであるから、この事は前以て承知して居て貰ひたい、

予はつい先頃まで教職を帶びて靜岡市の某學校に在つたもので、御承知の如く三國一の富士山といふ秀麗なる山岳の麓に住んで、日夕これに對して聊か自から慰め自から誇ゆる所があつた、先づ其は兎も角として、自分が假住所をして居つた家の庭前に小さな築山が造られてある、其所へ惣領の勇といふ當年數へ歳四才になる伜は、毎々富士山に登ると稱して、足元あぶなくも登山を試みるのであるが、その卑い方には四五日の後登ることが出來たので、その日は私の歸宅するや否や、その小富士に登つたことを誇り顔に、廻らぬ口で咄しますから、大いに其意氣を買つて褒めて遣りますと、今度は大富士へ登つて見せると言つて力んで居るから、傍らより大いに助勢をしますると、乃て夫より五六日の後、突然書齋へ走つて來て云ふやう、坊は毎日〳〵オープチ(大富士)へ登るけれど、登れないやと、着物の前面は全で土塗れになり、淋しき憂の顔の中にも何處となく不平が認めらるゝのである、斯樣な場合に世の多くの母親は、直ちに其着物を汚したる事にのみ眼を注いで、一も二もなく小言を云ふのであるが、それは甚だ宜しくない、予は此瞬間に大いなる

兒童教育の教訓

を得たので、大いに之を慰めてやつた所が、如何にも他日の成功を期すると云つたなやうな風で遊びに出で行つたが、その後で熟々考へて見るに、一體小兒の行爲といふものは、是を或點より見るときは動物の本能性を帶びて居るものであるが、また或方面から觀るときは實に天眞玉露である、併し之に對し

て單に無邪氣であるといふやうな考で、之を雲烟に附し去るのは、決して父母たる者の責任を盡しつゝあるものと云ふことは出來ないと思ふ、况して父母たる者は、小兒の監視者であると同時に之が奬勵者でなければならぬのである、成程着物を汚すといふ事に就ては、徐々に之を矯正しなければならぬのであるが、それが爲に他の半面に於ける、兒童の進取的氣象の萠芽を挫くといふことは、決して賞むべき仕打でないと思ふ、元來兒童といふ者は、常に何か不平不滿のある時には、必ず最も己が親しき者の許に來つて之を訴へ、而して己が鬱憂を晴らさうとするものであるから、一たび之が訴へに接したる所の父母は、最も注意して丁寧にその訴へを裁斷して遣らねばならぬのである、固より親子の情として、無暗に己が愛兒を叱るのは、誰しも好む所ではないが、時としては何か忙しさに伴なはれては、前後の考もなく、はたまた其意味が何であるかをも問ひ糺す遑もなくして天邊から小言を言ふやうなことは、隨分世間ありがちの事である、斯樣なことは左程咎むべき事では無いやうであるけれども、是はやがて兒童の教育上に最も大いなる妨碍を來すの一因ともなるものなれば兩親殊に母親は愼しまなければならぬ事である、

例へば、最早我々のやうに成年以上に達した者ですらも、自己の心中を打明かし、又は秘密を洩して之が同情を求めやうとする時に方りて、若しも其人が斯る不親切なる仕打があつたと假定してみれば、爲に自己の感情を害することは如何ばかりであらうか、啻に感情を害するばかりではない、翻つて其人を怨むなどゝいふ事は決して珍らしく無いのみならず、不平不滿は益々募り來りて己を嘆ち、果はあられもなき邪推を逞うする事は決して尠なくない、斯樣な適例は、吾人が是までに幾度か見聞を重ねて來た事で、讀者の中にも或は御同感の御仁もあらうと考へる、之に比すれば淸淨無垢殆んど八面玲瓏たる

兒童の事であつて見れば、一點の秘密の邪推のと言ふやうな事のあるべき筈は無いのであるが、而かも彼等が來つて其父に訴へ或は母に告げ、若くは友人等に語る所以のものは、取りも直さず是兒童の心裏に於ける單純なる秘密であると云つて差支えなからうと思はれる、その

　愛すべき單純なる秘密

を訴へて、多少これに依つて自から慰藉を得やうとするのにも拘はらず、毫も其事を思はないで、一言の下に之を斥け、或は口穢なく之を罵るなどゝいふ暴卒の擧動に出でたときは、折角それまで前方に一種の光明を認めて走つて居つた所の兒童の精神は、此に忽ち一頓挫を來たして了つて、是まで玉のやうに光り輝やいた心も、いつしか漸々と失望の雲が掛つて、卑屈となり、柔弱となり、遂には憂鬱退嬰となつて、再び進んで母に訴ふるといふ勇氣さへも亡くなつて了ふやうになるのである、一例を以て之を喩ふれば、彼の樹木の糵が漸く地上に芽を出した時に、上より重き石を以て無慈悲にも之を壓しつけるやうなものである、如何して脆弱なる天糵が石の重量に堪へ得られやうや、折れて碎くるは當然のことである、縱んば折れて碎けざるまでも、一たび石の重量に壓せられて曲りくねつたものは、長じて見ても決して棟梁の材とはならぬ、僅に椽か押緣位にしか用ゐらるゝに過ぎないのである、

　言ふまでもなく、善良なる國家の柱梁は、最も完全なる家庭と國民教育とに由るものであるといふ事を知つたならば、將に第二の國民の母たらんとする所の諸孃は、自から顧みて其責任の重大であるといふ事を確かに認めらるゝであらうと思ふ、最近十數年の間に、我國女子の勢力といふものは非常の發達である、この分に進んで行つたならば、女子の敎育は男子の手を離れて

　女子の手に一任

しても差支へなきに至るであらうと豫期して居るのであるが、今日はまだ其時機でない、然らば諸孃が

今日より一層奮勵せられて、克く女子たるの本分を盡し得らるゝやうに爲つたならば、我國家の進運は益々大なるのみならず、他の半面に於ては、男子が安んじて進取的事業を營むことを得るやうになるであらうと考へる、であるから、たとひ諸嬢が、後に至りて愛兒もなく又生徒を取扱はないとしても、尙ほ愛すべき弟妹等の教育は、一に其手によりて導かるゝ譯ではあるまいか、而かも叨りに子女や弟妹を叱して、其極國民として缺くべからざる進取的の氣象を失ふに至らしたとあつては、實に國家に對して不忠實の次第ではあるまいか、

去れば若しも子女たる者が、我々に向つて不平不滿を訴へて來た場合には、如何なる風に之を裁斷したら宜いかといふに、元來不平なるものは、その良心の發達と慾望の發達とを妨げられたるよりして生ずるものであるから、よく／＼其邊の事を察して、明らかに之が判決を下して、成るべくだけ之が處置を誤らないやうにせねばならぬ、例へ、如何なる善行であつたからとて、其性質の如何をも究めないで無暗に之を賞めるのは宜しくない、何ぜなれば、未だ理解力の薄弱なる子女に向つて、此上もなき賛辭を與へると、輙もすれば高慢の心を生ずるもので、この高慢の裏面には失敗といふことが潛んで居るのである、之に反して、惡い行爲だからと云つても、是また濫りに叱責するのは宜しくない、元より惡行といふのであるから、無論叱責すべき價値はあるやうなものゝ、それも性質によるので、強ち叱責せねばならぬと云ふものゝみでは無い、と云つて猥りに之を寬恕するといふ事は大いに考慮を費さねばならぬ、何故なれば、縱んば些細の事でも、惡い行爲は何處までも惡いのである、併しそれには自から程度があるけれども、惡いといふ點に於ては敢て甲乙は無いのであるから、宜しく之に向つては將來を戒しめ、且つ之を矯正しなければならぬのであるか、而かも其性質をも問はずして之を寬すやうな事があつては、まるで薪に油を注ぐやうなもので、ます／＼

其惡性を助長するのであるから、その邊は餘程注意せねばならぬのである、

一體、小兒といふものは、兎角物に慣れ易い性質を有つて居るもので、若しもその父兄たる者が、或機會のために一たび賞罰を誤つても、決して小兒の方ではさうとは思はない、ソコデそれを宜い事と心得て居て、之を爲せば賞められる、彼をすれば叱られるといふ風に了簡して居る、然るに今度は前回と反對の結果を來たしたなど丶いふ事があると、小兒は如何にして宜いのか、頗ぶる其撰擇に苦しむといふ事になる、啻に撰擇に苦しむといふよりは、寧ろ何んでも搆はんといふやうな自暴自棄を發さないとも限らないのである、一たびさういふ心持を起させたからは、中々これが矯正は行はれない、所謂執拗根性になつて、猜疑心やら嫉妬心が嵩じて、迚も眞人間の交際は出來ないやうに爲つて了ふのである、併しその根元を尋ぬれば、幼少の時代に、之が善惡是非をも辨へずして、無暗に天邊から叱りつけるといふ事が基となつたので、その罪は父母若くは長上のものにあると云はねばならぬ、

要するに小兒の不平不滿といふものは、多くは其慾望を妨げられたのを悲しみて發するものであるから、そのやうな時は克く彼等の腑に落ちるやう、例へば、坊はまだ小いから出來ないけれども、あしたも又そのあしたも、少しづ丶爲るときは、急度しまいには出來るのであるから、今日はそれで止めておくが宜い、若しもお傷をすると不可ないから、今から外の遊びをしなさいといふ工合に、成るたけ其進取的の氣を挫かず、心持を他へ轉じて快く遊ばせるやうに仕向けなければならぬのである、是は予が纍の小兒の不平に接してから、屢次實驗した所の工夫であるから、世の父兄たる方、殊に母たり姉たる方には、時に臨んで試みられたならば、必ず得る所の多い事は保證いたします、

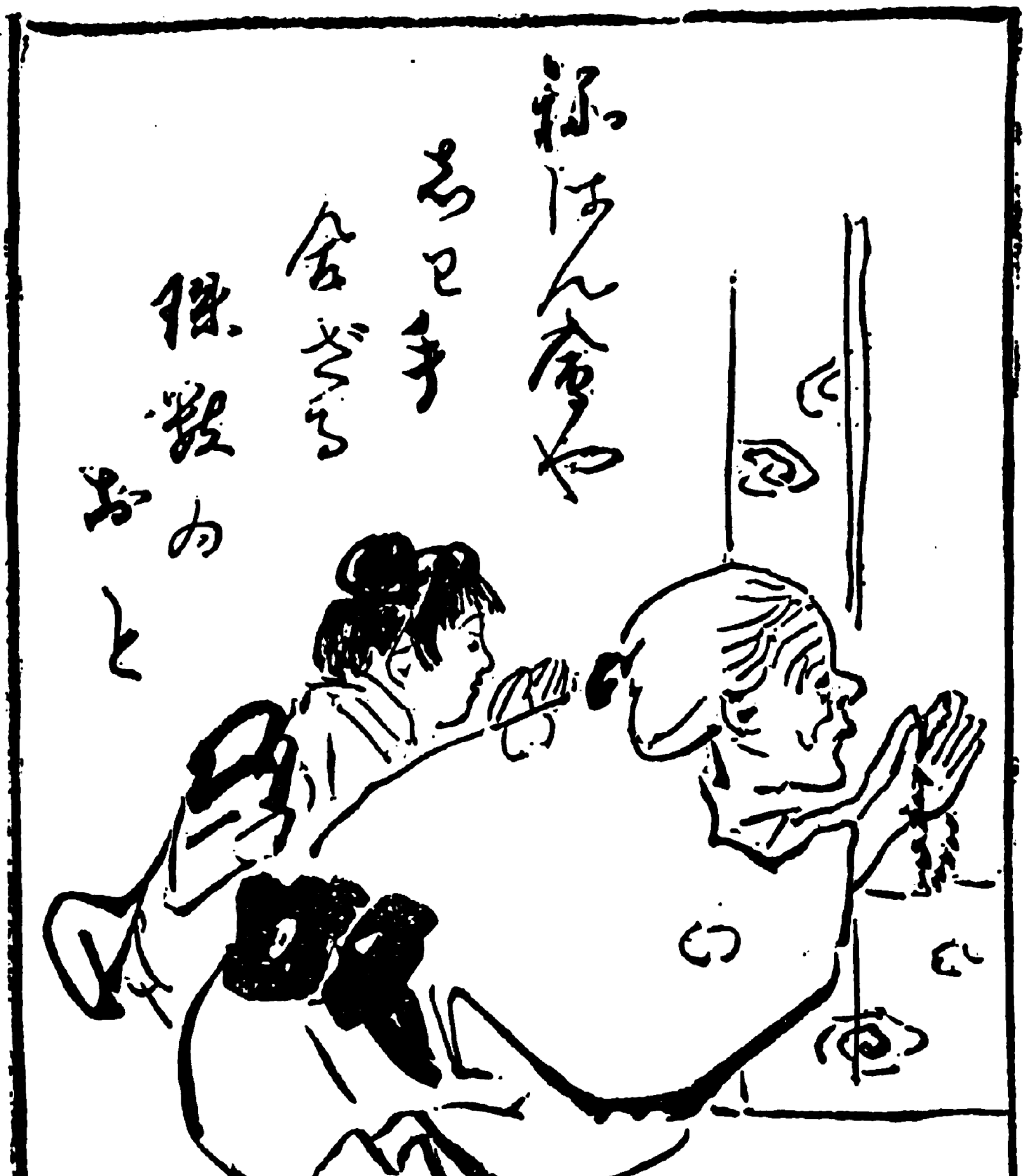
最初の敎育所とは何處か

文學士　村上辰午郎

近年は敎育殊に國民敎育が進歩普及した爲に、男女ともに眼が開いて來たのは、これ全く明治聖代の賜物と深く感謝しなければならぬ、そこで女子方も非常に讀書力が發達したのであるが、偖その喜んで讀まるゝ所の書は如何なる種類のものであるかと云ふに、多くは小說または其に類したものゝやうに思はれますが、この邊は少しく注意いたしていたゞきたいと思ひます、殊に兒女の敎育といふことに就きましては、その母親たる者は非常なる責任のあるもので、その兒女を善くしやうが、又惡しくしやうがそこらはその母親次第であると言つても宜いのであらう、西洋の語にも、家庭はその兒女の最初の誕生所であると同時に、また最初の敎育所であると云つてある、ところが、その最初の敎育所に於ける敎育者は何人であると云ふに、更めて言ふまでも無く、その兒女の父母である、併し父たる者は、晝も夜も其子を育てるといふ事は出來ない、何故なれば、毎時も外に出て勤むるからである、然らば夜も晝も始終その子の側を離れずして育てる者は、勿論母親である、この故に、その母親たるべき者が、或は賢であるか愚であるか、若くは敎育があるか否かといふ事が、大いに其兒女の爲人如何に影響する事は、明らかな次第である、若しもその家庭の敎育が十分で無いならば、どれだけ學校の敎育が行屆いて居てもそれは迚もその生徒の性質を十分に正し得るものでは無い、

私も前年から今に至るまで、諸所の小學校や中學校、または女學校等に就きて、その生徒の氣質は如何であるやと、また一方には其兒女の家庭の如何とを調べて見て居りますが、どうしても、その母親の氣質と、その兒女の氣質とは非常に關係して居るこ

とを認めました、
雀が鷹の子を產む
といふ說のやうに、母が無敎育であつて其子が他人に優るといふものは、まづ十中一二もあるかなしである、それからまた或學者の取調べに依れば、男の子の氣質は、大いに其母親に似て居るとの事である、若し果して然うであるとすれば、女子たる人の責任は非常に大いなるものと云はなければならぬ、即ち今日の女子の心がけ如何は、次の代の其家の主人の氣質を作るものである、いや、家ばかりでは無い、その國民の氣質の如何に影響を及ぼすと云ふても差支へが無い、といふよりは、それが事實である、是等の事を考へて見るならば、後日人の母となるべき今日の女子たる者は、その心がけに於て、また其行に於て、大いに愼しむ事が無くてはならぬと思はれる、左すれば、書物を一つ讀むにも、口を一つ利くに



も、大いに心を用ゐて、書物ならば其身の爲になるやうなものを讀むやうにして欲しいと思ふのであるとは云ふもの丶、何も私は絶對に、小說は讀んではならぬと、そのやうな窮屈な事を云ふのではない、小說も時としては宜しい、直接自身の爲となるやうな書物を讀んだ揚句に、少し慰みに小說を見らる丶事ならば、それを彼此と非難はせぬが、どうも此頃の女子方は、却々左樣でない、成程學校で修學の間は一生懸命に勉强せらる丶、また其でなくてはならぬのであるが、然し學校を卒業でもすると、それで

身の爲の學問は終りを告げた

といふやうな了見で、讀むものはと問へば、稗史小說、新聞ならば第三面の記事、即ち何某の家へ盜賊が入つたとか、何處の河へ人が溺れたとか、そのやうなものばかりを見て、喜んで居らる丶方が非常に多いやうに思はれる、學校を卒へたから、それで家の主婦となり、又母となるべき資格がついたものである、と思はる丶ならば、それは大いなる思違ひと云はなければならぬのである、どうしてまだ〳〵、小說などを讀んで喜んで樂んで居る頃では無い、これまで小說を讀んだ、その時間のせめては半ばなりとも、己れの任務を盡すところの資となるやうな書物即ち一口に云ふならば、娛樂的性質の書でなくて、

修養的性質の書物

を讀むこと丶し、新聞の第三面の記事を讀むよりも同じ讀むならば第一面の社會の有樣、各國互ひの關係などのところを讀んで知つて貰ひたいのである、歐米各國では、女子が學校にゐるその間は、主として自分の爲の勉强であるが、さて一たび學校を卒業してからは、

主婦として又親としての心得方

などを熱心に研究し、このやうにしたならば一家を整理するに都合が宜からうか、如何にしたならば婢僕を公平に取扱ふことが出來るか、あのやうにしたならば小兒を克く仕立てることが出來るであらうかと、それのみを心にかけて、日もまた足らずといふ

遺憾である、之を我國の女子の現今の有樣に比較したならば、その目方の違ひは如何程であらうか、大いに我女子は赤面の至りと言はなければならぬのである、實に彼の國の女子は、我女子に比して、智識の程度が高いことも、これはその筈である、して見たならば、今日以後、實は最早少々遲れて居るのであるけれども、爲ぬには優るのであるから、かくと氣が付いた以上は、少しも猶豫なく、その惡い所は改めなければならないのである、

何も私は、たゞ言葉の上でのみ言ふのではない、心から言のであるから、徒に吾は世界の一等國の班に列なつた、東洋の旗頭たる日本に住で居るもので、しかも二十世紀の女子たる者の體面を保つには、決して忽せにはして居らぬと、或は言るゝかも知れませんが、それは或はさうであらう、またさうなくては叶はぬ事であるが、それと同時に、私が前段に述べ來つたところの私の心持をも酌み取つて、ますます日本女子の特性を發揮せられんことを切に望むのである

家庭の三聲

松田龜六

家庭の事に就ては殊に近時世人の注意を拂ふやうになつて來たので實に慶ぶべき事であるが、單に家庭とは云ふものゝ、その中には衞生の事もあれば經濟の事もあり、また敎育の事もあれば裁縫の事もあり、その他まだ〳〵數へ來れば頁を要するのであるけれども、たゞ無暗に夫等の項目のみを擧げて見た所が、讀者には何等の益する所は無いのであるからまづその事は他日項を分けてお咄する事として、一體我國に於ては、如何に家庭なるものが概括して理想せられてあるか、また如何に今日は實現せられつゝあるかといふに、或は予の見解が違つて居るかも知れないけれどもが、未だ我國に於ては家庭の意義は確立せられて居ない、言を換ふれば、即ち我國の現今に於ける家庭の意義なるものは或は確立せらるるが如く或は確立せられんとしつゝあるが如く、極

言すれば過渡の時代に屬するものと考へる、何故なれば、我國には未だ適切なる家庭の文字を當箝むべきものは無いとまで放言する者がある、云はゞ是は歐米心醉者とでも名くべき僻見家と稱すべきものであらう、また或者は、我國には實際歐米のやうなスウヰートホームと稱すべきものは無いから、進んで是を形造らなければならぬ、今日吾等が認めて我國の家庭と呼ぶものは、所謂眞のホームでは無くしてハウスに過ぎないのであるなど、唱へられて居るがその名稱や字句の如何は措いて問はず、素より彼と我とは、建國の由來は勿論、その他風俗や習慣等に至るまで異つて居るのであるから、如何に歐米のスウヰートホームが結構で、さうして羨しいからとて直ちに之を我國に移すことは出來まいと考へる、私が曾て或古老に聞いた事には、某高山植物は、直ちに之を里へ持つて來ても、それは却々根附くものでは無い、概して枯死するものであるが、若し是を里で翫賞したいとて、直ちに之を移すことは出來ないから、まづ最初は其植物の在る高山より、一里か二里、縱ひ遠くとも乃至三里を超えざる範圍内の距離の地に移して、此所に少くとも三年間は据えおき、第四年目には其所を距る約五里の範圍内の地に移し植え、此所に又置くと約三年の後、初めて里に下すべきである、然らざれば必ず枯死するの運命に陥ることを免れるものでは無い、若し予が言を疑はゞ夏期の旅行を利用し、高山の植物を携へ來つて試みらるべしと敎へられたる事がある、けれども不幸にして未だ之を實行するまでに至らないが、縱ひ此の事は實行せざるまでも、之を推して他を知る事が出來ると同時に、他を推して以て之を測る事も出來得るのである、依つて私は之を眞理と信じて居るのであるが、尙ほ之を推し擴めて考ふるときは、克く私が前に述べた所を道破して居ると思ふ、即ち西洋には西洋の風俗習慣あり、我國にはまた我國の風俗習慣といふものが古來より存して居るのであるから、その一部分ならばイザ知らず、之が全般を我に移さう

とするのは、

　恰も圓い穴へ四角な木

を容れるやうなもので、未來永刧密着する氣遣ひは無い、乃で此の事に就ては、私も前年來より種々に首べを惱しつゝあるも、未だ是ならばといふ名案も浮ばないので、實は自分も是に就ては五里霧中は彷徨といふ有様であるが、併し之が到着點に達するまでの豫備として、是まで陸象山の

　人家に三聲あることを要す

といふ事を應用實踐し來りつゝあるが是もまた過渡の時代に於ける好便宜であらうと考へる、即ち三聲とは、一に曰く讀書の聲、二に曰く孩兒の聲、三に曰く紡績の聲といふのである、見來れば何等の奇趣があり妙想があるといふのでは無いが、眞理はもと〳〵平易なものであつて、必ずしも他の奇と呼び妙と稱するものがあるものでは無い、唯その平易中にあつて奇なり妙なるものが存して居るので、喩へば水の如きものである、水は我々が日々に用ゐて居るが、別に奇でも妙でも無い、その味は淡として水の如しといふやうに、砂糖のやうに甘くも無ければ、胡椒のやうに辛くも無く、實に平易淡々である、併しながら一日でも此の水が無かつたならば、啻に人類のみならず、社會上の生物は寸時も生命を保つ事は出來ないのであるが、水は此く我々が毎日呑んだり吐いたりして居つても、曾て之が竭きるといふ事は無い、即ち蒸發して大空に散ずるかと思へば、露となり雨となり若くは雪となり霰等となつて地上に下り、さうして絶えず我等の需用に應じて無盡藏である、この無盡藏である點こそ實に奇と稱し妙と呼ふべき價値の存して居る所と言はなければならぬ、その如く陸象山の所謂人家の三聲なるものも、些の奇も妙も無いけれども、而かも此の三聲なる語は、實に吾人の前に

　家庭に於ける一大敎訓

を與ふるものとして私は深く感謝するのである、吾人は若しも此の三聲が常に絶えない家庭を見出した

ならば、その家庭は實に進歩あり、愉快あり、はた平和なる家庭であると斷言するに躊躇しない、何故なれば、咿唔たる讀書の聲は進歩を聯想せしめ、呱々たる孩兒の聲は愉快を感せしめ、唧々たる紡績の聲は平和を想起せしむるからである、

咿唔たる讀書の聲を聞いて進歩を聯想するとは餘り附會したやうだが、元來我等が心意の發達と進歩とは、如何しても讀書に依るの外に途は無いのである、併し象山の時代には未だ新聞や雜誌等が無かつたのであるから、單に古聖先賢の書物を讀むといふ誠に狹義のものであつたに相違ないが、私は之を廣義に解釋して、古聖先賢の書物は云ふに及ばず、方今社會に於ける新聞雜誌等有らゆる出版物を包括してのものとするのである、

その心意の進歩發達の資として、それらは男子も左様であるが、殊に女子に取りては一層それらを讀む事が必要であると云ふものは、未だ我國に於ては歐米のやうに社會的の交際

が發達しないから、稀に女子の爲に開かれたる學術講話會とか、又は談論會とかいふものゝ外は、一切我國の女子は一家の主婦となりてより後は、別に智識を得るの途は無いので、自然日に月に發達して行く處の社會に後るゝが爲に、その結果は意外の邊にまで影響を及ぼすのである、而かも個々の家庭に於て之が行はるゝ事となれば、これ取りも直さず進歩の聲と云はなければならぬのである、如何に讀書は進歩の聲だと云ふても、その內容には十分注意に注意を拂はねばならぬ事は云ふまでも無いことで、如何はしきものなどは努めて避くるが良い、

私が斯く讀書を勸めたからとて、家庭の主婦たる者は勿論、主婦たらざる女子とても、家業や用事を打捨てゝも讀書に耽けれといふのではない、殊に主婦には主婦たるだけの要務が甚だ多く、即ち主婦は一家と云ふ小天地の君主なれば、朝から晩まで衣食の事や育兒の事、親戚交際等の事に至るまで、それは〳〵忙しいには相違ないけれども、苟も中流以上

の家庭になれば、朝夕務めの外に二十分や三十分の讀書の時間のないといふ事は無い、一體我國の家庭では、縱ひ下女を使へばとて時間に極りが無い、それは歐米風が宜い、主婦とても其通り只麻誤〳〵朝から晩までして居らるゝが、之はどうか一定の時間に物事を整理するといふ習慣を附けたいもので、左樣なれば必ず一日の中には、多少とも

讀書の時間を造る

事が出來るに相違ない、もし一日の中に時間がさう無かつたならば、新聞は兎も角、他の雜誌とか書籍とかいふものは紙數を減じて少なく讀むか、又は日を定めて讀むとかするやうにすれば、敢て出來ない相談でもあるまいと考へる、

一讀書すると云つても、必ず机に依りかゝらねばならぬといふものでは無い、或は姉として弟妹を勞はりながら窓の下でも椽先でも良い、或は母として吾子を保育しながら爐邊でも、又は庭園の中でも宜いのである、併し左樣いふ時には自分一人の時とは違つて、餘り長い時間爲ぬ方が利益があるもので、却つて長いと倦厭を來たすから無益となるのである、ゆゑに精々さういふ時には五分乃至十分間ぐらゐが宜い、それでは餘り時間が短かいやうであるが、その些少の時間にて讀んだものは、直接には何の効も無いやうであるが、冥々の中に其者の思想を發達せしめ、智識を豐富ならしめ、

克く社會の進歩に後れず

して、傍ら家庭の敎育に資するものである、全體女子だからとても、

讀書は學校時代にのみ限れる

次第のものでは無い、卒業して學校を出でたる後とても、出來得る限りは時間を作りて之に用ゐなければならぬ

敎育の方面から云つても、兒女が就學の年齡に達する以前、即ち家庭に於て受けたる主母の感化といふものは非常な力を有して居るもので、決して兒女の生涯を通じて消ゆるものでは無い、換言すれば、

家庭に於ける母親たるものゝ感化といふものは、克く兒女の一生の運命を左右するの力のあるものである、左れば事實に於て主婦たるものは、慈母たるの半面に於て

　實は家庭に於ける敎師

であるといふ事を得る、否、得るでは無くして、實際敎師であらねばならぬ、

　このゆゑに家庭の敎師たる主母たるものが、先づ自ら敎育されて居つて、社會の進歩に後れないやうにしなければならぬといふ所以は是に在るのである鶯の啼聲を敎ふるにも、附親と云て成べく聲の好い、鳴方の上手なものを撰んで鶯の雛鳥に敎へ込ませるといふ位であるから、況して萬物の靈長たる人類の子に物を敎ゆるに方りては、尤もその母親たる者が細心の用意が無くてはならぬ筈ではあるまいか

　洋の東西を問はず、女子の通有性として孰れも衣裳や頭髪の飾りなどに就て腐心するのみならず、また是に對して男子の知らざる興味をも有して居るのである、それは無理ならぬ事で、人として何か興味を有たぬものは無い、故に女子が衣裳や頭髪飾り等に對して興味を有し腐心するのは結構であるが、どうも人間といふものは　或人の云へる如く慾の動物で、一を得れば二、二を獲れば三、乃至四五六七八九十を限りの無いもので、それも富有の家であつたならば、さういふ物質的の慾望をも充たす事が出來るか知らないけれども、中産以下のものに至りては、迚も之が滿足を買ふ事は出來ないのであるから、先づ其よりはその慾望を讀書に轉じて

　所謂心的の快樂

を得ることに努めらるゝが得策であらうと考へる、物質的の興味といふものは變遷が速かで、從つて得たとても從つて減退しやするもので、ツマリ轉變甚しきものであるから、何處を中心と定むべき點も無いのであるが、之に反して心的の興味は、その持續する所の時間が長く、或は生涯を通じて變ずることは無いのみならず、彼の物質的のものゝやうに、單

に自分一個が娯しむものとは違つて、延いて他人をも樂しましむることを得るので、第一その品位が、物質的のものに比べて數等上に位するのである、歐米などでは、主婦たる者が少しの餘暇を得るときは單に家庭で讀書するのみでは無くして、圖書館までも出かけて書見する、否、主婦ばかりでは無い、乳母でも下女でも、時間の許す限りは圖書館へ行くといふ風に、非常に女子の社會にも一般に讀書に興味を有して居るのであるが、我國の圖書館では、僅に醫者または産婆若くは技藝の道を學ぶ女學生位が行くので、それも甚だ僅少であつて、極言すれば、我國の女子は、或意味に於て未だ讀書の興味を有して居らないと云ふことが出來やうかと思ふ、成程電車中などで、時としては書見して居る女子を見かける事もあるが、その携ふる所の書籍といふよりは、概括して出版物は、私が餘り諸嬢に推奬する事を好まぬやうなものゝみである、他の二擧は後日に讓り、今回は是で御免を蒙ることゝする、

磯まつ風

侯爵夫人　鍋島榮子

春月

吹く風は寒くおぼゆる空ながら
　かすみそめたる月の影かな

海邊春月

こよろぎの磯松かぜも音たえて
　のどかにかすむ春の夜の月

長閑なる濱邊に出づ

大いその松吹く風ものどかにて
　濱邊に絶えぬみやこ人かな

遠村柳

雨はれし野末の里の垣根かも
　ほのかにけぶる青柳の糸

橋邊柳

行人の目にも袖にもかゝりけり
　橋のたもとの青柳のいと

胃腸の養生法（承前）

醫學博士　長與稱吉

牛乳の話

一　其の成分について。牛乳の成分は右の表に示した通りであるが、養分各個の含有量は、色々の關係によつて増減を見るものである。即ち

搾取の時刻。一日三回搾取るものなら、朝の乳汁は晝、夕のものに比べると稀薄である。而して晝間の乳汁は蛋白及び脂肪分を含有することが一番多い

ケーニヒといふ人の調査た所によると、左の如き等差を見るのである

時刻	水分	乾酪素及蛋白質	脂肪	糖分
朝の乳	八八、〇八	三、二四	三、〇六	四、八八
晝の乳	七七、四四	三、二六	三、八七	四、六八
夕の乳	八七、四九	三、一九	三、六二	四、九九

飼養料の如何。水分の多いものを食べさせると、乳汁の分泌量が多くなるが、其代り、養分が減少して稀薄になる即ち水ッぽくなる。之れに反し脂肪に富んだ飼養料を與へて育てると、養分の多い乳汁が分泌るものだ。

二　牛乳飲用について注意

○不潔なる牛乳！　諸君は牛乳を永く空氣中に放置しておくと、自然に凝固物が出來て、どろどろになるのを、日常よく目撃られるであらう。これは何の爲めかといふに、牛乳の中に混在れて居る黴菌の作用によるのである。

健康な牛體から分泌た乳汁は、決して黴菌を混じて居るものではないが、斯く黴菌を混ずるのは全く搾乳業者の不行屆から、牛の乳房を不潔にしたり、

搾取法が不完全であつたり、又は器物が不潔であつたりするためだ。今試みに坊間に販賣せらる、「消毒乳」「無黴菌」なるもの數種類かを取り來つて、檢査して見るに、何れも有菌乳、不潔乳ならざるはない即ち顯微鏡を以て照して見ると、牛乳一立方仙迷（約三十滴）の中に、數百乃至數萬個の黴菌が、蠢爾として生存いて居るのである。而かも是等の黴菌は、通常の室內溫度で、恐ろしく播殖して、數時間の後には何百倍何千倍といふ數に達するのだ。パークといふ學者は、一立方仙迷の新鮮なる牛乳中、五千個の黴菌を含んで居たものが、攝氏十八度の溫に於て二十四時間の後、二十八萬に達したのを實驗したといふ。何と黴菌の發育も恐ろしいものではないか。

〇〇〇結核乳　以上は凡て外界から來て加はつたものであるが、牛乳には尙ほこの他に、怖るべき危險分子と含んで居ることがある。それは牛體自己から傳へられる、夫の結核菌である。

牛の結核に關しては從來、幾多の學者によりて、研究せられ、論議せられ、注意せられた所であるが要するに斯かる病原菌を混じた牛乳を飲用すると、腸又は腸間膜腺といふ部を冒して、茲に結核の病竈を作り、終に生命を奪ふに至ることは、爭ふべからざる事實となつた。

結核の外に脾脫疽、恐水病等の病毒を混じて居ることもあるが、それは至つて稀有である。

近來、結核を豫防する爲めに、ベーリング氏の方法により「ツベルクリン」といふ一種の藥品を注射して、結核病の有無を判定め、又は健康な牛體に結核のたねを接種て免疫させ、（免疫とは其の病に罹らない體質をつくるをいふ）る方法を案出せられた。恰かも人體に種痘を施て、天然痘の豫防をするやうなものである。

斯の如くにして牛體自己から傳はる病毒たけは、豫防することが出來るけれども、外界から混入る黴菌は到底杜絕することは不可能い。否不可能い事はないが、現今の狀態では覺束ないのである。だから

若し吾々が牛乳を飲用る際には、是非これを消毒する必要があるのだ。

牛乳は如何に消毒すべきか衛生思想に乏しい搾乳業者や取次業者の頭脳には、消毒などいふ観念は薬にしたくもないのだから、たとへ「滅菌」だの「無菌」だのと、立派な銘を打つてあつても、そんなものは到底信にはならぬ。

牛乳を消毒するに最も簡単な方法は、煮沸である大抵の黴菌は約三十分間、摂氏七十五度の温を與へるか、又は十分間八九十度に熱したならば、死滅するものであるが、猶ほ完全に消毒を計らうと思へは百二十度の熱を與へて、約三十分も煮沸すればよろしい。而して一旦消毒した牛乳を貯へて置くには、以上の如き熱湯の中で充分に殺菌した、罎の中に入れ、空氣の入らぬやうに厳密に栓をして、成るべく風通りの良い、冷めたい、所に置けば可いのである。

然し玆に注意して置きたい事は生乳の効價。である。牛乳を煮沸するといふ事は實際に於て顧慮ものだ。といふのは、生乳は消毒ものよりは滋養に叶つて居るからである。且つ又凡ての生乳は滋養分以外に、一種靈妙な作用をもつて居



る。靈妙な作用とは、生乳の中に含まれて居る或る醱酵素の活機をいふので、此の醱酵素は諸種の傳染病に對して偉大の抵抗力を有し、漫りに病毒をして吾々の身體を犯さしめないのである——處が溫熱を與へると、一朝にして其の活機が沒却なつて了ふ即ち攝氏七、八十度で雜菌が死滅するのと同時に、此の醱酵素も亦滅燼されて了ふのだ。これ自然が乳汁を熱することなく、其のまゝ哺乳すべく工夫さた所以であらう。

けれども搾乳業者は腐敗を防ぐため、又は保存しておく目的で、一旦は煮沸するのである。だから吾々の口へ入るまでには、大切なる醱酵素の活機は、滅却つて居る。

ヨシ滅却つて居ない純生乳が得られたにしても、吾々は生乳を煮沸さずに飲むといふ事は、衛生上危險である。大抵は黴菌を混じて居るからだ。元來牛乳は黴菌の發育に、最も好個の培養地であるから、一旦煮沸したものといへども、取扱ひが不完全いと忽ち黴菌の侵入を被むるのである。故に諸君は「無菌乳」「消毒乳」なる名に、安心することなく、飲用前には必ず煮沸することを忘れてはならぬのだ。

牛乳の不正品　利己一點張りの惡商人等は、牛乳に不正の贋品を混じて、巧みに需用者の眼を瞞着せんとするものがある。衛生警察に於ては嚴重にこれが取締を爲しつゝあるけれども、猶且不正品の跡を絶たないのは慨はしき次第である。



牛乳の不正品には左の如き種類がある。

一、水を混じたもの
二、米の泔汁を交せたもの
三、脂肪分を脱失つたもの
四、防腐劑（サリチール酸硼酸フォルマリン等）を加へたもの

等で、これ等は何れも牛乳其のもの丶、養分を損ずるばかりでなく、延いては飲用者の健康を害する事もあるからして、牛乳を飲まんとする人は、充分に警戒する必要がある。

警戒といつても不正品の混否を檢定めるより外に仕方がない。が、不正品檢定は、一寸素人の手では出來ないのである。何故といふに、一定の設備が要る、器械が要る。藥品を求めなければならぬ。加ふるに操作する手の練磨、判別する眼の熟練が要るので、迚も臺所で出來る仕事でない。生兵法は大疵のもと。自分はワザと玆には其の方法を掲げない。必要があれば專門家の手に委ねて、鑑識を乞はれん事を切にお勸めする。

牛乳の効價――飲用の可否

牛乳の効價については、自分は左程重く見て居ないのである。然し世上からは一般に尊重ばれて居る所謂「牛乳崇拜」ともいふべき一種の傾向――寧ろ信仰があつて、何んでも彼でも、牛乳を飲めば身體が肥える。血が増える。力がつく。病氣も恢復するといふ風に、誰れしも然う信じて居るらしい。けれどもそれは大なる迷ひである。

成程牛乳は最上の滋養品には違ひはない。蛋白なり、脂肪なり、凡て食素の全種類を一身に鳩めて偏頗のなき所、即ち天然の調和よろしきを得て居る所や、且つ消化し易い點、吸收に便なる點や何れの方面から觀るも、吾人の理想に適つた善良の食品たるは疑ふべくもないのである

が、斯く滋養價の高いものならば、何故吾人の常食として、米の代りに三度々々用ひられないのか、といふ疑問も起る。言ふまでもなく、牛乳を以て吾人の營養を保ち、生命を安全に維持してゆかうといふには、非常に多量を飲用なければならぬ、即ち一日三リーテル（約一升五合）を要するといふ。是れ果して堪え得られる所であらうかに、よし吾人の胃はそれを受容うるにしても、腸は到底其負擔に堪

得ない。忽ちにして下痢、忽ちにして營養の不及衰弱、羸痩、この二つの障碍は、免れんとして免れることの出來ない、必發の症狀である、果して然らば牛乳は理論上に於て、最上の滋養價を有するといへども、實際に於ては米、麥——吾人の常食とするものに劣るといはねばならぬ。

牛乳を飲んで下痢を起すのは、一つは個人の體質にもよるけれども、亦一つは腐酵るためと、流動體としての器械的作用に由るのだ、また牛乳を飲んで痩せるのは、牛乳中の養分が悉く體內に吸收せられないからだ、世俗多くは牛乳を滋養素の結晶體であるかの如くに信じて居るが、飲んだゝけの牛乳は、全部身體の成分に同化るものでない、牛乳に限らず凡ての食品は皆な然うだが、殊に牛乳は百分中十分だけは、大便になつて了ふのだ

然るに世の中には、常飯を減らして牛乳を飲む人がある、飯よりも牛乳の方が滋養になると思つて居るのだ。病氣をすれば直ちに牛乳を飲む、飯を食へば病が重ると思つて居るのだ。其他下痢のある場合に、固形食を廢して牛乳を飲む人もある、流動食さへ攝つて居れば可いと思つて居るのだ。何ぞ知らんこれ等は何れも大なる誤りであることを。

要するに牛乳は、諸君が信じて居られる程大なる効能のある物でない、健康人は矢張り飯、肉、野菜に限るのである。唯牛乳の長所とする所は左の通り

一、其の内に含有せらるゝ養分の配合が、理想的に出來て居ること、

二、消化吸收に便なること。而かも

三、刺戟が殆んどないからして、病者の食餌とし適當なること。即ち胃の急性疾患、胃カタール、胃の潰瘍、癌腫、胃酸過多症等に用ひて効のある事

四、其他下剤の効があるからして慢性の便秘症に用ひて著効あること、等

右は牛乳の長所である。故に吾人は此の長所をとつて、病人の食養に供へんとするに方りては、豫め其の性質を吟味する必要がある、又市場にあるもの

には往々不正品があることも忘れてはならぬ。又消毒、無菌などいふ名をつけながら、其實恐るべき黴菌を混じたもの、腐敗に傾いたものがあることは前にも言つた通りだから、夫々警戒しなければならぬ

四、鳥卵

鳥卵には種々あるが、普通食用に供せられるのは鷄卵である。故に玆には主として鷄卵のみについて述べる。

鷄卵は實に滋養分の結晶である。容積は小さいが、其の實質は悉く、滋養素の凝塊であるといつても差支はない。即ち一枚の卵殻の下には、純蛋白から出來た『卵白』と、脂肪と蛋白から成つて『卵黄』とがあつて、そつくりそのまゝ食用に供さるべく、できて居る。

一個の重量は、日本産のもので平均四十瓦(十匁)位あつて、而して其の滋養價に至つては、丁度、四十瓦(十匁)の脂肪ある牛肉、又は百五十瓦(約一合半)の牛乳に匹敵するのである。

左に鷄卵及外二三の鳥卵につき、分析した處を示す。

鳥卵の分析表

鳥の名	水分	蛋白質	脂肪分	灰分
家鷄卵(日本産數種平均)	三三、六二	五、〇九	五、九〇	〇、三八
矮鷄卵	一三、一五	二、三五	三、一一	〇、一六
ブラマ卵	三九、九二	六、九三	五、〇五	〇、四五
家鴨卵(外國産)	七一、一一	一二、二四	一五、四九	一、一六

鳥卵は凡て脂肪分を多く含んで居る程、味が良い殊に鷄卵にありては、夫の矮鷄の如きは容積は至つて小さいが、脂肪分が多いから味が良く、プラマは只容積が大きい而已で、まづいのである。

卵黄と卵白との滋養價を比較するに、卵黄の方が優れて居る。卵黄の中には蛋白質も脂肪分も多量に含まれて居る、而して一種の芳香を有して居る。

卵白と卵黄との滋養分比較表

品別	水分	蛋白	脂肪	鹽分
卵白	八六、三六	一二、七一	〇、二四	〇、六九
卵黄	五一、四八	一五、七六	三一、四三	一、三三

要するに鶏卵は、病者の食餌として實に善良のものである。が、用法が拙いと滋養の効を収めることが能ない。故に之れを用ふるには半熟が一番良いのである。生卵や、熟卵は消化が不良いのみならず、生卵をそのまゝ飲んで下痢を起したり、又は熟卵を食べて大便の通じが秘結くなるなどいふこともあるからして、卵を用ふる際には成るべく半熟にした方がよい。

○○○○○○○○○○○○鶏卵の腐敗を鑑識する法。腐敗した卵を知らずに食すると、往々下痢を起すことがある。故に卵を食する際には是非、腐敗しては居らぬか、新鮮であるか、否かを定めることが必要である。

それには卵殻を破れば直ぐ分るが、破らずに知る簡短な方法がある。即ち、新鮮な卵は半透明であつて、十倍か二十倍の食鹽水の中へ入れると、沈むのが通常であるが、腐敗して居ると、食鹽水の上に浮く、而して卵は必ず不透明である。

鶏卵の貯藏法。には種々あるが、其の要は、卵内に含まれて居る水分の蒸發を防ぐこと、及び、日光に永く直射して置いたり、暖所に置いたりすることを禁ずるにある。

一、籾殻または鋸屑の中に入れて、日光の透射らぬ、冷所に貯藏く方法もある。

二、石灰又は石灰水の中に浸ておけば、永久までも腐敗る虞がない。これも其の方法の一つ。

三、卵の殻へ直接に、泥土、油類、豚脂、パラフィン、膠等を厚く塗つて置く法もある。

お断り

滋性食品の終りに『嗜好性飲料』といふ項目を設けて酒、茶、珈琲、柯々阿、ショコラーデ等のことをお話し、最後に調味品として日常汎く用らるゝ、味噌、醤油、食鹽、酢等につ

いて詳しく述べる筈でありましたが、それでは到底本年中にも此稿を結ぶことが出來ませんから、憤慨ながら夫れ等は凡て他日に譲り、茲には單に「製造食品類」の分析表を提げて本章のくゝりをつけやうと思ひます

製造食品類の分析表

	水分	蛋白	脂肪	無窒素物	纖維	灰分
豆腐	八八、九七	六、五五	二、九五	一、〇五	〇、〇三	〇、六四
雪花菜	八五、六六	三、六六	〇、八四	六、三五	二、九〇	〇、五九
油揚	五七、四〇	二一、九六	一八、七三	〇、四九	〇、〇八	一、三五
豆腐皮	三三、八六	五一、六〇	一五、六二	八、六八	〇、四六	二、八二
麩	七一、四六	一三、三二	〇、一七	一四、五三	〇、一五	〇、三八
饂飩（煮たもの）	八八、三三	四、八六	〇、一〇	三五、九三	〇、一六	〇、三三
素麵	一九、三八	八、四四	〇、七四	六五、七八	〇、二九	五、一六
納豆	六一、八二	一九、一六	八、一七	六、〇九	二、八〇	一、八六
澤庵漬	八二、七七	一、三八	〇、〇六	六、〇三	一、五三	八、三〇
味噌漬大根	六三、〇二	六、一四	〇、一九	一六、五二	二、三三	三、九〇

婦人科學者

深井武司

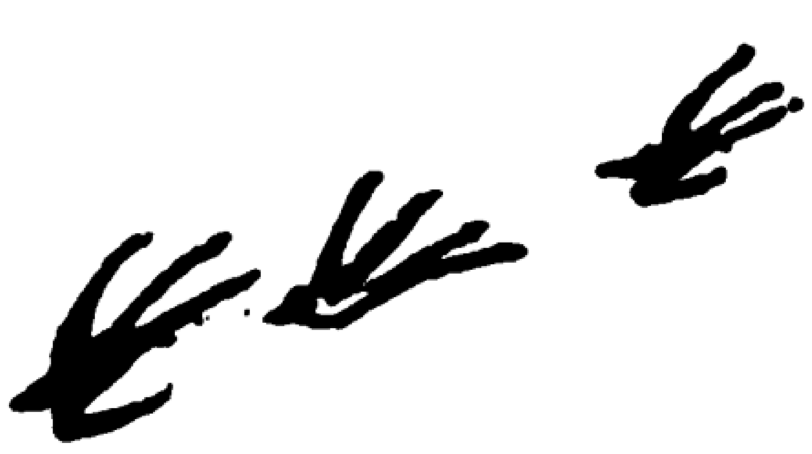
今日、女子にも科學は必要である乎とは、識者の口にすべき處でない、然れども女流科學者は如何、すくなくとも現今の我國では疑問である、歐米各國の女流科學者の大半が殆んどすべて獨身者であるのを以て見るも、女子が卓越なる科學者たらんとするには、一生涯獨身生活を敢てせねばならぬのであらう、如斯は自身にとり幸か不幸かは別問題であるけれども、我國現在の狀態から鑑みれば、左程迄もして女流科學者を輩出せしめねばならぬと云ふ理由は何處にもないと思ふ、雖然、特別の境遇及び資性ある女子、並に科學者（と迄はゆかずともプロヘッションとする者）の妻たらんとする者は、將來是非とも科學的智識を充實して貰ひたいものである、勿論前者と後者では其意味を異にしてゐる、

後者の場合では夫と同樣の趣味、――つまり同情

をもつ爲であるから、左程深遠なるを要しない、と同時に人の妻たる修養をも積まねばならぬ、西洋にも學者同志の夫婦が日夕議論ばかりして、遂に家庭の殺風景にあき互に忌敷き風說をたてたなんと云ふ事實もある、

此處から云ふと英國のダーウキンの妻女は慥に豪い、それはダ氏が彼の兒童に語つたと云ふ一節でも知れる、

……汝等の母は汝等一同に對し、常に變らぬ善良慈愛の母であるのは、汝等の熟知する通りであるが、予に取つても一生の最大幸福は予が妻であつた、妻の口からは云はずもがなと予を顰蹙せしめるやうな言葉を、曾て一度も聞いたことはなかつた予は斷言する、妻は常に深厚な同情を予に寄せ、予が病苦（ダ氏は常に病身なりしと云ふ）に伴うて





不自由や不快を喞つ毎に少しも倦厭の情を起さないで予を慰安して與れた、妻は又機會さへあれば誰れ彼れを問はず親切を盡したと予は信ずる、如斯一切の德性のすぐれた予より優つた婦人が、敢て自ら抑損して予の妻となつたことは予の幸運で、予が驚喜して自ら禁じ得ぬのである……

之を讀む者誰か英國婦人の面影を偲ばざるべき、ダ夫人は寔に其典型である、ダ夫人はダ氏の叔父ウエッヂウードの娘で、千八百三十九年ダ氏三十歲の時に結婚したのであるが、僅に三年八ヶ月倫敦に双

棲したのみで、以後四十年間も倫敦よりは十六英里も離れた、ケント傾のダオンと云ふ片田舎に平和な温き生活をしたのである、ダ夫人の科學的智識如何につきては、従來あまり知られてゐないけれども、ダ氏が夫人に宛てた手紙がいつも／＼、草木鳥獸に關せるものあつたのを以ても推察せられる、

如斯、夫人の内助を受けた學者は、獨りダーウヰンのみでないが、餘り長くなるといけぬから、次にはローマネスの内助者につきて書く、

ローマネスは、千八百四十八年に生れた、英國の動物心理學者で、最早此世の人ではないが、獨乙のヘッケルなどは餘程賞めてゐる、著書に『動物界に於ける精神發達』とか『人間の精神發達及び人間能力の起源』とか『動物の智識』とか『ダーウヰン及びダーウヰン以後』とか色々あるが、就中、猿の觀察日記は精密なものである、之はロ氏が動物園の監督スクレーターに告げて、借受けた一匹の猿につき彼の妹が觀察して、詳細に記錄したのであつた、それは千八百八十年の十二月十八日であつたが、それから翌年の二月十八日までの間の日記で、猿の智力を知るに便利であるローマネスの妹は實に精密な觀察者であつたので、ロ氏自身も其記錄は正確なものとしてゐた、

次には現在の人々につき一二を記す、予は先づ前述の序に英國昆虫學者オーメロド孃につき記さゝるを得ない、何となれば予が斯學を研究し始めて以來讀んだ書物は二、三に止まらぬけれども、最も初めに讀んだのは、才孃の害虫全書であるからである、

オルメロド孃と云へど最早五十以上にもならん乎と思はるゝヲールトミッスなり、姉にジョーヂと云ふ老孃あり、繪畫を巧にするので姉妹協同して種々の畫譜を著してある、予は常に思ふ、婦人でも勉强すれば科學者になれると、それは實にオルメロド孃が手本である、彼女は皇立學術協會のフエローであるのみならず、世界各國の學術協會や昆虫學會のメンバーに推されてる、勿論英國にも昆虫學者は

ゐるが、獨り彩異を放つ者はわが孃あるのみ、

次には米國のフキルド孃につき記さん乎、矢張ヲールドミッスなのであるが、蟻の研究で有名な婦人である、著作に「蟻の研究」とか「物質震動に對する蟻類の反抗」等各種ある、特に婦人だけに頗る精密な研究がある、先頃ハーバート、エヌ、カスソンが孃が六年間も費して研究した、蟻生活の奇態を通俗文に記述したのは、實に趣味津々と云ふべきである、

全體から云ふと、米國には女流科學者が多い、であるからハーバートやコロンビヤやエール、等の諸大學の研究科か、さもなくばスタンホードやコルネル大學などへ行つて見れば必ず女子が男子と共に研究してゐるのが見られる、

以上は單に生物學に緣ある婦人の一二を記したのであるが、此外にも澤山ゐるし、自分の知らぬ人もゐるに違ひない、例へばラヂウムの發見者たるキュリー教授（先年非命の死をなせり）の夫人は、教授の死後自からソルボンヌ大學の講座を擔任してゐるまた先頃化石の調査に來朝したストープ孃なども有名な人である、諸君中で委しく調べたいと思ふ方はプエイルの『科學に從事せし女性』を讀まれん事を望む、茲にはたゞ心に浮んだ近頃の人々を記したのみである、

家庭に於ける心理學の應用

高島平三郎

第九　概念（まとまつた考）

概念とは何か　誰も生れたまゝなる嬰兒の時のことを記憶して居るものはありません。それゆゑ嬰兒の心がどのやうであらうかといふことは學者がいろ〳〵の點から推し考へて定めるの外はありません

今生れてから僅か一年以内の嬰兒の心にいろ〳〵のものがうつる有樣を考へて見ますれば、何物もたゞぼんやりと夢の樣に見えたり聞えたりするばかりでどこに何があるか何處で何の音がしたかといふやうなとは少しも分らぬでせう。作用であります。然るに二年三年と年齢の進むに從ひ、身體のいろ〳〵の働が段々進んで來るにつれ、先きのぼんやりして居た心は夢の覺める樣にはつきりとしてまゐりまして見ても聞ても此は何物で何處にあるといふとが明らかに分るやうになるのであります。これは感覺から知覺にすゝむ心の有樣であります。併しその移りかはりは決して急には參りませぬ。それゆゑ初はたとひ何か見ましても、ほかの似よりの物との區別をすることが不充分でありまして、少し似よりのものは皆一つにしてしまひます。

例へばやうやく片言をいひ始めた頃の子供は犬を見れば「わん〳〵」といひ、鷄を見れば「とゝ」といひますが、其「わん〳〵」とか「とゝ」とかいふ言葉はなか〳〵廣く用ひられるのであります。嬰兒には豚もわん〳〵なら牛の子もわん〳〵ですべて吾々のいふ獸は皆わん〳〵といふのであります。「とゝ」もその通りでありまして鳩も鳶も鴉も皆此の言葉で言ひ表はされて居ます。これは子供の心がまだ充分開けませぬゆゑ、いろ〳〵の物の互の違ひを明に認めることが出來ず、たゞ其の似よつた所が強く心にうつり、いづれも一つにしてしまふのであります。

嬰兒が「わん〳〵」を以て多くの獸を言ひ表はし「とゝ」を以て多くの鳥を言ひ表はすのはもとより不精密の心の働でありますが、かやうにいろ〳〵の物の類似の點を一つにまとめて簡單の言葉で言ひ表はす心の働は、知識の進歩に大切なことでありまして之を概念作用といふのであります。それゆゑ嬰兒の用ひるぼんやりと廣く言ひ表はす言葉は概念とはいへませぬが、吾々のもつて居る多くの概念も元はかやうにして發達して來たのであります。

吾々は初め一つ〳〵の感覺や知覺の働を待つて知つ

たものも、後には之を代表する表象（觀念）で濟ます様になり、又進んでは概念で用を辨じるやうになるのであります。例へば平生皆さんが家庭で話をなさるにも、大抵は概念上の言葉を用てお出なさるのです、今朝は鶯が鳴きませぬ」とか「今日は風が出ねばようございます」とか「此の頃は天然痘が大層減じたさうです」とかいふ話の中の物の名は何れも概念であります。言ひ換へれば知覺として皆さんが鶯を見て居られるとか風に感じて居られるとか天然痘が目前にあるとかいふのではない。又どの鶯どの風どの天然痘と指す物の表象「觀念」が皆さんの心にあらはれたのでもない。たゞ一般に鶯風天然痘を指すのでありますから、知覺でも表象でもなく全く概念であります。文典に固有名詞普通名詞といふことがありますが。その普通名詞は何れも概念を現はす言葉であります。

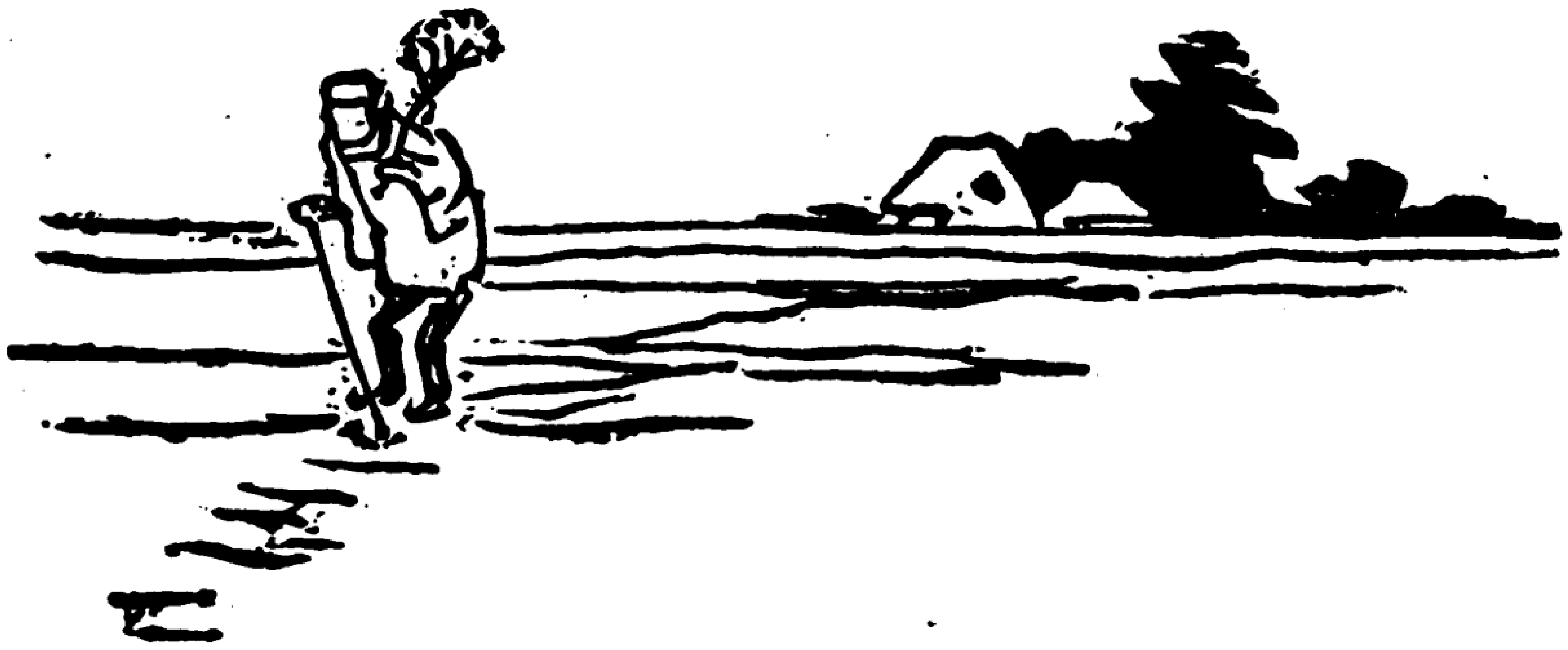
概念は如何にして成り立つか　前に説いたやうに概念は一つ〳〵の物や事を指すのではなく、廣く其の物の屬する類全體をいふのでありますが、どうしてかういふ考がまとまるでありませうか。次に之を説明いたしませう。

第一に概念が出來るには初めに二つ以上の表象がなくてはなりませぬ。例へば子供がたゞ一度一疋の犬を見たばかりでは犬の概念は出來ませぬ。此の時はたゞ一つの表象が出來るばかりです。然るにその後更に他の犬を見るに及んで又一つの表象が出來ます概念が成り立つには先づ是等二つの表象を充分明に觀察することが必要であります。

第二に前の如く二つの表象が出來れば、互に之を比較してその異同を知るでありませう。これは前に説いた表象聯合の働で、類似點の多い同種の物なら必ず互に思ひ出させる者でありますから、一たん經驗したとに似よりの事を後日更に經驗する時は、前後二つの經驗は必ず心の中で比較されるのであります。婦人の方々が衣服をお求めになるにしても、前に自分の氣に入つた縮緬の衣物があつた時には、今又

縮緬を見る時必ず前の衣物の事が心に浮んで、あれとこれとを比較なさるのでありませう。

第三に前の如くに比較する働は知力の進歩に大切なることでありますがその結果として二つの表象から似よりの性質を抽き出して來るのであります。例ば前に見た犬と後に見た犬とは、いろ〳〵違ふ點も多くあるけれども、其類似の點が遙かに多いから、互に違つた點は捨てゝおいて同じ點ばかりを抽き出すのであります。縮緬の例にしてもその通りで前後の品が全く同じといふことは少い、必ず多少の違ひはあるものでありますけれども、「シボ」が同じ樣であるとか、つやが似て居るとかいふことがありませう。假令是等のことが違つても、縮んで居る絹織物といふ縮緬に最も大切な性質は必ず一致して居りませう。そこでその一致して居る性質のみを引



き抽くことを學問上の言葉で抽象といふのであります。之に反して違つて居る性質を捨てるのを捨象といひます。それゆゑ抽象と捨象とは常に相伴つて居る者であります、言葉は此の樣にむづかしいやうでありますが、皆さんが平生絶えず實際に働かしてお出なさる心の作用に名けたのでありますから、誰れでも此の經驗のない者はありませぬ。

第四に抽象された性質は、唯別々になつて居るものではありません、必ず一つにまとめられるものであります。例へば幾十株あつても菊の黄なるは黄菊として心に理會されるのと同じことであります。前の例で申しますれば、甲の犬と乙の犬との類似點を抽象して、之を一つにまとめ犬といふ名を以てそのまとめた性質を代表させるのであります。まとめることを概括といひ、名

をつけることを命名といひます。

概念は以上のやうに次第順序を經て出來るのであります。併し此順序は一々明に分るものではありません。通常は一寸物を見ると、其瞬間に心に火の閃くやうに忽ち比較抽象概括などが出來てしまふのであります。たゞ未だ經驗したことの無い物を初めて見たといふ樣な場合には、丁度嬰兒が永い間かゝつて次第次第に概念を作つてゆくと同じく比較も抽象も容易に出來ないのであります。

概念の大切なること

人の知力の高低は概ね概念の如何によつて定まるのであります。愚鈍の人といふのは概念が少いか、又縱ひ多くあつても、其概念を作る土臺となる表象が間違つて居るのであります。若し人に概念がなく知覺や表象許りであるなら、人の心の働はいつまでも不便な不經濟なとでありませう、何故といふに知覺や表象は一つ〳〵の物を現はして



居るのでありますから、心は永く其一つ〳〵の物事をおぼえて居らねばなりません。經驗の少い間は此でもさほど不便のこともありますまいが、だん〳〵多くなつたら、とても一つ〳〵の物事を悉く記臆して居るとは出來ません。婦人が自分の衣物を記臆なさるに箪笥に三つや四つの數なら一つ一つに皆覺えてお出なさるとは何でもありますまい。特に婦人はかういふ記臆に長じて居る點に於て男子に優つて居るのでありますから、

容易に記臆が出來ませう。ゆゑに此の間はまだ概念の必要の無い時であります。併し簞笥が五十も百もあつて、此の中に一杯衣物が入つて居るといふ樣になれば、どうしても何とか工夫して簡單に覺えて居ることの出來るやうにせねばなりません。例へば一號から十號までの簞笥には羽織ばかりあつて、其中一號から五號までは縮緬であるとか、紋綸子であるとかすつかり分類するのです。又十一號から先の物も此の樣に一つ類の物をまとめて入ておくのです。さうして其所有主は其締め括つた記臆即ち何番から何番までは何其中何番には何といふことさへ覺えて居れば、一つ〲の品物を悉く記臆して居ないでも差支ないのであります。何か必要のあつた時には其中を開けて見さへすれば、自分の氣に入つたものを求めることが出來、たとひ平生は忘れて居ても之を開けて見ればこ調へた時のことなど思ひ出すことが出來ます以上の例はたゞ衣服の出し入れのことで、いづれにしても大した利害はないやうでありますが之を人の心の働きに當篏めて考へますと、實に容易ならぬ利害

のあることであります。人がだん〲進歩していろいろの事を覺え、又いろ〲の事を判斷したり分別したりしてゆかねばならぬ時に、いつ迄もまとまつた締め括つた知識がなければ、其不便不都合はどれほどでありませうか。前の例にしても概括した分類も何もない時には、衣服の必要の時には一々簞笥を開けて調べねばならぬでありませう。其時間と勞力とを費すことの不經濟は甚しいことでありませう。それゆゑ概念によつてすべてのことを概括して覺えて居るといふことは、心の働きを敏くすると共に、之を經濟的にする利益が多いのであります。

其外すべての學問は概念の働きによつて出來るのでありますから、此の働きの鈍い人には何の學問でもよく分りません。動物學でも物理學でも其他何の科學でも、其知識はたゞ一つ〲の事實を知るためではなく、動物なり物理なりに必要な概念即ちまとまつた考を與へるのが主であります。學問上の知識と常識との違ひは種々ありますが、つまり學問の方は概念が確實で、常識の方は之を缺いで居るのであり

ます。昔の人が哲學は概念をとゝのへる學問であると申しましたが、眞にその通りでありまして科學は一科の概念をとゝのへ、哲學は天地人三才にわたつてあらゆる概念をすべとゝのへるものであります。前にも述べましたやうに婦人の長所は一つ〳〵の物事を面倒とも思はず細かによく覺えて居る點にあるのでありますが、其短所亦こゝにあります。凡て人は長所がやがて短所でありますから、何事にもこの點によく心を用ひねばなりません。そこで婦人に學問の必要であるといふのは、たゞ其事柄を覺える爲めばかりではなく概括した知識及び物事を概括する作用をすゝめるためであります。若し此の作用に缺けて居る時には何事も要領を得るといふとが難く、一寸留守居をして居て客が來たといふ樣な場合に、主人が歸つてから其用談を話すにも、客の來た時の有樣から次第〳〵につまらぬ物のいひぶりや、辭儀の仕樣までずつと述べねばならぬといふ樣になります。婦人には實にかういふ傾が多くありまして、輙もすれば忙しき男子をしてア、面倒であるそんな細かいつまらぬ話よりも最も主要な點を聞きたいといはせるやうなことが多くあります。是れは勿論概念の如何にのみよるとではありませんが、つまり物事の主要性を抽き出してまとめるといふ作用が充分でないからおこることであります。

併し又あまり物事概括にすぎて一向細かい事を語り得ぬといふのも、婦人の美はしい性に缺けて居るのです。概括に過れば物事所謂大ざつぱになりまして、男子の惡しき點を其まゝ婦人が現はすとになりますから、之は大に誡めねばなりません。婦人の修養として最も必要なのは、細かい事にもよく氣をつけて充分にいろ〳〵の事を心に留めて居るけれども場合を見計つて先づ概括した要領を言ひ現はし夫から徐ろに細かいとに移るといふ樣に細大ともに自由に心が働く樣にせねばなりません。學問上の概念を養ふにしても、一つ〳〵細かな點を精しく觀察し比較して出來た者でなければ、確實な者とはいへません。其ゆゑ概念は益々廣く大きくすゝめてゆくと共に、其內容となる經驗は益々細かにせねばなりません。

青海原

伯爵　東久世通禧

早春海

時しらぬ青うな原とあらたまる
春のひかりはまづ見えにけり

春寺

大井川入江のまつに吹く風の
おとしづかにもかすむ月かな

社頭春風

いはひ杉みどりをそへて神垣の
ゆふしでなびき春風ぞ吹く

河上春月

大堰川入江の松にふく風の
音しづかにもかすむ月かな

溪梅

うぐひすも古巣はなれぬ聲すなり
谷ふところの梅のさかりは

海邊霞

わだの原沖つしら浪たゝぬ日に
いよ〳〵たつはかすみなりけり

春の夕山里をとふ

くれにけり花より花にたづね來て
歸るさとほき春のやまざと

春雨晴

春雨は垂れにしものを花さかり
こゝろゆるして朝いせしかな

花宴

すがの根のながき春日も暮れにけり
さけくみかはす花かげにして

旅春雨

春雨はものうかりけり旅ごろも
ぬれつゝあゆむ路ならねども

朝鶯

今日もまた朝いの夢をさましけり
窓ちかく鳴くうぐひすの聲

仕事は一定の場所に於てすべし

棚橋絢子

凡て人といふものは、男女に限らず物事に極りを附けるといふ事は幼少の頃より習慣を附けなければならぬものであります、例へば、机の上にいたせ、衣服の類にせよ、その衣服も各々身分の高下に由りて自から程度のあるもので、身分の餘り高からざる者が濫りに高貴の方々の眞似などをいたしまして、無暗に分不相應な扮裝をするなどゝいふ事は宜しくありませぬ、必らず商家の者は商家相應に、又農家の者は農家に相當するやうに、各々その分に甘んじて居らなければならぬものであります、

元來人の性と申しますものは至つて善なるものでございます、例へば小兒の心持のやうなもので、この小兒の心持には、少しも曲り捻つた所は無いもので御座います、それが段々と生長するに從ひ、彼れの此れのと外界の事物を見たり聞いたり致して、何時とはなしに惡に染つて、遂には思ひも寄らないやうな事を爲すに至るので御座います、併し幼少の頃から善い癖さへ附けて置きますれば、決してその惡い事には染まぬもので御座います、まづ日々に爲る事で申して見ますれば、毎朝起きますにも、六時なら六時、また七時なら七時といふやうに定めて置きまして、その定めの時間にはキチンと起きるといふやうに致し、夜も亦その如く成るべく一定の時間に寢に就くといふやうに致し、又晝間學校へ行く方でありましたならば、教場では側眼を觸らずに克く其事を覺え、歸つたならば必ず復習をするといふやうに、必ず一定の規律を守らねばなりません、此外御飯を食べますにも、また何の仕事を致しますにも、この

規律を守ると云ふは大切の事であります、第一さうでないと何彼に就て損で

あります、ツイ此程の事で御座いますが、宅の女中が私の給仕をいたしますに、毎時も私は朝々祖先の牌前へ御茶湯を致すので御座いますが、御飯を了ひましてから私に茶を注でくれますに、或時は前の方で遣るかと思ひますれば、翌朝は右の方で注ぎ、そのまた翌朝は後の方で注ぎ、またその翌朝は左りの方で注ぐのみならず、時としては左りの手で注ぐ事なども度々で、凡そ私が十日間ばかり氣を附けて居りますと、十返は十返ながら異ふので御座います、たゞ違ふばかりでは御座いません、時々茶を溢したりなど致すので御座います、ソコデ私は一朝之に注意を與へました所が、それからといふものは粗相も尠なくなりましたが、得て斯ういふ者は締りの無いもので、それは一事は萬事と申す如くで



あります、克く學校へ行く方々の中には、歸ってから温習をするのは良いが、後で學校用具を取散して、御草紙は簞笥の上にあるかと思へば、石盤は床の間の隅へ行つて居ると云ふやうな爲に、翌朝になりましてから、何は何處彼は此所といふやうに尋ね廻らねばなりませんから、悉皆之を纏めるには容易な事ではありません、サア其爲に學校へ行く時間が遲くなると云ふ事に立至るのであります、斯樣な事は單に若い女子方ばかりには限りませぬ、大人とても同じ事で御座います、帯止は何

處、手巾は此所といふ風に平生から場處を一定して置きませぬと、サア出先になつて魔誤突ので御座います、私などは平素から之を實行いたして居ります、尤も私などは澤山の物も持ちませんけれども、場處と時とに由りましては紋付の入用の事もあり、ますれば、また縞物で宜い事も御座います、それでありますから、平素此れは此所、彼れは彼處といふ工合に定めて置きますので、サ何處其所へ参

・仕事は一定の場所に於てすべし



らねばならぬと申しましても、少しも狼狽るやうな事は御座いません、直ちに用が辨じます、そして一々私は戻りましてからも人手は假らないで、凡て自分で始末を致して置きます、兎もすると世間には着物その他萬般の物をタヾクサに爲る向もありますが、これは宜しくありませぬ、第一その物に對して敬即ちツヽシミといふものを忘れて居ると云はなければなりませぬ、私は常に物に對して此心持を失なはぬやうに氣を附けて居ります、さうなると物を粗末にするといふ事が御座いま

せぬ、是は着物や何や彼やばかりではありませぬ、總ての事が左様であります、それでありますから是非善い習慣は附けたいもので御座います、

この頃私が物の本を、見るとはなしにチヨツト見まして大いに感心した事が御座いますから、それに自分の思ひ附きを加へて御咄いたしませう、その標題は、此の如き學生は必ず成功すといふので御座いますから、重に學生に就ての事であるものゝやうなものである、けれども何も學生のみに限つた事はありませぬ、男女ともに心得て居るべき事柄でありませうと私は考へますので御座います、偖その第一には如何なる事が記してあつたかといふに、彼の小包が國許などから届きました時に、その上を縛つてある繩又は紐の類を切らずに、丁寧に之を解き、それより紙包の貼合せ目を徐かに剝がし、縱ひ其時傍らより友人などが、そんな面倒な事を爲るよりも、イツソ破いてしまへと勸めましても、ア左様しませうと云ひながら、尚ほ徐かに指頭で剝すほどの者は急度

成功するといふので御座いますが、是は至極最もの咄で、凡て物といふものは、成るべく世に出し得らるゝ限りは之を出す事に心を用ゐなければならぬもので御座います、成程側の友人の有仰しやるやうに破けば早いに相違ございません、けれども其では二度と再び用ゐる事は出來ませぬから、是非共屑籠の中に葬つてしまはなくてはなりませぬのでありますが、ハイさう致しませうと云ひながら、尚ほ緩かに之を剝がして藏つて置きますれば、また他日の用を爲す事が出來るのであります、私は常に斯ういふ物に接しますれば、やはり丁寧に剝がして皺を伸して仕舞ひおき、他日入用の節には、之を裏返して使ふか、又はその上に紙を一枚張つて用ゐますから、茲に左様いふものに事を缺ぎませぬ、又繩は一々自分で之を解き、捲きて玉となして其所らへ吊して蓄へてありますから、是また毎時も不自由を感じないばかりでは無い、時々出入りの諸職人などより無心をされる事もありますが、それでも尚ほ餘つて居り

ます、少し自分が手まめにして蓄へて置きさへすれば、單に自分が重寶するのみでは無く、他人までも潤すことが出來るので御座います、また紙とても其通りで、是も私は永年實行し來つて居りますが、私が紙屑籠へ入れますまでは却々容易な事ではありませぬ、極短い手紙や、又は左まで考へなくとも宜い事は直ちに書附ける事も御座いますが、大抵は一度下書を致します、それを爲るには、必ず歳月が經つて最早入用で無いといふ古い書面の裏へピッシリ細々と下書を爲るので御座いますから、私の反古と申したら殆んど裏表とも隙間なしに書いて、其から屑籠へ入れるので御座いますから、決して新らしい卷紙を無駄にするやうな憂ひは無いのであります、それから滅太に其樣な事は無いのでありますが、或時據ろない用事がありました爲に、極心易い方に代筆をお賴み致しました所が、隨分その方は私などゝは違つて達筆の方で御座いますが、最早出來上つた時分であらうと思つて見ますと、少し書いては引き裂き、また少し書いては引き裂かれて、新らしい一本の卷紙が、殘り僅かに二分位に減じて仕舞つたのでありますけれども、まだ手書は出來上らないので、之を見ました私は驚きましのみならず、之は頓だ事をした、自分で認めさへすれば卷紙を斯樣に粗末にする事は無いものを、少し自分が骨惜みをした爲に斯くも不經濟の事を仕出來して相濟まぬ事をしたと心附きましたから、それからと云ふものは決して人樣に代筆などゝいふ事は御賴み申すまいと極めました、若しも此時に卷紙が我々人間のやうに口を利くものでありましたならば、必ずそれだけの用を充さないのでは無い、充させないのでありますから、乾度不平を鳴らしたに違ひありませぬ、又鳴らされても申し開きやうが無いので御座います、口を利かないから宜しいやうなものでありますが、私共の手に渡つて重寶いたします迄の間の製造人の骨折りを考へましても、決して左樣粗末に出來るものでは御座いません、總て物の冥利といふ事を考へなければな

らぬものであります、私共の娘を學校へ遣はします頃は、今日は御清書の日であると申しましても、一枚なり二枚なり其日の清書に入用だけしか白紙を持たせて遣りません、隨分餘所さまの御子さんは澤山に持つて行かれて、書き損ひも可成なさるさうで、それを見まする娘の心の裡には、隨分內の御母さんは酷いといふやうな、多少不平不滿も有つたらしかつたので御座いますが、その後一家の主婦となりましてからは、それが何彼につけて大に自分を利益する、是といふも畢竟母の御蔭であるなどゝ申して居ります、一體清書いたしますにも、外に替りがあると思ふと氣が緩むもので御座いますが、最早是切りしか無いと思ひますれば、決して書損じを爲るものではありません、此く一枚の紙たりとも粗末にせぬやうにするのは、これ即ち道德の根本といふもので御座います、また斯樣に心に締りがありさへすれば、これ軈て成功の基となるので御座います、

又裁縫の事でも左樣で御座います、必ず仕事を始める前に能く針の數を勘定してから掛るやうにし、終つた時には再び能く之を勘定して、初めの數と過ふや否やを調べて收めるやうにさへすれば、決して針の粗末になるものではありませんが、兎角待ちなどを打ちましたものは、どうも克く頭髮や襟の邊などに刺したがるものでありますが、是等は尤も愼しむべき事であります、何故かといふに、誰も忘れやうと思ふものはありませんけれども、兎角頭髮や襟の邊に刺したものは忘れ勝ちになるもので、その上直に落ち易いので御座います、よく昔からもある事で、針を蹈貫した爲に一命を殞したなどゝいふ事は決して尠なく無いのであります、是は實に危險で御座いますから、斷じて頭髮や襟の邊に刺す事は止めなければなりませぬ、さうして前にも述べました如く、仕事の終りには必ず一應勘定して仕舞うやうにすれば、決して夫等の憂は無いのでありますから、此事は少い人も又主婦たる者も必ず心に掛けて居らねばなりません、是を粗末にするやうな女子は、決し

て家政の整理などが出來るものでは御座いませぬ、

次に冬の日、これは冬には限らないのでありますが、殊に冬は寒くて火を澤山に起しますから、まづ冬の日と申したのであります、その冬の日外出するに方りて、火鉢の火の起つたまゝ構はずに外出するやうな者は成功しない、けれども能く之を埋て出るやうな書生は成功するといふので御座いますが、是は一家の中でも左様で御座います、御客でもある時は兎も角、その客が歸られたならば、寄すべきものは寄せ、埋べき火は埋て置くといふやうに心を配らなければなりませぬ、

それから襖の開閉で御座いますが、これは徐かに優やかに致さねばなりませぬ、もしも荒々しく開閉するやうな事がありましては、その者の心の底も見え透きまして、無下の卑しき振舞として人より擯斥いたされますから、是もまた十分注意しなければならぬのであります、

次は物を借りる事で御座いますが、能く生徒間などでは鉛筆の借貸などを致します、けれども借りた者が遣ひ放しで返す者が多いやうに見受けます、固より鉛筆は遣へば減るものに極つて居ます、けれども遣つて減つたならば、その爲に自分は用を充したので御座いますから、必ず削つて感謝の意を表して返さなければならないので御座います、然るに多くは左様で無いのであります、依つて是等はホンの僅かな事でありますが、どうか左様して借りた物は還したいもので御座います、

次は學資の遣ひ拂ひを明細に記帳する事を怠つてはならぬと云つてあるので御座いますが、學生としては大切の事でありますが、今これを一家に移して申しましたならば、日々の小使等を事細かに記帳するのは大切の事であります、何故かと申しまするに、この帳面に記すといふ事を致しませんと、頓と自分の所の一ヶ月の經濟は幾ら掛つたのであるか、サッパリ分りません、たゞ分らないばかりでは無い、どうしても無駄な出費が嵩むものであります、所が之

を明細に記しますと、先月は幾ら、先々月は幾ら、今月は幾ら〳〵掛つたといふ事が一目に分るのみでは無い、先月は今月に比すれば幾ら〳〵餘計に掛つたが、是は何と何の臨時に支出があつた爲であるが、兎に角平均毎月幾ら位掛るといふ標準が取れる、ソコデ尚ほ是を斯うして、彼をアーしてと工夫を凝す時は、直ちに幾分の餘裕を生ぜしむる事が出來る、これ即ち主婦たる者が家政を整理して行く上に於て缺ぐべからざる事であります、

それから人樣から來た手紙の取扱で御座いますが、必ず人樣から下さつた手紙は、再應之を讀んで成るべく二三年間位、物に由りましては生涯大切に保存して置くやうにしなければ不可ませぬ、是は先方を敬するのであります、そして二三年位の後、最早用事も濟んだと思ひましたならば、前申すやうに下書に之を遣ふといふやうにさへすれば、決して先方へ對しても失禮にはなりません、是と聯絡した事で、兎角世の中では手紙の返事を遅れさせる者が多いやうで御座いますが、直ぐに書けば左程詫言も入らないのに、少し不精した爲に種々の過まり口上を書いて遣らなければならぬ事になる、尤も少し考へねば爲らぬ事は別として、左も無い事は成るべく早く出すに限るので御座います、私は幾ら餘所から遅く戻りましても、必ず其日の手紙は其晩に一切片附けて、決して一本も殘しては置きませぬ、チヨット苦しいやうで御座いますが、慣れば夫程のものではありませぬ、それでありますから翌日は忙しい思をする事はありません、第一それに返事を待つて居る人も悦ぶので御座います、

次に墨であります、是まで兎角曲げて菱のやうにする者がありますが、さういふ者は成功しないと申して御座います、私は以前から曲げる事が大嫌ひなるのみならず、是まで墨の餘りといふものを出した事は御座いません、最早指で摘めないやうに薄くなりますれば、それを新らしい墨の小口へ喰付けて遣ひますから、決して墨の小片が出るといふ事は無

い、最早紙のやうに薄くなるとモー減るか〳〵と思つて却々樂しみなもので御座います、

それから日記は必ず其日の終りに書くべきこと、書翰は書き終りたる後、必ず再應讀んで誤字や脫字または意味の不足などの無いやうに氣を付けて出すべきこと、學問に限らず何事でも、それを爲すに方りては、必ず傍目などを觸つて心を散らさぬやうにすべき事、足袋は必ず補綴で穿くべき事、私は宅に居ります時は必ず補綴だものを穿いて居ります、若し餘り酷くなりますれば、夜でも尙ほチヨツト補綴で下婢に遣はしますと喜んで穿きます、此樣な鹽梅に、縱ひ紙一枚針一本でも粗末にしないやうに爲るのは、啻に自分が身の得のみでは無い、即ち世の中を渡る上に於て道德上の得ともなるのでありますれば、どうか左樣いふ良い習慣を附けられん事を望むので御座います、

花すみれ

菅　惠子

すみれ

來て見れば岡邊の里のつぼすみれ
　つむべきほどに萠出でにけり

ふむはをしふまずはゆかむすべもなし
　みちも狹にさく花すみれかな

うなゐ子が學びの道のゆきかひに
　すみれつむこそたのしかるらめ

さわらび

まれにだにかよふ人なき足びきの
　やまのさわらびをるもめづらし

こてふ

雨晴れて草葉のうへに打ねむる
　こてふなつかし春のゆふぐれ

乙女子が遊ぶたもとにたはむるゝ
　てふの羽風もにほひぬるかな

電氣と植物

農學士　新野良吉

電氣が諸種の工業等に應用せられつゝある事は、今更めて云ふまでもないのである、然るに今茲に突然斯やうな問題を出しましたならば、讀者は定めて奇異の感を起さるゝであらうと想ふのである、元來電氣といふものゝ發明は、まださう古いものでは無いが、最早電信または電話、若くは電燈といふやうに之を利用さるゝのみならず、東京大阪等の都會には、既に電車といふものさへ完成せられて、日々之が爲に幾何といふ程の利便を得て居るのである、斯やうに電氣といふものは、之が利用の方法に依りては、吾人に若干の利便を與へるものであるが、一朝之が取扱を誤ると、ツイ先頃兩國橋の下に引いてある電線に故障があつて、既に出來上つたばかりの兩國橋を灰にして了はうとした事のあるやうに、實に危險千萬なのである、

一體物といふものは、何事でも一利一害は免れ難いもので、例へば、毎日三度喫べる御飯でも、適宜に食べておきさへすれば身體健全の基となるものである、けれども若しも之を過ごせば、忽ちにして胃や腸を傷めるやうなものである、電氣も其と同一である、故に安全といひ危險といふも、畢竟は之が取扱の如何に由るのである、同じ電氣でも人を殺し

もすれば又活かしもするのである、ソコデ段々其等の研究を經たる結果、之を植物の栽培に應用することを發見せられたのである、尤も是は我國では殆んど稀であるが、歐米の各國では却々盛んなものである、併しこの

電氣の栽培法

は、まださう古くは無い、漸く今を去ること二百年前卽ち十七世紀の末に、英人のマンブレース氏といふのが始められたもので、是は電氣の光力を假りて、夜分日光の代用をさせる仕方である、何れにもせよ此の研究は萠を出したので、降つて十八世紀の初年に及びまして、佛國の學者も之に就て種々研究せられたけれども、何分此の時代は今と異り、電氣といふもの丶本體に關して暗黒面が多かつたのであるから、從つて植物と生理との關係を精密に取調べることが出來ないので、自然その成績も佳くはないのである、

然るに其後ノーヂインといふ人が、豆類や茄子および髙苣の類を植えて、外面から電氣を通じた所が、非常に發育が佳くて良成績を



得たといふ事である、けれども是等の試驗は、左程世人の注意を惹くには至らなかつた、所が、今日街上等に立てるアーク燈の發明者たるウイリアム、レーメンス氏が英國に現はれて、

自分の庭園にて試驗を始められたのであるが、是は十八世紀の末で、西暦一千八百八十年に世上へ公にせられたのである、その法は、初め五千燭光の電燈一臺づゝ即ち二本設けて、之を二つの温室の植物に試みやうとしたのである、而して其一つを温室内に、他の一つは温室外の高さ二間程の所に据えおき、温室内には自から種子を蒔き、又は他より苗を移して其發育の有樣を試ましたが、その結果は何れも面白からぬのみか、温室内に電燈を置いたものは一層不成績であつたので、同氏は種々考案の末、

色硝子にて電燈を覆ふた所が、白硝子で蔽ふたものが一番生育が佳く、黄色のものは、生長が緩慢で、その上植物の色が薄く、

紅色のものは、生育中に葉の色が漸次に褪せて、遂に黄色に變じて了ひ、綠色のものは、殆んど形無しであつたといふ事である、而して其發育の好いもの即ち白色を以て蔽ふたるクサイチゴは、十二月十日に植えたものが二月十四日には立派に成熟したのである、

それより後同氏は色硝子を廢めて、全く無色透明のものを用ゐ、電燈は屋外の高さ一間程の所に据え付け、尙ほ之に光力の加減の出來るやうな仕掛けとなして、芹、大根、蕪菁、蠶豆、胡瓜といふやうな、最も發育の早い種類を撰び、之を種から下し又は苗となして數多の鉢に植え、之を第一全く暗黑なる處、第二電燈のみに照す處、第三日光のみに照す處、第四晝は日光夜分は電光にて照す處といふ風に區分して試みました所が、第一のものは葉が淡綠色となつて數日にして枯れて了ひ、第二のものは、同じく葉は淡綠色となつたが、發育は佳良であつた、第三のものは、濃綠で生育は强盛であつたが、第四の

ものは殊に勝れて濃緑で、發育も最好成績であつた、之に由つて見るときは、日光が如何に植物の發育に關係が深いかといふ事は知らるゝのである、のみならず是は今日までに既に定說となつて居るのであるが、

電光の植物に及ぼす効力

も、また第四の塲合に於て知了せらるゝのである、大抵の植物には向日性と云つて、その枝や花瓣が、日光の射して來る方へ曲り傾く性質を有つて居るもので、之は單に日光ばかりでは無い、電光に對しても亦この性を現はすのである、彼の通俗に日廻りと稱ふる植物の事は諸嬢も御承知の事であるが、ケシナ抔もさうである、今その一莖の一方へ傾いたものを挿して、之を電光と反對の方に向けて置けば、僅か二時間か乃至三時間位で、必ず電光のある方へ廻旋する事が分かる、

此くまで植物に光りといふものが必要であるに拘はらず、同氏は電燈を室內へ入れた所が、植物は皆委縮して了つたので、成程是は直射せしめては可くないけれども、適當の方法を以て之が生育を助け得らるゝものであるといふ事だけは證明せられたのである、併しながら同氏は尙ほ之に滿足せずして、之を外園に試みられた、その植物は蔬菜や花卉の類の中でも、矢張生育の早いものを擇んだのであるが、是は何れも美事で、殊に花卉の類は光澤が艶麗であつたので、無論日光のみに照すよりも好いといふ事を事實の上に認められた、且つ此の電燈を用うる時は

霜の害をも防ぐ事が出來る

のである、して見れば二重の利益があると云はなければならぬ、而して斯やうな塲合には、千四百燭のものは地上六尺位、六千燭のものなれば同じく一丈六七尺位の高さに据えつけねばならぬ、

同氏が一たび之を公けにせられましてから、近年に至りて、英のセフアード氏や米のロートン氏の如きは、之を實際に稍廣く應用せられて居る、殊に口

ートン氏は、長さ三十五間巾四間の温室内にチサを植え、終夜電燈を照した所が、凡て熟するまでの日數の二割方も早く收獲する事が出來たといふ事である、去りながら今日までの所、如何にも電燈料が安くないので、孰れも閉口の有樣である、若し今日より安價に之を得られたならば、我國貿易品の第一位を占むる生絲の原料を作る、彼の蠶兒を養ふべき桑樹は、毎年霜のために多大の害を蒙むるといふ事を見聞するが、單に是までのやうな、燒火即ち薫烟法などゝいふ姑息の策を取らないで、大いに奮發して組合なりと設けて、この電燈を設置した事ならば、啻に年々恐るべき霜害等を防ぎ得るのみならず、安全に蠶兒をも飼育する事が出來るであらうと思ふが、併し一朝一夕には望むことも得られない、

以上は外部より電光を植物に射映したる結果を述べたものであるが、此の外尚ほ電流を地中に通じて植物の發育に資するの一法があるのである、けれども是はまだ其研究が甚だ幼稚で、迚も前者とは比較

が出來ないのである、併し是とても皆それ〳〵の專門大家の手に由つて研究せられつゝあることとなれば、遠からずして之が利用の福音を持ち來たさるゝことであらうと想ふ、何は兎もあれ、諸姉は若し機會を得たならば、前に一例を擧げたるやうに、一莖の草なり花なりを取り來りて試みらるゝのも一興であらう、否、一興のみでは無い、科學の智識を得るの一端となるのである、

支那料理

嘉悦孝子

清蒸海鯵

なまこをうでゝ、はらをさき、よく洗ひ、細かに切りて、再び湯がき、外に鳥をそぎ身にして、一緒に茶碗に入れ、スープと醤油及び酒少々を加へて蒸すなり、

炒魚片

魚の肉をそぎて、醤油に浸しおき、コセウをふりかけ、粉を玉子にてときたるものをころもにして揚げる、

紅燒魚

生きたる鯉の首を切り、中のものを出して、よく洗ひ、両面にうすく庖丁を入れて筋をつけ、五分位の厚さに切りて、是をつよき油にて揚げ、それをソップで煮、酒と醤油を少し入れて、いんぎんを細かく切りて一緒に入れ、薄くずをかける、

菜菇鶏

鳥をよく／＼洗ひ、丸のまゝ二時間許り茹で、肉を骨からむしり取り、ぶつ／＼に切り、推茸を肉だけ位、これも湯につけて適宜に切りおき、ねぎ生姜を例の如く切り、鍋に油を少々煮立て、最初鶏の膽などを、推茸ねぎなど〻えびりて後、鳥と生姜を入れ、スープを煮立て〻入れ、醤油一杯半へ鶏七百五十匁位入れ、しばし煮て、うき粉を入れて終る、



爆炒鶏

油にて鶏の骨ごとブツ／＼に切りたるをいため、ミジン生姜を入れ、醤油半柄杓位入れ、水を浸々入れて、二時間計り煮る、

炸蝦球

伊勢蝦の皮をむぎ、細かに切りて、豚肉をたゝきませ、鹽及び胡椒をふり、醤油少しを入れてよくねり、又カタクリの粉をとかして其中に入れ、玉子の白味も共に入れて、よくかきませ、これをまるめて油で揚げる、

化粧は愛の泉なり

松山裕吉

男は裸體八貫といふことは昔から云ひ傳へられてありますが、如何に男子だからと云ても丸の裸では價値の無いものであります、尤もその人物の直段が一旦認められた後であつたならば、或は裸八貫に買はれる事が無いでもあるまいが、兎に角赤裸々のままでは買者が附かないのであります、況して明治の今日では、相當な力がある上に風采が佳くないと賣口が遠いのみならず、空しく槽櫪の間に生涯を不遇に喞たなければならない、否、さういふ例は吾人の

眼前に多々觸れて居るのであります、であるからして、男子といへども人中に出る時には、必ずそれ相當の風姿を形作らなければならぬ、何もそれを仕たからとて洒落るといふ譯ではありませぬ、畢竟これは自分の威厳を保つと同時に、他に對して敬意を拂ふの主意に基づくのであります、併し風姿や容儀を繕ふと云つても、當時の流行とは云ひながら、角刈とか稱ふる、天邊から後頭の部分は無暗に長くして置いて、揉上げの處は極めて短かく切り上げ、チヨツト見ると鍋でも被つたやうな頭髪を粧ひ、さうしてチツクなどで矢鱈に光らせ、且つ香はせて居るなどは餘り感心いたさない、と云つて、頭髪は恰も百舌の巣のやうに蓬々として置き、顔面や襟元は垢で黒染んで居る、その上穿いて行つた草履は薙刀形を仕て居るといふやうではならぬのでおります、山陽の時に、衣は骭に至り袖腕に到るといふ句がありまして、維新初年の書生は之を理想として、殊更に短い着物や袴を着けたものでありますが、近年は大い

に其風が廢れましたが、その反面には優柔の風が蔓つて來たやうであります、之は頗る憂ふべき現象と思ふ、以上は重に男子側の方面の事に屬するので、之に就て尚ほ言ひたい事は澤山あるけれども、まづそれは後日に讓ることゝして、以下女子の方面に就て愚案を述べて見やう、

女子は己を愛する者の爲に形作るとは古くからの諺であるが、予は單に己を愛する者の爲のみならずして、女子は一般に愛せられざる者の爲にも亦形造らねばならぬものであると斷言するに憚らぬのであります、世には女子の化粧するのを、恰も罪であるかのやうに唱ふる輩もあるが、予は斷じて左樣いふ事は無い、女子たる者は飽迄も化粧せなければならぬもの、この化粧を怠るものは女にあらずして變女であると極言することを得ると思ふ、何故なれば、

女子は世界に於ける花

であるからである、尤も花の中にも必ず美なり麗なるものゝみでは無くして、時としては甚だ美ならざるものも無いとは云へないが、併し花と名の附く程のものは、その程度こそ異なるけれども、吾人に美感を與へざるものは一種も無いのであります、若しも世の中に剛健なる男子のみで、

優麗なる花の如き女子

が無かつたならば、如何に此の社會は乾燥無味であるか、恰かも磊塊たる石河原の如きものであらうと察せらるゝ、併し幸ひにも造化の妙巧は、乾剛直々たる松樹の軀幹の如き男子の間に、坤柔楚々として且つ婉麗なる桃李の花の如き女子を配して融和せられた事を思へば實に感謝に堪へないのであります、既に此くの如く、女子は社會の花として先天的に化粧すべく約束せられたものであります、然かも此の先天的の約束を履まずして、或は化粧することを厭ひ、或は化粧の時代が過去つたなど云つて之を怠るのみならず、甚しきは毫も之を施さない者さへあるが、それらの人々は、

この先天的の約束を壞る

ものと云はなければならぬのであります、造化の爲に生々發育せられた地上の植物は、彼の常盤木の類を除くの外は、大抵秋より冬になれば、葉は悉く木枯しのために散り果てしまふが、春になれば再び芽を出して、紅紫白黄己がまに／＼形作りて花咲き、さうして我々人類を悦ばしむるのであります、未だ曾て彼等が時を違へたことはありませぬ、植物が此く花咲くのは、秋より冬にかけて山骨露はれ梢頭また一葉の目を娯しましむることなき、その乾燥無味なる社會を飾るべく造化より催告せられて咲出づるのであります、植物の類は知らるゝ如く春のみ重に花を開くのでありますが、女子は生涯を通じて社會の花とならねばならぬのであります、その花となつて世の中を飾るには、先づ第一に自己が化粧を施さねばならぬのであります、世の諺に、馬士にも衣裳と申しますが如く、我々人類には服裝が大切であります、古來傳ふる所の楊貴妃、毛嬙、西施、我國の小野小町、照手姫といふやうな美人達でも、もし此等の人々に襤褸やお菰を纏はせて出したら如何でせう、玉は自から土中にあつても光りのあるものであるとは云ひますが、之を磨いて錦の蒲團の上に据えましたものとは、迚も比べものに爲るものではありませぬ、でありますから、前に擧げた美人達でも、それ相應な服裝をしますれば一層見上げるやうに爲るのであります、實は少々後先になりますが、服裝の事が出ましたから序に申しますが、どうも近頃の婦人の服裝を見まするに、随分我後れじと流行を趁うて珍柄を撰び、金に飽かせて盛裝せらるゝので、ザット積つても一つの身體に、廉くて三百圓乃至五百圓といふ大金を掛けてあるのでありますが、如何なるものか、能く其人に似附いた、感心したといふのは一人も見受けない、此くまで大金を掛けて何故であらうかと、實に心中不思議に堪へないのでありました、所が此頃になつて、漸く成程と氣が附いて見れば是また無理で無いと考へるのであります、それは外でも無い、當今の女子は古の女子に比ぶれ

ば、學問もあり又智惠も優れて居る、この點は優れて居るけれども、色の配合とか、縞柄の見立てとかいふ點になると、殘念ながら、眼識が古代の者より劣つて居るといはなければならぬのであります、それでありますから、之が流行だといへば、自分の身體に相應不相應をも甄別することと無くして、たゞ一意流行に後れまいとの虛榮心より之を着るといふ風であります。昔の女子は左様で無い、縦ひ流行であると云つても、尚ほ能くその流行を己の身體に相應する



やうに同化して用ゐたものであります、それ故に實に克く似合ふのでありますけれども、今は自分に之を同化する所では無い、概ね流行の方に變化されて了ひますから、折角大金を抛つて不似合な格好に陷るのみならず、時としては自己の天然の美まで沒却するやうな事に立至るのであります、左ればば衣服の流行を趁ふにしても、櫻の木に桃の花を咲かすやうな事の無いやうにしたいものであります。

愛らしき乙女兒が化粧した姿は得も云はれない愛

敬もあり、又捨て難い風情のあるものでありますが、若しも之に反して散し髪となり、膝の脱けたやうな衣服を着て、跉跛の下駄でも穿いて居た時は、吾人は少なからぬ悪感を催するものであります、此く頑是なき乙女兒ですらも斯様であります、況して年頃になつた娘や孃さん達などは、尤も注意して化粧を怠つてはなりません、我國には古しへから、化粧は女子の身嗜みとまで申され、妻はきぬ／＼に寢亂れの容貌を夫に見せるものでは無いとまで云ひ傳へられてありまして、化粧は女子に取つて、縱ひ幾つにならうが、必ず日課の第一として毎朝之を施さねばならぬ事と定められてあるのであります、而もモー私はなど丶申して、小兒の一人か二人も有ちますと、頓と怠つて之を爲ない方がありますが、それは宜しくありませぬ、縱ひ小兒が有らうが無からうが、又年が若からうが年老であらうが、女子としては是非とも斯化粧をしなければならないのであります、併し化粧を爲ると云つても、一様には申されませぬ、即ち

年齢と自己の地位職業

等に由つて異らなければならぬ、といふものは、大工や左官の娘や妻君が、如何に金錢に不自由はしない、事は缺がないといつても、華族や高等官の所の孃さんや奥様の風をするのは宜しくありません、また華族や勅任官の孃さんや奥さんは、如何に或一種の商賣人が粋な容姿を爲るからと云つても、決して其を眞似てはなりませぬ、自から社會には階級といふものもあれば、從つて之に伴ふ威嚴といふものが無ければなりませぬ、その威嚴を保つ上には自からまた自己の品位を落さないだけの容儀といふものを繕はなければならぬのであります、若しも或一種の商賣人が、善良なる家庭の奥様のやうに化粧して、集會等の席へ出ましてもツント澄して居たならば如何でせう、實に興の醒めることであらうと察せられます、一體私は無粋と申される方で、宴會の席などへ彼等を招くといふ事は大の不賛成の一人であり

ますが、是も世の風潮とやらで急に之を廢する事出來ないでありませうが、行く〳〵は廢したいとへて居ります、

元來彼等を宴會等に侍せしめて興を補くるといふ事は、餘り西洋諸國には聞かない事で、獨り我日本にのみ限るやうであります、何故我國では之を要し彼國では之を不必要とするかといふに、歸する所は

女子が常に化粧を怠るからであらうと思はれる、歐米の諸國では、若い娘や娘さん達は云ふに及ばず、人の妻となつてからも、皆それ〳〵年配に應じて化粧を施し、さうして愛の根本に培ふことを怠らぬさうで、實に克く身嗜みを忘れぬことは意想外であるとの事であります、一例を云へば、彼方では年の若い者よりも却つて年を取つた婦人の方が化粧料を餘計に要するとの事であります、併し此く年老が多分の化粧料を要すると云ひましても、七ツ下りの雨と何とか云ふ諺がありますが、それに於ける婦人のやうに、年にも耻ぢず厚化粧を爲るといふのではありませぬ、何處までも年相當に天然の美の衰へたる部分を補はんが爲に、細心なる注意を以て化粧を施すのであります、我國に於ける婦人の、中年増または年増などいふ年齡に達し

婦人の多くは、或一部分を除くの外、概してモー此年になつて、又は婆アさんになりまして抔と云つて、頭髮は櫛卷となし、衣服は色の褪めたものを着して得々たる者とは雲泥の相違であります、年の若い時分には、別に飾らなくとも艶々した天然の美を具へて居るから宜いけれども、五年十年と歲月を經ると共に、生理上の關係よりして漸次に其美が減衰して來るのであるから、之を補ふには是非とも人爲の化粧を施さねばならぬので、之は前に述べた植物の例に依つても明らかなる當然の理であります、世には一にも西洋二にも西洋と云つて、自分が西洋に生れなかつたのを不足さうに思ふ者さへあるが、私はさう一から十まで西洋を眞似ることは嫌ひでありますが、この年齡に從つて化粧を施すといふ點だけは至

極尤もの事であると感心いたして居ります、

一體化粧といふものは、單に己を美しく見せるといふ事の爲のみに施すのでは無からうと思ふ、云ふまでも無く其裏面には他の愛を買はんが爲であるには相違ないが、私の思ふのには其ればかりではあるまいと考へる、固より女子が優にやさしく化粧したる姿を見る時は、如何なる猛き武士も心を和らぐるに相違ない、その和らぐるといふのは、決して今日自然派とか稱する或一部人士の云ふやうな醜穢なる異分子は、毫も其間に頭を出す事を許さないのであります否、頭を出すものでは無い、之を飲食に喩ふれば、男子は猶ほ米飯の如く、女子は恰も副食物のやうなものである、若し此の世の中に米飯の男子のみであつたならば、必ずや鬪諍紛爭は絶えぬであらうが、幸ひにも其間にも副食物の如き女子なる者があつて、始めて世の中といふ咽喉の中を樂々と暮して行く事が出來るのであります、

前來述ぶるが如く、女子は社會の花として生れ來つたものであるから、如處までも斯心を失はないで、務めて化粧を施し、さうして社會を融和する事を怠つてはなりませぬ、而して其化粧は必ず態とらしからぬやうに施さねばなりませぬ、左すれば何時までも愛の泉は涸れるものではありませぬ、

各女學校卒業式

△女子美術學校　は去廿六日に△三輪田高等女學校は仝廿七日に△跡見女學校　は仝日に△府立第二高等女學校　は廿九日に△東京女子師範學校　は仝日に△女子高等師範學校　は仝三十日に△共立女子職業學校　は仝日に△東京裁縫女學校　は來る二日に△成美女學校　は仝三日に△東洋女學校　は仝日に各卒業式を行ふ

◎東京音樂院卒業式　去二十二日午後一時半開會、三宅文學博士東儀鐵笛氏の講話其他各種の洋樂演奏等ありて頗る盛會なりき同院は天谷秀氏の院長にて評判極めてよし


小説雪道
桃水作

小說

雪道

半井桃水

一

劍の山血の池と、佛家で敎へる地獄の様も、旅順要塞攻擊の慘狀に較べては、何か物の數でもない、機關砲は熱鐵の雨を降らし、手擲爆彈は猛火の瀧を漲らす、天柱を裂く曳火彈地維を碎く埋設雷火、屍の山、血潮の海、腥風腥雨、正しく此の世の地獄である。

其の第一の角面堡攻擊の任に當り、千辛萬苦を堪へしのんで、數回の夜襲突擊を行ひ、最後の奮鬪功を奏して、さしも堅牢の砲臺に、日章旗高く揭げたるを見、全身蜂の巣の如く、無數の彈丸に穿れた大隊長勝山少佐は、欣然一笑、帝國萬歲を唱へ畢つて、忽ち不歸の客となつた。

嗚呼軍神勝山少佐――旅順要塞本防禦線の第一關を打破つて攻擊進捗の道を開いた勝山少佐が散際の潔く潔よき、花ならば櫻、誠に武人の龜鑑として、世にはやされたのも、早四年の昔となつた。

少佐が遺孤の英郎は、母壽子の胎内にあつて、父が出征を見送つた儘、不便や永の別れとなり、父の顏は寫眞での外見た事がないのである、英郎は日當の好い椽側に、兵隊人形を飾付け『竹橋の兵隊さんは』と可愛い聲に歌つて居る。

勝山少佐が戰死の當時、名譽ある未亡人、勝山氏の賢夫人と、全國の新聞雜誌に、肖像を揭げられ、一擧一動悉く賞賛の種となつた壽子は、六疊の不斷所で、英郎の衣服を縫うて居る、其の傍らには米と云ふ、三十前後の年增の下女が、頻りに小聲で喋舌ながら、吩付られた縫物をする。

『夫人さま、往らつしやいましよ、折角俣野さんの夫人さまも、彼なに仰しやつたぢやア御座いませんか

慈善會にでも往らつしやらないと、お體が續きやアしませんワ、如何に旦那樣が立派な戰死を遊ばしたからと申して、御隱居さまの樣に、窮屈な事ばつかり仰しやつて居た日には、必然御病氣が起ります、二十三や四の若盛りから坊ちやまお一人を樂しみに、生涯後家を立通して居らつしやらうと申すのは、容易な事ぢやア御座いません、少しは物見遊山にでも往らつしやるとか、何か貴姐お樂しみがなくて、月日が送れますものですか、倶野さんの夫人さまなんか御覽遊ばせ、彼の方の旦那さまも、矢張同じ軍人で、戰死なすつたんで御座いませう、だけども彼の方は、直に暇をお取になつてお嫁入をなすつたんです、加之にお金持で、大變立派な旦那さまだと申す事ぢや御座いませんか、だから此の節は慈善會だの、婦人會だのと仰しやつて、大方毎日お出掛にならない事は御座いません、服裝も取換へ引かへ、昨日は洋服で御座いました、最早今年になつてからでも、三組か四組、奇麗なお服が出來ましたでせう」

脣の働く程、手の方はお留守になつて、釋物は捗取らぬ、

「倶野さんはお幸福です、好い處へお嫁に入つて……大層お金があるさうだから……」

「夫人さま、斯申しちやア相濟ませんが、貴姐も最初に御隱居さまが、今の年から小兒を相手に後家を立さすのは可愛さうだ、寧そ離別した方が好からうと仰しやつた時、左樣してお置になるとお幸福だか知れませんのに、坊ちやまがお出遊ばすばつかりで……そりやもう坊ちまが御成人遊ばして、立派な方におなりになれば、御安心で御座いますが、まだ〳〵十五年や二十年では、ねへ夫人さま」

「何して男の兒一人、母親の手で滿足に、育て上げるといふ事は、なか〳〵容易ぢやありません、夫れにお父樣も彼の通り、隨分おむつかしい方だから、私も末始終何だらうかと思はないぢやアなかつたが、其逆貴父とお交際が出來ませんから、離緣して頂きませうと、そんな事も言はれやアしないし、イーエ何處

までも坊を育て、立派な軍人に致しますと、立派な口を吐たもの丶、お年老す程お父樣は、氣むつかしうおなり遊ばす、私の體はおひ〳〵弱る、今若し病氣でも仕出して、餘計なお金でも使ふといふと、夫こそ皆なの難儀です、ほんの僅かの貯金の利子と、扶助料とで何やら斯やら、家の生計を立て居るのに、若し預金に手でも着けると、今の生計だつて出來なくなる、さもなくてさへ此頃のやうに、追々物價が高くなつては、私何したら好いかと思ふワ、ア、俣野さんはお羨しい」

時の勢ひ無理やり、賢夫人として祭上げられた壽子は、戰死した良人の家をふり棄て出た俣野きみ子を、曾て罵つた其の舌で、今は羨ましがるまでに、賢夫人の箔がはげた。

「俣野の夫人さまでさへ、彼いふ好い處へ嫁らつしやる事が出來ますもの、貴姐なんか何な處へでも嫁らつしやられます」

此の時離れの八疊から、隱居英高が呼ぶ聲に、米は急に口を閉ぢ、首を縮めて笑ひながら、唯々と返事して、椽側傳ひ彼處に急いだ、

二

勝山少佐の實父英高は、最早七十に間もないが、昔氣質の頑固一徹、伜英敏が存生中は、優しい御隱居樣で、庭の掃除と植木の手入を、日々の勤として、家事には一切喙を容れることもなかつたが、英敏戰死して後は、女小兒の監督、今まで通り御隱居さまで、目をつぶつては居られまいと、折角名譽の戰死を遂げた、英敏が爲め家の爲め、世間に耻をかくまいと、總ての事に干渉するので、壽子は次第に蒼蠅がり、口に出してはしたなく言爭ふ事こそなけれ、胸の内ではお互ひに、面白からぬ思ひをして、明し暮す日數も積り、此頃となつては召使の下女までが、英高の機嫌を取るに、壽子の蔭事を告げ、壽子の心に叶ふ爲、

英高の離訴訟するまで、家庭は圓滿を缺くに至つた。

壽子は二十の歳、高等女學校を卒業して、翌年勝山英敏に嫁した、英敏は其の頃大尉で、陸軍大學に入つて居たが、卒業すると間もなく、日露の戰爭が始まつたので、直ちに軍參謀に任じ、出征を命じられた。出征後英敏は、程なく少佐に進級したが、双眼鏡と地圖をもつて、戰するのはまどろつこい、是非前線に出たいと云ふので、少佐は軍司令官に乞ひ、大隊長となつて、最も攻撃困難の方面を引受け、花々しき戰死を遂げた。

貧乏大尉の中間を脱て、今からは上長官、漸次生計向も樂になり、後々は參謀總長元帥夫人と尊められ、爵祿を授りてと、空中に樓閣を築き、榮達の未來を夢みて、滿々たる虚榮心を、自から慰めた壽子は、二十三の秋良人に別れ、緑の髮をふつつり切つて、遺骨の柩に投入れた。

當時は諸處の追悼會や、婦人會に出席しても、軍神の未亡人よ、鬼少佐の夫人よと世間から敬はれ、見も知らぬ小學生徒に、敬禮受る事もあり、無上の面目を施したが、去る者は日々に疎く、世人はいつまでも戰爭中の樣に、戰死者の遺族に對して、同情も寄せてはくれず、尊敬も拂つてくれぬ、廣がつた肩身も、追々狹くなり、空中に築いて置いた元帥の樓閣は、いつか烟のやうに消え、今では英郎が成長を待つ外何一つ樂しみもなく、軍神の未亡人も、勝山家の賢夫人も、唯の若後家になつて來た。

平和克復は壽子が身に取り、最も不愉快な事であつた、何故といふに、以前下級に居た軍人が、大方は少佐に進み、中には聯隊長とまで、出世した者もある、何れ勳章を輝らかして、祝捷會に列し、歡迎會に臨み、戰爭は己がしたと言はんばかりの顔は、お芽出たうと口では言へど、腹の中では戰死する程働く者がなかつたら、何で戰が勝てませう、フヽンと笑つて置いたものゝ、羨しいは凱旋をした將校の夫人さん連、

いつの間にか其の指に、金剛石が輝めいたり、胸に金の鎖が掛つて、是見よがしに時めくのが、何よりも目障りであつた。

『夫人さん、良人も戰爭中に一度は負傷致したんですと、其の養生に一月ばかり、函根に行つて參りますから、今日は爲渡お暇乞ひに、マア此の時計で御座いますか、三年も留守をした御褒美が是ですの』と、不足らしい言ひながら、誇りは鼻にぶら下り、景氣の好いこと夥しい、自分は一生留守をして、得た御褒美は涙と苦勞、斯うなれば死だ者が馬鹿々々しい、死なれた者は何馬鹿々々しいと、詰らぬ愚痴も涌て出る、ツイ夫が耳に入るので、英高は目を圓くして、壽子が擧動を監視する。

『假令英敏が生前の親友であらうと、格別の用もないのに、屢出入さしては不可、軍神とまで歌はれた勝山英敏が妻、決して不都合のあらう筈はないが、世間の口は蒼蠅もの、萬一好からぬ噂でも立てられる事があつては、英敏が耻家の瑕、私が喧ましいと言つて、斷れば仔細ない、夫とも話しにくければ、私から直に言向ける』

『だつてお父樣、津吉さんでも、宗光さんでも、眞實な御親切から、時々氣を附てお尋ね下さるんで御座います、夫に此方でそんな事を申上げうもんなら、何といつてお腹立つか知れません、先々は英郎の事も、お願ひ致さにやなりませんのに』

『ナ、左樣いふ親切な人達なら尙の事ぢや、若し惡い噂でも立つて、彼方も不本意此方も心外、お互ひの利益を思うて、私から出入を斷るのに、腹立る理はない、第一此の頃は、婦人會とか、慈善會とか、大分外出が多いやうぢや』

『私も彼いふ會に、好んで出やうとは存じませんが、皆さまからのお勸めで、據なく參ります』

「好んで行かう筈もないが、マア出來るなら斷つて成るたけ行かぬやうにしなさい、夫も戰爭が續いて居て、負傷者の爲め繃帶を拵へるとか、病院の手傳するとか言ふ譯なら仕方もないが、負傷者慰問の演藝會とか、慈善芝居とか言て、名は如何にも立派ぢやが、其の實自分等の慰み半分、思立つ人もあるさうぢや、甚しきに至つては、慈善會の看版で、商賣をする不埒者も、往々あるといふ噂ぢや、そんな處へ立交はると、自然さまぐの批判を受て、徳な事は更にない」

「私の參る會は、皆な立派な夫人さん方で怪しい人は一名でもありア致しません」

「何せ慈善でも思立たうといふ人々、暇もあり金もあり、餘力がなくては出來ん仕事ぢや、然るに今我々の有様は、僅かばかりの貯金の利息と、扶助料を頂いて、何か斯か一家三人、喰つて行かれるといふまでの事、餘力といつては少しもないのに、慈善會ぢや慰問會ぢやと、騒ぎ廻るに及ぶまい、立派な貴婦人に交際すれば、夫だけ無駄な費用も要る、マヽ當分は世の中の交際を殘らず止めて、人に兎や角言はれぬやう、英郎を滿足に育てるやう、心掛てさへ居れば好い」

英敏の戰死が、異常の名譽を博したゞけ、一層跡々にまで、老人の意を用ひるのは、さもあるべき筈のこと、壽子夫人とて獨棲の閨寂しさより、怪し心のときめいて、故意派出な交際を求めたいといふではない、畢竟なまじい當世婦人の虛榮心に驅立られ、折角貢出した實夫人の名に、ますく箔を附けたいといつたやうな、淺海な望と、弘く交際をして置たなら、何かの時には英郎が爲と思ふばかりの事であつた。

言はゞ新舊思想の衝突、壽子が門戸開放を望む程、英高は鎖國攘夷を主張するといつた風、而も兩つながら家の爲、英郎の爲を思ふてのこと、互ひの胸襟を披瀝て見れば、爭ふ處もないのであつたが、壽子の狹い胸、英高の頑心、所詮此を包容する程の積量が無い爲に、漸く相反目する事となつたのである。

嫁舅の間がしつくりと折合はず、空隙が出來る程水をさすものもある、胸の火の燃立つた處に、しゆんと水を浴せるので、忽ち灰神樂も立ち、思掛ない爭ひも出來る。

三

三月の十日——陸軍の紀念日——此日は壽子夫人の身に取り、最も不快極まる日で、生殘つた良人の同僚は、金色燦爛たる大禮服に、諸種の勳章を輝かして、偕行社の宴會に列し、幸多き身を誇るのである。

「夫人さま、此の大雪に、何處かで烟花が上ります」

雪の爲かお腹が痛い、頭痛もするといひ立て、枕を揚げぬ壽子夫人、

「今日は陸軍の紀念日だから、九段で烟花を揚げて居るのさ」

「マア陸軍のお祝日なんで御座いますか、道理で先刻から立派な方が、澤山お通りになりました、此方の旦那樣も……」と言掛けた時、

壽子はくるりと脊向き、かい卷の襟深く、顏を埋めて了つたので、米も其の儘話を中止。

「あのお粥をたいて參りました」

「まだ頂きたくアありません」

「温かいお粥をめしあがると、宜しいかも知れません」

「マア少し打棄といておくれ」

米は一旦引下つたが、間もなく慌蒼と馳て來て、

「夫人さま、お客さまで御座います」

「ヱ、何誰」

「此の方が入らつしやいましたから、御病氣の事を申上げたんで御座います、だけども折角遠方伺つたんだから、お臥床のまゝ鳥渡でも、お目に懸りたいと仰しやいます」

金縁の愛らしい名刺を出せば、

「マア福永さんが、何な衣服をして來て」

福永蝶子は小學時代のお朋達、容色も劣り學問も不得手、剰へ操行に付て好からぬ噂があつたので、此四五年といふもの音信不通、學生に欺かれたの、女工の群で見掛けたのと、とり〴〵の風評、心柄とは言ひながら、可愛さうな身の上と、其處はお朋達の情合、壽子も折々思ひ出した。

左樣の蝶子が不意の音訪、夫と聞いた壽子の心に、あり〳〵と映じた蝶子は、見すぼらしい風をして、身の薄倖を歎いた末が、お定まりの無心と見えたから「何な衣服をして來て」と先づもつて下女に糺した、さりとて金鎖や金剛石を、目障りに思ふ壽子は、立派なお朋達に訪はれるより、少々無心は言はれても、目下の蝶子に對面ことを、寧ろ快く思ふほど、さもしい心になつて居る。

「コートを召して居らつしやいますから、何だか好くは分りませんが立派な方で御座います」

「マア何でも好いから、早くお通し申しておくれ、小兒の時のお朋達です」

米が案内も待ず、さも〳〵懷かしげに驅込で來た福永蝶子は、果して壽子が豫想の通り零落て居たでおらうか、オリーブの絹糸編の手袋を取除ければ、左右の指から何時となく、金剛石ルビーが光り、晴着といふ程でもない、隨分ざらに着くづしても、極性の好いお召の二枚襲に、ごり〳〵する黒縮緬の羽織、壽子は覺えず刎起て。

「マア萬望彼坐へ、何うもこんな汚ない處へ」

『アレ夫人さん、不可、是非何か其の儘で』と寝床の傍に膝摺附けて、
『マア暫くでした事ねへ、而して貴婦何の御病氣、大した事ぢやアないでせう、貴婦ちつともお變りなさらないのねへ、私此の通りお婆さん、何でせう此の髮の薄くなつた事は……もう〳〵疾から伺ひたくて〳〵、夫に當家の事もねえ、知らない譯ぢやアなかつたんですよ、お手紙でも差上げなくちや濟まないと思ひながら、恰ど彼の頃は私もいろ〳〵苦勞をしてね、ほんとうにマア何からお話したら好いでせう』
『全くですよ、餘りお話が溜つたんで、而して貴婦今何方へ』
『永く大阪に行つたり、朝鮮へ渡つたり、隨分方々廻りましたが、漸と



今度は東京に、自分の住居を買入れました、ナニ此處から近のですよ、駿河臺の何とかいふ華族の邸を、そつくり譲受けたんですが、家は廣いばつかりで、住荒してありますから、何せ建直さうといつて居ますの、もう是から始終伺ひます、貴婦も入らつしやつて頂戴な、良人はお世辭もそつけもない代り、何も彼も私まかせで、そりやア全く伸氣です、だから少とも氣は置けません、日外新聞で拜見しましたが、貴婦はお父さまと坊ちやんとお三人きり、此の儘でいつまでも、アラ、マア、左樣ですか、隨分お心細いわねへ』



蝶子の良人は實業界でも、當時賣出しの紳士、日露戰爭の際、海陸軍の受負をして、數十萬圓を儲けた

との事、今は壽子のお朋達を束にして掛つても、蝶子の威勢に敵せぬのである。
蝶子は緩り話して歸つた。
墮落式部と噂を受た蝶子さんですら彼の通り、自分は好く〳〵意氣地がないと、妙な感じを起した壽子、病氣は一層惡くなつた。
折から英郎が手を引て、病を訪ふた舅英高。
「病氣は何かな、早く醫師を賴むが好からう」
「今日だけ用心致して居りましたら、明日あたりは起きられませう」
「惡い癖が附て、去年も陸軍の紀念日には、頭痛して寢なすつた、畢竟詰らん事を考へ出すから起る病氣ぢや」
「だつて考へ出さない譯には參りませんもの」
「いくら今更考へても、死だ者が生返るではなし、世間の笑ひを受けるばかりぢや」
むしやくしや腹の立つた處へ、例の英高が執拗い話、ア、蒼蠅と思ふ餘り、壽子は平生の謹みも忘れ、
「もう好く分りましたから、仰しやらないで頂きませう」と言ひつゝ枕につッ伏した。
「私は惡い事を言ふのぢやアない、畢竟汝にせよ私にせよ、世間の人に笑はれたくない、折角立派な戰死をした、倅の名譽を傷けまいと、思ふ爲に話もするのぢや」
「だから最早分りましたと申上げたら宜しいぢやア御座いませんか」
「ハヽア大分今度の病氣は、立入つて居るやうぢや」
「私のやうな者は、寧そ死だ方が宜しふ御座います」

「詰まらん事を言ては困る、そりやもう二十二や三から老年小兒の世話をして、一生後家を立通すのは、なか〳〵容易な事ぢやアない、其處で伜が戰死の當時、離別の話もして見たのぢや」

淚は枕をつたうて落ちた、併し壽子はぷつとも答へぬ。

兒に角體を惡くしては不可、明日は醫師を呼んで見て貰ふ事にしなさい。坊や、母さまは鹽梅が惡いから、も少し烟花を見て來やう、サア祖父ちやんが負してやる」

英高は孫を促し、再び表の方へ出た。

光輝く珠や絹布に、目の眩んだ壽子は、寧そ賢夫人の美名を棄てゝ此の家を去らうと決心した、英高が諭す辭は、一々無理なやうに聞えて、

此の夜十時過、壽子はそつと起上つて、先づ離亭を窺つた、英高は高鼾、恰ど眠の熟した處、英郞は米に抱かれて、是も熟睡して居る樣子。

手早く支度整へた壽子は「一病氣養生の爲二三日實家へ參り申候」と一書を殘して窃かに立出た。

雪解の泥濘を彼方に避け此方に廻つて、牛込北町の邸から、毘沙門の前に出た時、一人の車夫が俥を勸めた、小石川久堅町まで、意外に安い賃を極て、忙はしく俥に乘れば、エイヤッと力を入れて、梶棒を上げた車夫、手拭で破れを蔽ふた提灯の光に見れば、六十餘りの白髮爺、海老のやうに腰を曲て、今にも僵反さうな危い足取、切ない呼吸をかはしながら、

「何もひどい途で御座います、折角陸軍のお祝日に、惡いものが降りまして」と進まぬ足を口で補ひ、退屈させまいの慣手段。

「嘸挽にくいでせうねへ、汝さん何歲」

「ヘエもう年を老て、から愈氣地が御座いません」

「今壯健にして居りますと、恰ど三十になる一人の伜を、四年前になくしまして、目下では嫁と孫と三人、何うやら斯やう暮して居ります、ナニ貴姐、此の年をして、俥なんか挽ばらんでも、嫁が內職の賃錢で、結構三人口は喰べられますが、責て孫がお小使の足にでもと思ひまして、留めるのを脫けつ潛つ、毎晚そつと出掛けます、お蔭さまで二十錢も頂きますと、歸りに安いお酒を五勺、夫から嫁と孫への土產、燒芋の三錢も買つて歸つて飮だり食つたり、嬉しい顏を見ますのが、何より樂しみで御座います」

「孫さんは何歲です」

「孫は四歲、嫁は二十五、私は六十から三つ程出て居ります」

「マアお嫁さんは尙二十五」

「自分の嫁の事を斯う申しちやア可笑しう御座いますが夫は〳〵感心なこゝろ掛、嫁に參つたのは十九の暮、半年も經ませぬ中、伜は豫備の上等兵で。召集になりまして、直ぐと戰地へ參りましたが、旅順角面堡の攻擊、それ貴姐がたも御存じでございませう、軍神さまとあがめられた勝山大隊長、恰ど彼の方と同じ時戰死を致しましたよ」

「マア左樣ですか、お氣の毒な」

「ナーニ貴姐、皇國のお爲に戰をして、死で了へば實に本望、病氣で死だり怪我をして、死ぬ事を思つた日にやア、此の上もない幸福、いくら澤山お金を掛けて、大きな石碑を立てゝ置いても、何百年か經つ中には、影も形もなくなりますが、皇國の爲に死だお蔭、招魂社に祭られて、何千年何萬年でも恩田伍長の名は殘ります、夫を思ふと有難いやら勿體ないやら、嘘にも惜しいの可愛いのと申しちや罰かぶります、

唯氣の毒なのは嫁のお松、二十歳や二十一の若盛りから、後家立させるのが可愛さう、暇を取つて好い處へお嫁に行けと申しても、私も恩田伍長の家內、一旦お嫁に來た上は、死ぬまで此の家から出ない、私は何な苦勞をしても、お父さんと坊やとを、其人に代つて養ふ、若し夫が出來なかつたら、いつでも暇を貰ひませう、全體お父さんは私を嫁と思つて居なさるから困ります、何故御自分の產ました子だと思つては下さらない、私はほんとうなお父さんと思つて居るから遠慮もなければ氣兼もしません、私は神さまのお紹介で、此處の嫁に來たんですから、後家になるのも貧乏するのも、皆な定まる約束ごとです、私は親子睦じく、樂しう暮して行きさへすると、此の上もない幸福、餘計なお金や奇麗な衣服は、持たいとも思はなければ、着たいとも思ひません、私が寶は坊やです、此寶を大事に掛て、失はないやうにして置けば、行末どんな旨い物でも、何な美しい衣服でも、喰べられもすれば着られもします、お父さんも此の寶を、私が磨きあげるまで、長命して下さいと言て、夫は／＼心持好う、朝から晚まで働きます、其心掛に惚込で、地主の旦那が伜の嫁に、お松さんを貰ひたい、改めて汝の子にして、輿入をさせてくれろと、くれ／＼のお賴み、何十萬圓といふ財產家の嫁公になれば實に幸福、何か行て貰ひたいといろ／＼賴んで見ましたが、何うしても聞入れません、お金は稼げば溜るものです、一度操を失つては生涯取かへしが付きません、お父さんお金が要るなら此の上何なにでも働きますから、萬望此に置て下さい、もう／＼再緣は御免ですと、餘所へ行く事を嫌ひます、ナーニ別段深い學問致さう筈も御座いませんが、全く持つて生れた精神、町內でも譽られもの、私は好い嫁を貰ひあてまして、こんな幸福な事は御座いません、モシ夫人さま、久堅町は何の邊で御座います」

「アヽもう此處で澤山、ですがね、私今夜は遲いから、入らずに歸りませう、御苦勞でも北町まで、も一度廷つて頂戴な」

（をはり）

花のかをり

中山幸子

野も山もかすみこめたる春の日に
花のかをりの高くもあるかな

朝日さすさくらが岡に來て見れば
匂はぬかたもあらしとぞ思ふ

春さめのふるやの軒の山さくら
塵をはらひて咲そめにけり

春さめのふるたび毎に色にいでゝ
さくらの花のうるはしきかな

一とせの春のさかりを人みなの
こゝろして見よ山ざくら花

ものゝふの露と消えにし仇し野に
時めきさきぬ山ざくらばな

老の身もいとはづかしく詠みにけり
さくらが枝にむすぶことの葉

山里はたゞしら雲のしづけさに
こゝろもちらぬ花は咲きけり

あすか山あすとも云はず花を見む
けふをさかりの時と思へば

みよし野の千本のさくら來て見れば
むかしながらの花は咲きけり

みよし野の花にむかしのしのばれて
かはらぬものはさくらなりけり

みよし野の花のこずゑを見渡せば
月もかすみておぼろなりけり

あらし山松のはやしのさくら花
ひかりを添えし春の夜の月

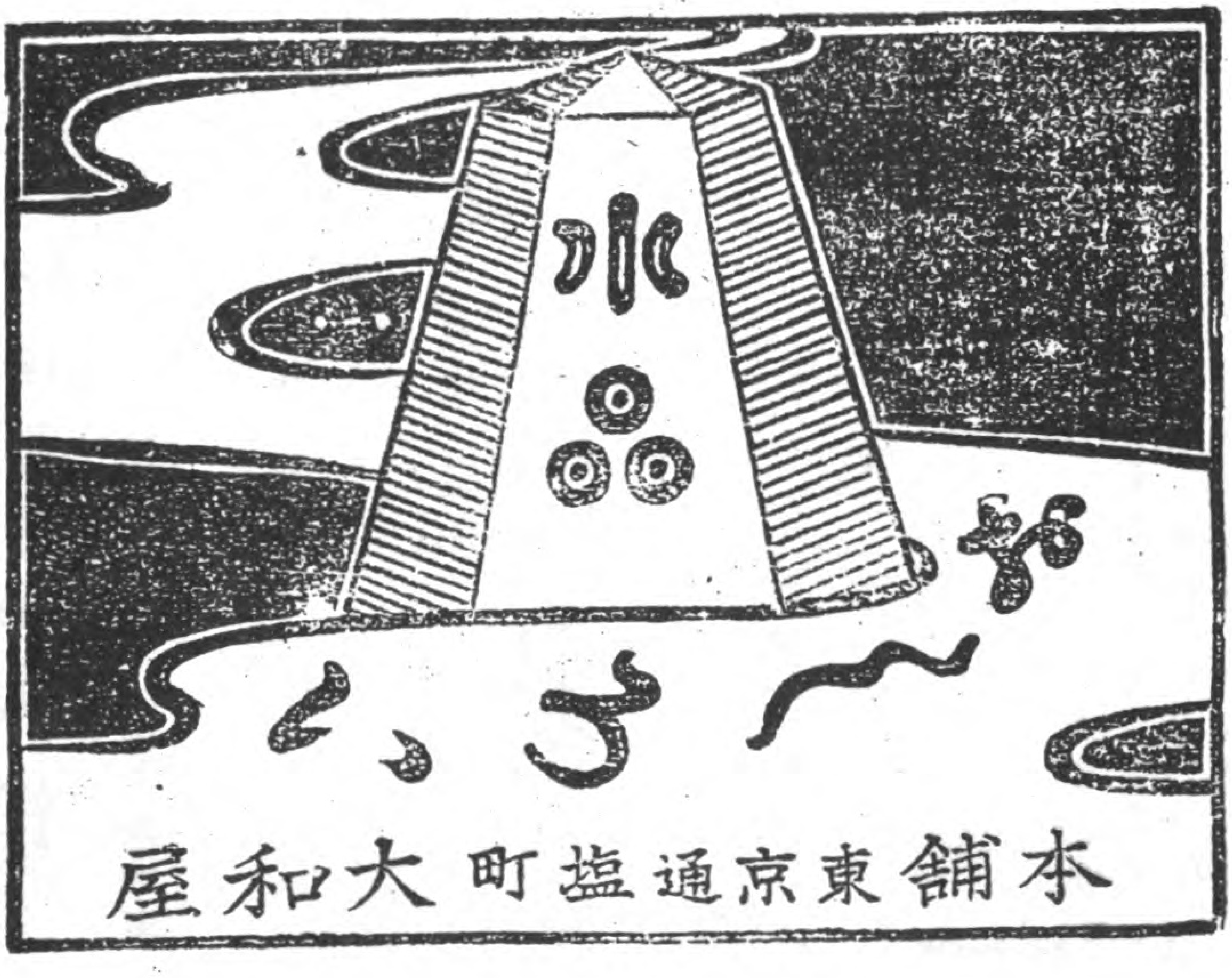
すみ田川つゝみのさくら咲そろひ
水の底まで花ぞ見えつる

見るうちにかすみこめたり山ざくら
花のこずゑに月はのぼりて

山のはに匂ひいでたり山ざくら
ひかりあらそふ春の夜の月

妾事小供の時より薄毛にて種々の薬を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇薬を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵券を添へ御照會あれ
東京市京橋區越前堀　河村愛子





主婦の注意すべき二要點

角田眞平

裁縫と申すことは、平生私が研究いたしませぬ事でありますから、迚も諸嬢のお耳に、イヤ、お目に留るやうなお咄は出來ないのでありますが、たゞ平生何與となく物の本などを漁る序に見當りました事の浮ぶまゝに申し述て見やうと思のであります。

近頃は各學校に於きまして、種々の學問は申すに及ばず、その他各種の技藝までも授けらるゝ、その中に斯裁縫のこともありますけれども、何うもまだ舊習を脫しないやうに思はれます、それにも拘らず、彼の西洋の音樂とか、または各外國の語などゝいふものは、孰れも達者に而して上手に操つらるゝ婦人は澤山に見受けることでありますが、サテ裁縫の一段になりますと、布帛の一反といふことは、二丈八尺の事で御座いますかなどゝいふやうに、衆人稠坐の中では、殆んど其樣な事は存知ませんといふのが、却つて中流以上の妻君である、といふやうに外見を繕つて奥様の態度を爲る弊がある、果して其が實際かといふに、實は內心反物を買ふ時、どうか二丈九尺あつて呉れゝば宜い、さうすれば前掛の一つ位取る事が出來るが、と斯ういふ風に胸算用をして居りながら、表面は何處までも知らない顔貌をして居る者が尠なくないのであります、斯樣な弊風が漸々に蔓延て來るといふ事は、誠に國に取つて捨置かれぬ事と思ひます。

元來我國は、風俗の上から云ひましても外國とは異つて居るのでありまして、隨分古くから致して、衣服や料理等の事に附ては研究を盡した國であります、古事記を見ましても、男は袖の窄いのを着て居たやうでありますが、既に此時代でさへも女子は長

い袖の衣服を着て居たやうに思はれます、これは私の臆說や推斷ではありません、彼の鈿女命が襷を掛けて舞を舞つたといふ事が載せてあるのを見ましても判る事と思はれます、單に是ばかりではありません、古い風俗畫などを見ましても、男女の區別は判然と分つて居りますので、女子は長い衣服を着るとか、或は下へ一重を着て其上に五衣を着るといふ風になつて居ります、然るにそれが進んで

十二一重を着るといふ

如くなつたのみならず、尙ほ更に面倒な衣服を着けたといふこと、また色の配合の點などに於ても、或は白く或は靑く、若くは紫、赤といふ風に配合するもの丶、その配合の仕方の巧妙なる事は、却々素人の目にチヨツト見分けの附かない位に種々の色を上手に配合いたしてあります、その一例を申しますれば、枕草紙にも、靑朽葉色、二藍色の取合せの批評なども見えて居ります、また葵に菖蒲等の模樣の事も見えて居りますが、それらを讀んで見ますと、誠に間髮を容る丶をも許さないといふ風に、配色配合の事に苦心もし、また研究した跡が歷々と見えるが、是に由つても、當時既に業に

非常なる美術上の進步

を意味した所以と思ふのである、

元來野蠻なる時代は、或は野蠻なる事を爲るに都合の宜いやうにしなければならないのであるから、之に就ては、短かき筒袖のやうなものに限るのであります、今日手近な例が、我國の大工、左官、または小役人等が、それらの仕事を爲るには、孰れも皆筒袖の衣服に限るやうなものであります、彼の歐羅巴では、この野蠻風を一足飛に飛越えやうといふので、即ち何か儀式とか、又は宴會の席などへ出るのには、燕尾服を着けるとか、或は諸所へ金銀のモールを施すとかいふ樣に工夫したのであります、それにして見ても、その變化の範圍は極り限つて居ります、

言換ふれば

變化の範圍が狹小

でありますゝ之は衣服の上の事でありますが、更に方面を替へて、食物即ち料理の上に就て見ましても、先づ歐羅巴流で行きますと、皿の中へ品物を盛つて出す、さうして一方には金の熊手のやうなものを持ち、他の一方には刀の少さいやうなものを持ち、そして片手の方で押へて切つて喰ふといふ事は、是は勝手元でする調理の幾分といふものを、客人が座敷で取扱ふのでありますゝ之に反して支那や日本では、僅か二本の箸さへあれば之で何なりと自由に料理が食べられると云ふやうに致してあります、此く致したのを見ますれば、是は慥かに種々進歩の結果であると思ひます。



また膳部のことにしましても、彼方の風では大きいテーブルを眞中へ出して、その上に白い布帛を掛け、左様して何十人何百人といふ人々が、その周圍に並んで食事をするのでありまして、酒は却々高價な種類が澤山あります、けれども食事は差して驚く程の事は無い、宴會などに行けば、時としては極めて珍な

る物の出る事もありますが、普通の洋食では、別に驚くことは無いのであります、之に反して我日本の料理になりますと、まづ本膳は申すに及ばず、外に二の膳乃至三の膳などいふものまで出るのみならずその諸道具の價格から器物の好みに至るまで、却々容易のものでは無い、且つ料理法も古式に依ると却々廉價つかない、まづ一人前百圓位は掛るので、それも酒を除いて、單に料理のみの事であります、是に由つて見ましても、我國の調理法は大層に趣味のある事に思はれます、斯ういふ風でありますからして、是までに我日本は、餘程歐羅巴に比べまして調理の研究の上に於ては優つた所があるのであります。

　开は兎も角と致しましても、一體この調理といふ事は、多く婦人の平素心掛けねばならぬ肝要の事柄であると共に、チヨツト手輕の事にも心を運ばせるといふ事は、一家を整理して行く上に於て、決して等閑にしてはならぬ事と思ひます、一體當時の婦人

は如何も常識を缺いて居りますが、是は個人としても非常の缺點であると同時に、國家の上から見ましても頗る嘆息すべき事でありますから、何うか之を養ふといふ事を心掛けて貰はねばならぬ事と思はれます、尤も我國に於きましては、外交の變がありましてより以來、社會の事物が種々に遷り變りもし、又は弛んだ事等もありますが、兎に角古い時代には衣服令と申して、その身分〳〵に依つて、之は着て宜い、それは爲らぬといふ風に衣服の制度といふものを出されたのでありますが、維新後になりましては、最早昔のやうでは無い餘程弛んで居ります、併し一向に無いではない、明治になりましてからも、或場合に於ける衣服令といふものは發布せられてあつて、その時の衣服といふものは制定せられてありまして、それは尤も簡便なるものではありますが、併し窮屈な筒ッポウ袖を着なければならぬと規定せられてありまするど同時に、料理もまたその調理の仕方が一般に以前とは變つて來て居ますから、今茲

に一概には論じられませんけれども、之に對する注意は必要であらうと思ふのであります、

古へ紙衣の種類は澤山ありまして、寢衣その他のやうな儉約の紙衣もあれば、また風流韻士などの着けるやうな雅致なのもあつたけれども、中には贅澤なる高尚優美な物もあつて、チヨツトした風でも、彼の元和寛永の頃までは、幅が僅か鯨尺で二寸ばかりしか無い女帶を後帶に締めたものであるが、それが明暦の頃には前帶に締め、降つて貞享から享保になると、之を抱へ帶として胸高に締め、またその後に一變して後帶になつたが、之はまたその後の事であるが、遂には幅廣の物と變ずるに至つたのであります、尤もその間にも武家の婦人は、必ず後帶に締めなければならぬ時代もあつたのであります、兎に角今の幅廣のものまでには幾多の研究を重ね且つ變遷を經たものであります、

芭蕉の句に、返ればか手に笠さげて夏羽織といふのがありますが、この句を見れば、その頃夏羽織を着て流行したものと思はれるが、實は萬治の末から寛文の頃へかけては、塗笠、網笠などゝいふものが非常に流行つたものであります、それから延寳の頃よりは葛籠笠といふものが流行したのでありますが、降つて天和貞享の頃に至つて菅笠が流行つて來たのであるから、そこで此句を詠んだものである、全體その時分には方今の帽子と同じやうに、當時流行の笠を冠つて歩かなければ、當世男と云はれないといふ風であるから、從つて誰も彼も、競爭で冠るといふ鹽梅で、笠の直段も却々高いのであるが、生粹がる者は一般に用ゐたのであります、この事を知れば直ぐに此句の眞意は了解が出來るのであります、此くの如く頭へ冠るものも進化して來たのであるが、尚ほ此外にも世の中に、早く文明に進んだものもある、即ち被衣を被つて顏を隱した事であります、この被衣より變遷して、男女共に笠を以て顏を隱すのみならず、頭までも被ふやうに爲つたのであります、まだそればかりでは無い、夏冬ともに足袋

といふものを穿いて足まで隠す所を見ると、歐羅巴以上に早く夫等の事を研究したといふ事は爭ふべからざる事實で克く判るのであります、然るに却つて後年になつてから怠つた事と思はれます。

それらの詮議は措置き、兎に角男女殊に女子に於ては常識といふものを養つて貰ひませぬと、社會も國家も共に損をするのです、世には往々誤解して、迚も世間普通の者は、彼の英雄とか又は豪傑とか云ふ人々のやうに、却々常識といふものは養なはれるものでは無いかのやうに考へて居る人もあるが、それは心得違ひといふもの、また時としては自身に之を養成する能力が缺げて居るかのやうにも想つて居る者があるけれども、それは孰れも間違ひである、了見違ひであると云はねばなりません。

彼の偉人と稱し傑士と呼ばるゝやうな人でも、時としては常識の缺げて居る人もあるが、それは先づ例外で、大抵は常識の能く發達したものである、名高い水戸の光圀卿は、嘗て其相續して居らるゝ綱條公を誡めて仰せらるゝやう、凡そ劍術を上手に使ふとか、狹い風呂の中で長い刀を拔くとか、又は容易六尺の屏風を飛越えながら刀を拔くとかいふやうな事は、覺えて居る程結構な事は無いが、敢て覺えて居無いでも耻にはならぬ、併し臣下を統御するに就ては

是非とも知らねばならぬ事

がある、まづ御身の一通り覺えて置かねばならぬ事は、擊劍、槍術、砲術、弓術、曰く何、曰く何と列擧せられた其最後に、十露盤だけは是非とも知つて居らねばならぬ事である、兎に角副將軍の家を治むるものであつて見れば、擊劍槍術等も一通りは知つて居らなければ、臣下を馭する事も出來なからうが、假りに其は心得ないにしても、十露盤だけは何を措いても是非〳〵心得て居らねばならぬ、といふものは、元來十露盤は、上の事にも下の事にも通じて入用なるものである、例へば、陣地を布くにしても、この地面の廣さでは若干の兵士を容るゝ事が出來る

であらうか、騎兵なれば若干員、歩兵なれば若干員を動かすことが出來るかと云ふ事を計り定むるのは十露盤、また敵の人數の多少を數ふるのも、進むも退くも、その掛引一切この十露盤に依らなければ出來ないのである、それ故に、如何なる劍術槍術の名人でも、之を知らなければ必ず失敗を招くのである、是を以て十露盤は是非共知らなければならぬ事であると有仰つたといふ事であるが、之が即ち常識の養成といふものである、今時の人には、簿記の見やうも知らないで、會社の重役だなど、名を負つて居る人もある、婦人の方でも一家を取締る事さへも知らないで、横柄にも奥樣らしい顏をして居る者もある、況して裁縫のことなどは、毫も御存知ない方がある、縱んば人に言ひ附けて自分では手を下さないまでも、是非一通りは心得て居て貰ひたい、是を心得て居るのと、左樣でないとは、家庭經濟の上に大影響を及ぼすのでありますから、既に家庭の女王たる者は勿論の事、將來一家の主婦となるべき諸孃は、必ず〳〵是だけは心得て居らねばならぬのであります。

貴賤を通じて必要なるもの

増田鏡子

貴賤を通じて必要なるものと申しますれば、それは云ふまでも無く衣食住の三つであると仰有るでありませうが、それは固よりの事で御座いますが、當節のやうに上下を通じて生活の程度が高くなりつゝある時代には、一方に物價騰貴といふ事が附添うて來るので御座いますから、一家の主婦たるものは餘程家庭の經濟を上手に遣りませんと、人並の衣裳どころか、小ざつぱりとした洗濯着物も着被つては行かれませず從つて人並の家にも住ふことは難いので

御座います、ソコデその家庭の經濟を上手に遣り繰るといふに就ては、成るべく餘計の出費の掛らぬやう、物の費を省くやうにしなければならぬので、約めて申せば勤儉貯蓄を心掛けなければならぬといふ事になるので御座いますが、それに就ては第一に如何なる點に於て節約を行はなければならぬかと云ふに食事の點でありますが、衣服や住居の點に於ても、固より出來得るだけ儉約をしなければならないので御座いますが、併し食事のやうに三度が三度といふやうに激しいものでは御座いませぬ、と申しましたからとて、三杯のものは二杯としなさい、副菜物は何も拵へないで鹽や味噌を嘗めて、

　爪で燈をともす

といふ風になさいといふのでは御座いませぬ、昔から身體あつての物種と申す諺も御座います如く、況して今日のやうに世智辛い社會に處して行きますには、最も身體を丈夫にしておかなければならぬので御座いますから、出來得る限りは滋養分を取らなけ

ればならぬので御座います、斯く申しますれば、如何にも私の申す所は矛盾して居るやうに御考へなさるか知れませぬが、決して私は矛盾した事を申し上げるのでは御座いませぬ、是は多年私が實踐して來た事、それに就て聊か當時に鑑みる所が御座いますので、それこれを取り合せて申し上げて見やうと思ふので御座います、それは外の事でも御座いませぬ、即ち御料理のことで、その御料理と申しても大した御客用の物を申すのでは無くて、

　一口に申す日々の御總菜

のことで御座います、近頃は大部其所此所で料理指南の看板が見えるのみでは無く、女子の參る學校では必ずこの科目を置いて授けらるゝやうで御座いますが、私共の育ちます頃は、御大名か何かの御臺所で無ければ御料理人といふ者は無いので御座いますから、却々お稽古をする抔といふ事は出來ないので御座います、さうかと申して料理屋の料理番に就て學ぶ抔とゝいふ事は賤しむべき事として居つたので御

座いますから、ツマリ料理のお稽古といふ事は望まれなかつたので御座います、それ故に母親とか、或は嫁にまゐりました先の姑御様に御聞き申して覺えるといふの外は無いので御座います、それでも何か斯うか今日まで斯う遣つて參りましたが、それに比べますれば當今の女子方は御仕合せで御座います、

その御仕合せは宜しう御座いますが、大抵今日料理の御稽古と申せば、何か手の込んだ物でも拵へませんければ御料理で無いやうに考へて居らるゝ傾きが有りはせまいかと存じます、尤も手の込んだ御客用の御料理を覺えて置くことも必要には相違御座いませんけれども、どんな貧しい暮しを致して居りましても、三度の御飯には、必ず一度たりとも副菜の附かない事は先づ御座いますまい、して見ますれば、如何に無造作な副菜拵へでも、まさか大根や芋のやうなものでも、生煮では食べる譯には參らず、又目ざしや鮭のやうなものにしまし



ても、生焼では付けることも出來ませぬ、矢張口へ入れられるだけに、手を掛けなければならぬので御座います、同じ原料や時間を費して不美物を食べます所も、聊か心得があれば、その手加減が大層違ふもので御座います、左すれば無益の費を省き、一家相喜ぶ食品を膳に上せる事を實習するのは、貴賤貧富の別なく、必ず研究しなければならぬ事で御座いますが、どうも當時のお稽古は所謂殿樣藝とか申すことが御座いますが、丁度さういふ傾きが有りはすまいかと申すのは、間々私が學校出の奥樣抔の所で出會すことで、却つてお稽古を爲さらないで、ホンの母親などに敎へられた方の妻君の御手際に驚くことがあるので御座います、そして斯の方が品物も生じ遣はるゝので、實に感心の外は御座いませぬ。

　一時當節は料理案内の書物が大層流行いたしますが、元來料理と申しますものは、迚も書物を見た許りでは美く出來るものでは御座いません、例へば、煮汁を作りますにも、一人前凡そ鰹節一匁と申しましても、その鰹節には土佐節もあれば薩摩節もあり、また伊豆節もあるといふ工合で、醬油もまたその種類が澤山でありますから、同じ匙に一杯と申しても加減のわかるものでは御座いませぬ、種類の異ふものは固よりで御座いますが、同じ土佐節でも又は銚子の龜甲萬でも、時としては一樣には參らぬので御座います、然るに何も經驗の無い方が、書物通りに遣りましたからとて、何うして美く行きやうは無い筈で御座います、それでありますから、料理書は旣に實習の功を積んだ方の參考位になるので御座いますが、赤の素人の方には左程賴りには爲らないもので御座います、しかも無暗に之に依つて爲さるから、無駄の原料や道具を使つて、人の物笑ひとなるやうな物を拵へるので御座います、それ故に斷じて殿樣藝の御料理は止めるが宜しう御座います

　よく世間には多くの召使を置かるゝお家の奥樣は決して勝手覗きなどをする者では無いと申されま

すが、成程餘り度々さういふお家の奥様は臺所へお出にならぬ方が宜しう御座いますが、併し全で一月に一度もかけのぞきも仕ないといふのは宜しく御座いません、少くとも一週間に一度位は見廻はらないと、自分の内の臺所が何うなつて居るのか薩張り分らない、それが判つて居りませんと、幾ら目の前にばかり立派な御料理が据えられましても、それの拵へ場處が穢いとすれば、如何なる機會に其食物に黴菌などが浸入いたさないとも限らないので御座います、それ故に如何なる御身分の高いお家の奥様でも、必ず一週間に一度位つゝは御檢分なさるが宜しう御座います、さうすれば自然召使の者も氣を附けるやうになるので御座います、それより下つた所の奥様は、却々其樣な事ではなりませぬ、朝夕臺所へ出て注意を致すやうになさらないと、下婢が如何なる不精を致すか知れませんから、之が監督を怠つてはなりません、併し餘り口喧しく小言などを申されぬやうになさいませんと、却つて御自分に損を招くもので御座いますから、是は呉々も御注意を申しておきます、何故かと申すに、衣服の出來損ひは縫ひ直すといふ事も出來ますけれども、一旦咽喉を通じた食物は、最早再び之を拵へ直すといふ事は出來ませぬ、その拵へ直す事の出來ないやうなものを、下女任せにのみ致して置きますと、兎もすれば腐らしむる事が生じて來るので御座います、下婢を使はれない方は固より御自身で爲さるので、別に云ふべき事も御座いませんが、下女の一人もお使ひなさる所の奥様になると、成るべく仕事をしないで、日々悠々と遊んで暮すのを外見として居らるゝ傾きが御座いますが、惣じ生中一人位の下婢を使ふ御身代のお家が最も大切なので御座います、その位の身代の時に、家庭の主婦たる者の氣の配り方一つで、向上もすれば向下もするので御座います、

大抵人と申しますものは極明らさまに云へば食慾の無い者は無いので御座います、尚ほ一層平たく申せば意地の汚いものですから、年老いた舅姑などに

は軟らかな物を上げるやうにすれば喜ぶもので、自然に仲の惡いといふ嫁との間でも折合が善くなるもので、又若しも親類や知己などの來客のあつた時にも、鹽梅の佳い料理を出しますれば交情の温まる基ともなるので御座います、それは心を惱ましながら高價な店屋物を客の前に並べますよりは、いつそおろし大根なり或は浸し物なり、有合せの材料で加減と體裁とを佳く料理いたし、眞心を籠めて待遇す方が如何程客が喜ぶか知れませぬ、又一家の御主人が終日勤勞して皈りましても、口に適つた副菜一つ出來て居なかつたり、主人の顏を見てから、今日は何に致しませう抔といふ工合ですと、御主人は家へ皈つても食べるものは無し、また皈つてから相談かと思ひますと、自然三度に一度は外で喫つて來るといふ風になりまして、一家の不經濟は此上ないので御座います、さうなると言ふも忌はしき事ながら、それが爲に一家の和合が破れぬとも限りませぬ、御主人の好き嫌ひは、誰よりも奥樣が一番好く御存じの

筈ですから、十分口に合ふものを拵へて上げなければならぬので御座います、併し原料や時間を費して美く拵へるのは誰でも出來るので御座いますが、朝夕の事に左樣時間や原料を費しては爲りませぬ、成るべく儉約して風味佳く料理しなければならないので御座いますが、それは如何しても幾度か自分に手を掛けて熟練を積まなければ不可ませぬ、して見ますれば、副菜の鹽梅の好惡は

一家和合の基

に大關係があると云はねばなりませぬ、

前にも述べましたやうに、御總菜といふものは日日の事で、しかも一日の中に三度も交へなければならぬので御座いますから、主婦たる者の苦心も却々容易なものでは御座いませんが、其所は主婦たる者の直打のある所なので御座います、男子方は始終外へ出て活動して居らるゝので、家の内の事などに拘つては居られないので御座いますから、主婦たる者は一切家の中の事を取締つて行かなければならぬ役

目の者で御座いますが、その中でも前から申し述べてまゐりました事は、最も注意しなければならぬので御座います、古へより十里の長い堤も、僅か蟻一疋が通ふ穴から崩るゝといふ事も申し傳へられてありますから、その日々僅かな副菜に要する事でも、之は一錢だから之は二錢だからと云つて、無暗に財布の口を開ないやうにするのが必要で御座います、

家庭内の獨立國

文學士　齋藤長樹

總じて我國の家庭には獨立國が多い、即ち祖父は祖父、祖母は祖母、良人は良人、妻は妻、子供は子供、婢僕は婢僕といふやうに各々個々に獨立國を成して居つて、どうも共同が無いやうに思はれる、これは日本人の生活の仕方が左樣である、どうも個々獨立したのでは、互ひに相倚り相助くるといふ利益は得られないのである、のみならず、彼も此も大いなるものに成らずに了る事となる、試みに東京の市街を見れば、小さな家が澤山あつて、それが皆個々獨立の生活をして居る、世界中で小さな家の多いことは實に天下無類で、是では決して文明の狀態といふ事は出來ない、一體日本人は昔から小さくとも一城の主といふ思想を懷いて居る、從つて獨立の生活さへすれば、それが最も結構な事と思ふやうな傾きがある、尤も人の厄介に爲るよりは、縱ひ小さくとも一城の主となつて獨立するのが或意味に於ては幸福であるに相違ない、けれども家庭内に於ける一族の者を初めとして婢僕の末に至るまで、各個に城壁を築いて居るといふ事は、決して賞すべき事では無からうと考へる、家庭一族の者は、恰も自己の身體に於ける手足等の如く共同して、

必ず相倚り相助け

て行かねばならぬのであるにも關はらず、どうも左樣行かないのは不思議である、之に比ぶれば歐米などでは、何につけても克く此の共同といふ事が盛ん

に行はれて居る、例へば、商賣にしても互ひに共同するから、從つて大きな事業が出來る勘定である、彼方の實業家は、重に住宅を山の手若くは市外に置いて、日々汽車などの便利を假りて市内の店に通勤するのを例として居るが、我國の實業家のやうに、小さな商店の主人を以て甘んじて居る者には、迚もその眞似は出來るものでは無い、

蓋し日本人は概して他と共同する事を好まないで、多くは個々獨立して小さな仕事をして居るから、一家が專つて其業に從事せねばならぬ必要が生じて來てそれが爲に住宅を別に爲るといふ事が出來ず、主人も妻子も番頭も丁稚も、共に市街に同棲する事になる、我國の商人は大抵是である、その結果東京市街には、多くの兒童が往來に出て遊んで居るといふ現象を見るのである、それ故に歐米人が我國へ來て、第一に驚くのは小さな家の澤山なる事と、兒童が往來で澤山遊んで居る事とであるさうな、彼方では兒童が往來へ出て遊といふ事は滅太に無い事で、

殆んど罕である、故に歐米人の初めて我國に到るものは、是がどうして世界の一等國の班に列したのであらうかと不審に思ふとの事であるが、實際瞥見した丈では左樣考へるのも無理ならぬのである、

一體我國の家屋は、家屋その物からして個々獨立の生活に適するやうに出來て居る、尤も彼の長屋の如きは、幾分か共同的の生活を爲るに適したものゝやうであるが、これとても彼方の長屋に比ぶれば、矢張り個々獨立的たるを免れないのである、歐米の長屋は御承知の通り、一個が數階の家になつて居て、食事を初め凡ての事に至るまで交際の途が開けて居るから、諸事共同が仕易いのである、故に我國なれば穢ない長屋に入るか、又は小さな一軒の家に入るやうな者は、孰れも皆右の長屋に入つて共同生活をして居るので、隨つて市街の美觀も保たれるのである、而して彼方では土曜とか日曜とかには、上下擧つて公園に出て遊ぶからして、之が第一共同的であるから、是に由つて交際の途は

一室開けて行くといふ譯である、けれども我國には
まだ斯んな習慣は無いので、長屋の交際連は井戸端
に會する妻君連位のものである。

毎に我々が內地を旅行すると左樣思ふが、我國程旅宿の不完全な不愉快な國は無い、彼方では實に設備が完全して居て食事も共に爲る事が出來れば、遊戯も一緒に集つて爲る事が出來るやうになつて居るので、ソコデ談話を交へ互に羈旅の憂を慰むる事も出來るのであるが、我國では或二三を除くの外、他は總て左樣いふ設備が無いから、少しも此の快樂を取る事は出來ない、食事は一々室へ運んで來る、その癖部屋々々の境界は何であるかといふに、尋常の襖か、左なくば薄い壁で隣室の話が手に取るやうに、聞こえるといふ始末、かく凡てが共同的の生活を障害するやうに出來て居るから、况して普通の家屋に至つては、家屋は矮小なる上に、戸障子の開け閉ての多い事は非常である、從つて人手を澤山に要する事となる、



例へば、來訪の客があつても、その案内やら何や彼が甚だ面倒で、それにチョット腰を掛けて話をするといふ事が出來ないので、訪問する方も應接する方も何方も臆却になるから、自然往來も妨げらるゝので、交際も輕便に行かぬ事になる。

私は一から十まで歐米の風を崇拜するのでも無く、また彼に心醉したものでは無いが、室内に座つて、話をしたり、又は食事をしたりする事は甚だ面白くないと思はれる、之は何うしても腰を掛けるに限る、今日の女子は學校に通つて居るから、追々に腰を掛ける習慣になつて來るであらうが、この習慣が家庭に及ぼす事となれば、

我國人の生活は一段の進歩を來たすであらう、その上今日の女子は、昔の女子のやうに室内にのみ蟄居しては居ない、即ち學校には友達が出來、從つて交際も廣く、往來をする間には自然學校外の交際も盛んに行はるゝから、その中に會食をするといふやうな風になつて、自から共同的の精神に富むやうになる事と考へる、單に女子同士の交際ばかりでは無い、

家庭の間の交際も今から一層發達せしめなければならぬ、家庭間の交際に就て目下の弊害ともいふべきは、

所謂虚禮の流行である、是は矢張り家屋の構造が然らしめて居る場合が少なくないと考へる、即ち人手が多く掛るといふ事は、婢僕を多く雇はねばならぬ事となる、人を訪ねるにも下女を連れるとか、又は車夫を要するとかいふ事になる、それ以外の虚禮は習慣に基づく事が多いので、迚も一朝一夕に改廢する事は不可能事であらうが、どうか斯ういふ事は一日も早く改善したいものである。

是まで男尊女卑とか又は女尊男卑とかいふ事は、餘り多く耳を假さなかつたのであるが、近年は何うやら女尊男卑の風が段々に輸入されるやうであるが、歐米だからとて、必ずしも女尊男卑の風が行は

る丶ものとのみ思ふのは間違ひです、彼方で女子を尊敬するといふのは、畢竟弱きを扶けるといふ觀念に胚胎したもので、何も女の方が實際に尊く、男の方は實際に卑しいといふ譯では無い、權利の點から云へば、女子は矢張り男子の下に立たねばならぬのである、何も私は女子方を卑しめるのでは無い、即ち

女子には女子の本分

といふものがある、内に在つて家政を處理し、子女の教養を司どる、男子は外に出て働らく、その外に出て働くのが尊くて、家内に在つて働くのが卑しいといふ道理は發見せられないのである、極端に云へば、其人が外出するに方りては、妻は其靴を磨く、か丶る場合だからとて、必ずしも彼が尊くして此が卑しいとは言はれまいと思ふ、或はそれが麗はしき婦德であらうと考へる、畢竟男女ともに各々其天分さへ盡せば、その間に尊卑などいふ事を挿む餘地は無いのである、

それより玆に不可思議なる現象は、是も數世以前よりの習慣であるから、今更致し方が無いと云へば云ふもの丶

親尊子卑といふ風

である、親は何處までも尊く、子は何處までも卑しいとせられて居るのが我國の習慣で、縱ひ親が親たるの義務を盡さないでも、左程世間から口矢釜しくは言はれないが、若しも子たる者が其義務を怠るやうな事がある時は、口を揃へて恐ろしく世間から攻撃をされるのである、幼少なる兒女を工塲等へ通はせて稼ぎを爲せ、それで親が生活をして居れば、此上もない孝行者として世の賞讃を享けるが、之に反して、子に其樣な事を爲せる親の方は何等の非難をも蒙らないのである、斯かる風習は彼方には無いのである、若しも幼少なる子供に働かせて、それを親が見て居るやうな事があれば、與に齒すべからざる者として排斥さる丶、元來親には其子を一人前に育て上ぐべき義務があるので、初めから其義務を果す見込の附かない者は、決して妻を娶らないのである

それ故に彼方では早婚といふ事が少ない、親の責任は餘程重大なものとせられてあるから、迂濶に妻を迎へるといふ事は出來ない、又迎へもしない、我國のやうに親の責任を重大視しない國はない、それと同時に早婚の弊もまた甚しいのである、近來離婚といふ事が統計上では減つたとの事であるが、それは事實では無い、婚姻の手續が面倒になつたので、その手續をしない者が多いので、實際は却々殖えて居るといふものは、他の半面に私生兒の屆出が多いのでも分かる、斯樣な工合であるから、ます／＼此親尊子卑の風が募つて、その勢力當るべからずといふ有樣で、實に社會進歩の前に横はる障害であると考へる。

何も子だからとて、親に對して左まで懸隔のあるべき筈のものでは無からうと思ふ、即ち親より子を觀るときは、第二の我であれば之を慈しまねばならず、子より親に對すれば、即ち自已は親の分身であれば、何處までも孝養を盡さねばならぬのである、而も思ひ此に到らぬ所より、無暗に親の威權を振舞ふといふやうな事があると、自然その間に温かき親子の情といふものが薄らいで來るから、時としては忌はしき爭ひまでも惹起すやうな事がある、であるからして、單に親子や夫妻のみに限らない、總て一家に居るものは、互ひに誠を推して相扶け合ふて行くやうに爲ねばならぬ、足は下の方にあるから卑しいと云つて、萬一之を切り去つたならば如何であるか、それは云ふまでゝはあるまい、



口のはたらき

磯島　傚

この口に就きましては、古來から口は禍の門であるの又口は百病の本であるのと云つて、孰れも餘り好ましからざる方面にのみ解釋せられてあるが、さう片手落にばかり物といふものは攻付くべきものでは無からうと考へる、若しも吾人々類に此の口といふものが無かつたならば、恐らくは如何して滋養分を取り、以て生命を保全する事が出來ませうか、或は植物の葉に於けるが如く、肌膚の氣孔からでも取るであらうと云はるゝか知れないが、假りに一歩を讓りて論者の說に從ふとして、先づ滋養分を收容する事を得るとしても、調節ある言語を發して相互に意志を通ずるといふ事は出來ないのである、併しながら私は今さういふ議論を試やうといふのではない、直ちに此口といふものに就て、口それ自身は如何なる働きを爲すものであるか、はた日常如何に爲しつゝあるかと云ふ事をお咄して見たいと思ふのである。

今更私が云ふまでも無く、口は皆樣の御持合せの品でありますから、何だ馬鹿げた事を云ふと有仰る方もありませうが、然らば口は如何なる作用を日常に爲しつゝありますかと問ふたならば、それは物を言つたり食物を食たりするに極つて居ると答へらるるでありませうが、それは仰せまでも無いのでありますが、却々まだ口には大切なる役目を有つて居るのである、茲にチヨツトお斷りをして置かなければならぬことは、標題には單に口のはたらきを掲げて置きましたが、實は一概に口といふもの丶、その中には唇もあれば齒もあるといふ工合で、之を細かに分けますと却々澤山な數となるのであるが、今は夫等を總括して口といふのであるから、讀者は豫め此の事を含んで居て貰いたい、どうも是まで統計學者や醫者などの說によりますと、西洋人に比べて日本人は一體に早く年を老るといふ事である、日本人は

最早五十六十になりますと、仕事を厭ひて樂隱居をする工面をする、啻に工面をするばかりでは無い、概ね隱居するのである、それも其筈です、四十になると最早中老などゝいふのであるから、それから積れば、五十六十の人は隱居するのが至當かは知れないけれども、彼の歐米人などは、まだ五十や六十は働き盛りと心得て居るのみならず、まだその年では腰も曲らず、殆んど壯者と同じやうに活動して居る、是は前年の事ですが、私がまだ横濱に居ります時分に實驗したのであるが、某商會の主人で、その當時年配は六十七八、最早七十に近いので、鬚髪ともに銀のやうに眞白になつて居りましたけれども、その顏の色などは艶々して居るのみならず、腰などは少しも屈む樣子も無い、日本人なれば優に樂隱居の資格ある者であるが、この商館の老主人は、所用の爲に英國に返り、再び日本へ戻つて來たのであるが、船より上陸して家に入るや否、頓と平生と異なる所なく事を執つて居らるゝのを見受けました、まづ大抵の日本人、否、十人が十人まで長の航海をして來た私の友人などは、旅疲れと稱して家に少くとも一週間以上、長きは二三週間以上も湯治とか別莊籠りとか稱して休養を要求するのであるが、歐米の人は決して左樣いふ事は無い、此くまで我と彼とは身體の健否に差があるのである、勿論是には種々の原因もあらうが、一つは日本人が、常に口より取込む所の物が餘り宜しくないのと、之に加ふるに

腦細胞を過度に使ふ

のとが不健全にせしむるのと、之に反して歐米人は、比較的營養分に富んだ物を取り、さうして絶えず腦細胞の消失を補つて居ることが健全ならしむるに原因するのであらうと考へる、

元來人類といふものは男女に關はらず、凡そ一たび此の社會に出でたる以上は、必ずその職その業の如何に拘はらずして

勞役に服さなければならぬ

のが本義である、勞役と聞くと、私は車は曳きませ

ぬ、重い物は擔ぎなせぬと有仰る方もありませうが何も車を曳き物を擔ぐのばかりが勞役ではありません、一國の政治を預かる總理大臣を初めとして毎日腰辨で通勤する小役人でも、又は大學の教授連でも、或は銀行會社の重役でも、何でも彼でも一人として勞役に服さないものは無いのである、たゞ其勞役の仕方が異ふまでの事でありますから、従つて身體に缺損を來すのである、その缺損を補はんが爲には營養分を要するのである、例へば、働けば腹が減く、ソコデ御飯を食べるといふのが定りである、故に營養分は活動の資本



と云はなければならぬ、平常吾人が活動し勞役に服するには、その資本を何れより取るかと云ふに、無論口である、サテ其口から吾人は活動の資本を取り入れるのであるが、まづ通常如何なる物を如何程位要するかと云へば、凡そ一日間を標準とすれば、牛乳を一合に味噌が五匁、肉類が六十匁に野菜が五十五匁、之に白米四合程を加へるのである、まづ是だけあれば、その日〳〵の體質の損耗を補つて健康體を保つて行くことが出來るのであるが、然らば夫等の中には如何なる滋養分を含んで居るかと云ふに、蛋白質が二十七匁、脂肪が八匁、炭水化物が百二十一匁となるのである。

尤も時としては、牛乳の代りに二個の卵子と、野菜五十匁に魚肉が六十五匁といふ風に代へて、之に白米は前同様用ゐても宜いので、之を分析して見れば、蛋白質が二十七匁、脂肪が五匁、炭水化物が百十九匁となるのであるが、まづ一日の食料といふものは、斯んな割合に調理しなければならぬのである、一體人間の胃の腑といふものは却々贅澤なもので、毎日同じやうな物ばかりでは承知しない、否、胃の腑ばかりでは無い、口もまた左様である、その證據に、毎時も同じ物ばかりを持つて行きますと、直ぐ口が飽きたといふを以ても知らるゝ、であるからして、胃と口とは兄弟も同様といふよりも、寧ろその贅澤な點に於ては異物同性であるといふ事が出來やうかと思ふ、斯様な鹽梅であるから、自然に營養分を吸收する點にも影響して來るのである、して見れば一概に日々の總菜などゝいひますけれども、之を三日が三日乃至七日が七日とも變へて行くといふ事は、實に主婦たる者の苦心の存する所である、此く云へばとて、家政の經濟にも頓着なく無暗に滋養分を取るが宜いといふのでは無い、贅澤をして美味い物を食べれば、其で滋養になるといふのでは無い、同じ芋や大根でも料理の仕方に依つては、口當りも異い美味くも食べられ、滋養にも爲るのである、また如何なる滋養物で

も料理の仕方に由つて其効を成さないのであるから、この料理法といふ事は、専ら家庭の主婦たる者の注意を拂はねばならぬ事である、ツマリ口當りを佳くするも惡くするも、一に主婦の手加減にあるのであります。

玉子や牛乳の滋養に富んで居ることは、今更物珍らしく云ふまでも無い事で、殊に牛乳の如きは消化まで良いといふので、年一年と其用途が擴まつて、縱んば人の乳を得ることの出來ない嬰兒でも、是さへあれば生育する事が出來る、また固い物を食べては宜くない病人でも、是さへあれば其で身體の營養を補つて行くことが出來るのである、何が故に牛乳は其様に効があるかといふに、それは蛋白質と脂肪とを多量に含んで居るからで、殊にその脂肪は牛肉に比ぶれば、脂肪球の形が極小さいので、口の中へ入れても別にザラ〳〵舌へ觸るやうな事がないので、吸收する事が樂に出來るからである、尤も時としては牛乳を呑だ爲に胃病を惹起す事があります、それは牛乳が胃液のために固體に變ずるからである、若しも左様いふ時には、一緒にパンを食べれば、胃液が十分に浸み渡るから、決して凝固する心配のないのみか、安全に且つ速かに消化されるのである、一體牛乳が白い色をして居るのは何が爲かといふに、

それは多量の脂肪小球が存在して居るからである、その小さゝ加減は何の位であるやといふに、三分三厘四方の中に二百五十萬粒あるとの事であるから、その小さいのは顯微鏡でなければ分らない、よく世間では牛乳を沸してコツプに注いで置くと、間もなくその表面に薄い皮が出來る、是を毒のやうに思つて取り棄てる人がありますけれども、それは藥を棄てるやうなものであります、その薄い皮は空中の炭酸瓦斯の作用で乾酪素が凝まるのであるから、少しも氣遣ひは無いのであります。

次に玉子は、魚鳥その他の肉類を容易に得るとの出來ない山間僻地などでは、誠に重寶な食料品の一

であつて、その料理法に依つては、餘程種々の事に應用せらるゝといふものは、至極輕便であるからであります、先づ普通玉子一個の目方を十五匁と假定しますれば、その滋養分は

牛乳の八勺五才に相當

するのであります、尤も此の玉子の中には澱粉や糖分は少しも含んで居らない、全體悉く蛋白質より出來て居ると云つても宜い位で、只僅に全量の十分の一位脂肪を含んで居るのであります、然るに此の蛋白質なるものは、兎角胃液に遇つて凝まる性質を有つて居りますから、成るべくは生のまゝ用うる方が宜しいのでありますが、止むを得ませんければ、之を半熟として用ゐるが宜しい、彼の黄味の固く煮たものなどは尤も不消化の甚しいものであるから、努めて之は避けて食べないが宜しい。

すべて男女を問はず、大人と小人とを論せず、人類の慾は何から起るかといふに、その根本は食物であります、その實例は、彼の頑是なき嬰兒でさへも、

その泣くに當りて母が乳房を哺ましむれば、まづ大抵は泣きを止むるもので、十が九までは効を奏するのであります、それより少し智惠附いた幼兒になると、其所らへ玩具の類を散らして遊ばせて置くと、之また直ちに口の邊へ持つて行くのでも分ります、それで思ひ附いた事は、動もすれば幼兒が食物と思ひ違つて、小さな物などを嚙み下す事がありますが、さういふ時に母親たる者の驚くのも無理ならぬ事であるが、併し餘り怖ぢ畏れ、迷ひ惑ふて無理やりに指を口中へ突つ込んで、之を吐かせやうと焦るけれども、固より一たび嚥み下したものは、さう容易に吐き出すものでは無い、若しも餘りに其樣な事を爲ると、それが爲に却つて幼兒の病を釀す基となるから、まづ左樣いふ時には狼狽ないで、

里芋とか又は薩摩藷の類

の軟かく茹でたものか、又は甘鹽に煮たものかを澤山に食べさせるが宜いのであります、成るべくは一度に澤山食べさせるのが肝要であります、さうすれ

ば是等の不消化物は澤山の排泄を促がすものなれば、その中に彼の嚥み下した異物は包まれて、別に消化の機關を傷めること無しに、一日か二日の中には安全に體外へ排出するものであります。

それから之も口から起るのでありますが、彼の中毒何か毒に中るといふ事が不時に起る事がある、それは腐敗の爲に一種の有毒なるアルカロイドを生ずるの結果で、しかも此の毒分は、往々臭氣もなければ從つて味に變化も無いのみならず、煮沸しても除去せられないのであるから、實に始末の惡いのであります、大凡食品の中毒は食後二十四時間以内に起るもので、それが發する時には、最も劇烈なる腸胃に痛みを覺うるのみか、咽喉は渇きて音聲は嗄れ、眼の關節機關は痳痺して忽ち死の悲しみに接する事があります、尤も是は激烈なる場合を云ふのでありますが、往々宴會杯の後に、多數の人が中毒を起すのは斯様な場合にあるのであります、若しもさういふ場合に出會つた時は、之が解毒劑としてタンネーサンか、又は栗の皮を煎じて服するが宜しいが、若しも間に合はない時は、指を入れるか或は筆の頭で咽喉佛の邊を撫で丶、寸時も早く毒物を吐き出すことを忘れてはならない。

吾人が日常用うる所の茶と珈琲とは、その成分中に一種のアルカロイドを含んで居るのであるから、呑んで惡いといふでは無いが、餘り澤山に用ゐては宜しくない、若しも之を適度に用ゐさへすれば、血液の循環を良くし、呼吸をとゝのへ、且つ興奮の作用を起すものである、例へば、非常に睡い時に一杯の茶を呑むと、忽ち氣分を爽にして睡氣が醒めるものでありますが、之に反して、寢際に濃い茶を呑むとウカサレといふのは、徒らに神經を興奮せしむるからであります、此の茶と珈琲との中で、茶は吾人が食前食後、その他の場合にも常に飲用するものであるが、珈琲は重に歐米の人が食後に用ゐるのであります、尤も近來は大部洋食の後でなくとも、我國人中には

茶の代用に珈琲を飲むの風が行はれて來ましたが、之も餘り多量に用ゐますとノボセルものであるから、餘り澤山に飲ぬが宜しい、殊にコーヒー入角砂糖などは口當りが佳いので、ツイ浮か々々過すものであるが、是は十分に注意しなければ不可ませぬ。

凡そ飲食物は腹八分目と云ふ如く、十分腹一杯に詰めては味も何も無いもので、まづ羊羹なれば一切か二切、お鮨なれば五つか六つといふ位の所が一番美味いのであります、最早それより過しては味を失ふものであります、何にいたせ皆夫等は活動の資本を取り込むのであるが、扨それを取り込むに當つて、第一に用を爲すものは何であるかと云ふに、

云ふまでなく齒牙であります、この齒牙なるものは、之を胃や腸に送るに先つて一々粗粉碎を爲し、さうして之を嚥み下すので、しかもその食品を噛むといふ中には、吾人が噛みながら放心して居るけれども、之を碎くと同時に、胃腸へ行つてから骨の折れないやうに唾液と

いふものを混和して、嚥下と消化とに利便を與ふのであります、之は何でも無いやうだが、實に佳く噛むと否らざるとは、健康と不健康との岐るゝ所であつて、夫等の作用を總括するものは口であります。口開けば腸見ゆる田螺とやら、腸か空虚であるから、此所らで御免を蒙ります。

興味ある數の觀念に就て

理學士　刈谷他人次郎

數學上の事に就て何かとのお話でありますが、一口に數學といふものゝ、却々その範圍の廣いので、殊に稍進んだ所になると、專門家でさへも時には首を捻るやうな問題に撞着するのでありますから、其樣六ケしい事は偖措きまして、尤も當初に溯つて、世界の諸人種を通じて、數といふものゝ觀念は如何なる

ものであつたらうか、また如何に勘定を爲しつゝあつたものであらうかといふ事に就て、少しくお話をして見やうと思ふ

サテ算盤（十露盤といふのは正しいのであるが）は物を算ふる道具であると云ひますが、その算ふると云ふ事は如何なる事であるかと云ひますと、之は隨分六ケしい問題になるのであります、是等はチヨツト世人が重きを置かない事ですが、專門の學科としては卻々六ケしい理窟が澤山あるのであります、併し只今は、何も其樣な理窟を調べるのでは無いから、それは其として措いて、此にはその數ふる觀念の事に就て、理論よりも興味ある事實を述べる事と致します、



この數に關する最も簡單明瞭なる話は何を以て最も速かに知る事が出來やうかといふに、まづ小兒の數ふる有樣や、未開の人民を觀察すると最も捷徑で宜しいのであります、偖小兒が勘定を爲る時には如何なる風であるかといふに、必ず自己の指を用ゐるとか、

又は木片や小石の類などを用ゐるのであります、希臘人とか羅馬人とか云へば文明の標本でありますが、その幼稚の時代に溯りますれば、矢張り指を用ゐて勘定したといふ事は、これ正しく歴史の證明する處であります。

今尚ほ文化の開けざる亞非利加の野蠻人等は、侵入軍の數を味方に通ずるには、電信も電話も凡て夫等の話を傳ふべき方法も機關も無いのでありますから、その數に等しきだけの小石を積み置くに止まるのであると云ふ事です、固より彼等の間には、その唱呼一、二、三等の名稱は無いのであります、併しながら其が無いにしても、その積んだる小石を見て心には浮ぶのであります、

西班牙人が侵入せざる以前、メキシコに住んで居つた人民は、數を示すに方つて、一より十九までは小さい圈點を以てしたと云ふ事であります、また羅馬人が年代の經過を示すのには、柱に釘を打込んだとも傳へますが、現に小使などが薪の何本あるかを

數ふるに當つて、各個に白墨を以て棒を引くのを見ますが、凡て敎育程度の低いものは、何れに到るも同じものであります、

以上は筆を以て數を示す方法に就て述べましたが、必ずしも筆に限つた譯ではありません、

音響でも分ります

即ち毎日鳴る時計の時間、または拍子木などは皆同じ目的を達するに用ゐられて居るのであります、

是まで事實の根底として、數の觀念といふものは、物を算ふるといふ事から出來たものであるといふ事を示したのですが、文明も斯く進歩した人民になりますと

槪ね十進法を採用

したのは、誠に驚くべき一致であります、

十進法の事をチヨツト説明しますが、一より計へて十になると、其上の位に行く方法であります、即ち十厘を一錢といひますのも十進法です、又十寸を一尺といひ、十尺を一丈と云ふのも十進法です。

是は指の數が、左右合せて十本あるからだと云ふ事實に基くので、支那人拉丁人馬來人等は皆同じ次第であります。

指は左右を合して十本あるから、それで十進法を用ゐると云ふならば、片手には五本の指があるから、

五進法の國

は無いかと反問せられませうが、それは有ります、即ち有名なる亞非利加探險家スタンレイ氏の言に依りますと、中部亞非利加の土人は、概ね五進法を用ゐて居ると云はれてあります。

今度は一歩を進めて、我々人間には二本の手と二本の足とで、都合二十本の指があるから、

二十進法を用うるもの

は無きかと質問せられませうが、それも無いではない、古代のメキシコ人の如きは、確かに二十進法を用ゐた痕跡があります、現に佛國では、八十といふ代りに四倍の二十と呼んで居ります。

以上數ふるといふことに關して論じ來りましたが然らば數へた結果は何であるか、また何と名けられるかと尋ねらるゝであらうが、之は二つの元素から成立つて居るのであります。

例へば、八人、九本の木、五個の桃などゝいふやうに、

數自身を示すもの

と、その物の

種類を示す文字

を附します、此くの如き關係がありますから、唯單に二十三とか五十九とかいふ數のみでは、何だか薩張り分らないから、

之を不名數と稱します

之に反して前に示した、八人とか又は九本等をば

名數と稱します

併し斯の不名數とか名數とかいふ名稱は、單に便宜上に附けたもので、根本的には入用ではありません、

左れど私が子供等に教へますに、八本の鉛筆を二つに分ればと尋ねますと、四本宛と答へますが、八

を二つに分てと云ふと、四と答へるのが困難であります。

故に數の觀念を名數から得て後に不名數に達するものと見るのであります。斯くの如き事實がありますから、算術の敎科書等に於て、數とは何ぞやと問ひて、答には同じ種類の集れるより生ずと書いてあるのを見ますが、是は全く無理ならぬことであると思ひます。

予が崇拜せるアカンベ大黑

遠藤海象

維新の改革は我々士族に取つては大なる打擊、大なる恐慌であつたには相違ない、是まで祖先の遺勳に依つて何百石何十人扶持など〻云つて、突袖で登城して、云はゞ碌な勤も仕ない、否、隨分多人數の

中には勤の出來ない者もあつたのであるが、有難い事には、人が勤めるのでは無くして、

家柄が勤めをする

のであるから、よく〳〵の瘋癲白痴にあらざる限りは、扶持離れをするの腮が乾上がるのといふ事は無いのである、さういふ者の出來た家では、また夫れ相當に工夫をするのであるから、事實に於ては全く扶持離れの腮が干上がるのといふ事は無い。

かくして德川氏三百年の泰平に眠つて居つた士族であるから、實は自分の本業であるべき武術すらも未熟の者が多かつたのである、既に自分の本業ですらも其通りであるから、迚も實際から云へば其で飯を喰ふことは覺束ないのである、況んや其他に於てをやである、かくいふ予もまた其一人であつたので、

腰の人切り庖丁

は廢され、家祿は公債となつて、最早それを喰つて了へば、再び之を頂戴するといふ事は叶はないのであるから、今度こそは腮をつるか、左も無くば何と

か飯を喰ふ種の心配をしなければ爲らぬ事に立至つたので、中には勾配を早く歸農した者もあるが、他の多くは所謂商法に取り掛つたのである、然るに慣れぬ事とて、所謂士族の商法で續々として失敗するので、予は之を見るにつけ大いに寒心に堪へないので、曾て藩校に侍讀たりし時の如く、近處の子弟を集めて子の曰くを遣らうかと思つたが、迚も其樣な事では家族五人の者の口を糊して行く事は出來ないさうかと云つて、今僅かばかりでも此の恩祿のある中に何とか工夫才覺しなければ、末には家族の者が路頭に彷徨するに立至るであらうと、彼を思ひ此を考へると、實に食も咽喉を通らず、寢ても目を合することが出來ないので、殆んど初め一週間程といふものは種々に考案を廻らしたが、どうも良い考へも思ひ附かない、小供は何れも幼少なので別に相談相手にはならず、妻と協議して見ても是また武家育ちの事とて良い工夫も出ない樣子、ソコデ斯う内に閉ぢ籠つてのみ居たとて善い考案の出るものでは無いから、兎に角市中を一巡して町家の模樣を見たならば參考に爲ることも有らうかと、何處を目的とも無く市内を徘徊する中、不圖目に附いたのは麻裏屋である、是までとても始終目に觸れては居たが、左程とは思はなかつたものに、今日といふ今日は如何なるものか、その麻裏屋を見て、恰も暗夜に燈を得たるが如く、實に一種異樣の感に打たれたのである、極正直に白狀すれば

飯を喰ふ種を發見した

のである、ソコデ直ちに其家へ飛込んで弟子入りの事を申し入れると、その主人は豫て知合の間柄とて御串戯を有仰しやるなと笑つて受附けないのであるが、その時の予は却々串戯どころでは無い、實際心から底から、今この業に有附かなければ、五人の家族の生命に關する問題であるから、最も眞面目に最も誠意誠心に其來由を話して弟子入りを迫ると、然らばとて快諾されたので、その時の予が喜悦は實に物の喩へやうの無いのである、是に於て予は

二十八歳にして初めて丁稚となつたのである、爾來その主人に就て學ぶこと約二年にして獨立營業する事となつたので、開業すると間もなく、單に一刀を以て諸種の彫像を爲すといふ、頗る奇行に富んだ工匠が尋ねて來たので、之に囑んで

アカンペ大黒なるもの

を彫刻せしめ、常に之を自分の座側に置たのである。

當節は尙ほであるが、その頃とても都鄙を通じて商人といひ又は製造人といふもの丶間に、粗製品を高く賣つたり、濫造物を續出したりして、さうして顧客を欺くの弊があるので、何うか幾分之を矯正したいものである、縦ひ矯正の一端を開くことが出來ない迄も、自分は何處迄も誠實を以て行かうといふ考へから、十分製造には念を入れたので、一度我店頭の物を使つた方は、必ず他の物に比して二倍以上の久しき間の使用に堪へるといふので、仕合にも繁榮を來たしたので、妻にも之を習はしめて、共に倶

に製造販賣に努めつ丶あつたので、それが爲に何うか子女の敎育も普通には爲ることが出來たので、商賣の冥利といふものを知つたのであるが、扨その商賣中にお客樣が來て、之は一足幾何かと尋ねらる丶時、それは若干で御座いますと云ふと、それは高い、幾ら〳〵に負けよと云はる丶ので、その時は傍らのアカンペ大黒を指して、手前の所では無用の問答に時間を費すのは嫌ひで御座いますから、それで思召しに叶つたらお購め下さい、若しも負けよと仰有しやるなら、これ此の通りで御座いますと、毎時も斯ういふ風で、人に依つて直段を甲乙にしないのであつた、であるからして、時として怒つて歸らる丶お客もあつたが、その中誰いふと無く、彼の麻裏屋は因業屋（因業とは土地の俚諺であつて、通俗人の言ふことを用ゐない者を指して因業といふのである）であると吹聽せられたので、御蔭を以て子女の敎育も出來、且つ露命をも繋ぎ得ることが出來たので、この大黒こそは我家の福の神であるから、今に斯うや

つて祀つて居るのであるが、凡て人といふものは何事に附けても誠實でなければ、決して成功するものでは無い。

前にも云へる如く、維新の變革は士族の大恐慌であるとは云ふもの丶、實際よく觀じ來れば、維新の革變は士族といふ一種の階級の人間を社會に活動せしむべき機會を與へたものであると考へる、若も左樣で無かつたならば、我々も或は是迄のやうに働かなければ、子孫も亦社會に活動せずして、所謂天下の遊民で終るのかも知れない。

結婚に伴ふ迷信を打破せよ

高田爲憲

迷信といふものは未開時代の遺物であつて、世界到る處何れの國にもあるものであるが、どうも世の中は目明き千人盲目千人といふ如く、如何に文化の進んだ國民だからと云つても、全く根底から此の迷信を取去るといふ事は出來ないのである、殊に我邦に於ては、種々の方面に此の迷信が多いので、中に就て婚姻に關するものを數へ來れば、殆んど十指を再三屈しても倘だ足らないといふ有樣である、固より

　神聖なるべき結婚

に關しては、彼の此のといふ迷信などが頭を出して之を左右すべき筈のものではないが、實際は却つて之が勢力を有して居るといふのは、眞に不思議の現象といはなければならぬ、ツマリ極言すれば

　人智開明の程度が低い

といふ事を自白して居るのである、今その迷信の二三を列擧すれば

　第一は數に關するもの

である、一體物の數の名といふものは、如何なる理由で此の世に出來たものであるかと云ふに、まづ我

邦で最も古い神話的の傳説に依りますれば、太古天照大神が皇弟須佐之男命の狼藉を畏れさせ玉ひて、天の窟戸に隠れ玉ひし時に、天地ともに暗く、國民の嘆きが一方ならぬより、多くの神達が天安河原に集ひて、神議りに謀り玉ひし後に、神樂を奏して大神の御心を和らげまつらんと評議を一決して、天鈿女の命といふ女神が俳優の役を勤むる事に極め、ソコデ天香具山の天日影の蔓を襷にかけ、天眞折の蔓を鬘となし、天の窟戸の前に桶を伏せて、それをばトヾロと踏鳴らしながら、

一二三四五六七八九十百千萬

と、歌を唄ひつゝ踊りますと、神集ひに集ひし八百萬の神達も之に和して、高天原の動くばかりに笑ひ戯れますと、窟戸の中に隠れ玉ひし大神は、その笑ひさゞめく聲を聴かせ玉ひて、何事の初まつたのであるかと思召され、ソト戸を明けて面を出だし玉ふ所を、手力雄命がその手を取りて引出し、世は再び元のやうに光明なりました、ソコデ集へる神達が云

ひますには、天鈿女命の力で、かくは國民の嘆きを救ふことが出來たのであるから、切てはこの奇しき功績を後の世にまで傳へ、萬民をして永く鈿女命の神德を仰ぐやうにとあつて、その歌に唄はれた詞を數の名とし、今日は幾日、是は幾つといふ度毎に、思はず知らずも神の惠に與かるやうにと、斯くは名けたのであると宮比御神記に掲げてあるが、固より此の説は信を措くには足らないのである、併しながら我國の傳説として、言語には不思議の靈力があるといふ説を根據として、更に此の神話的傳説を考へ合せると、またその間に一種いふべからざる感應があるかのやうにも思はれ、且つ數に就ての迷信の起るのも無理からぬ事かとも信ぜらるゝのである、

まづ言葉と數との關係をいつて見ると、酒をサヽ又はクコンと稱へるが、即ちサヽは三々、クコンは九獻の隠語であつて、婚禮の式場で新郞新婦が取りかは

す酒は、三々九度呑ひといふ事から此語が出たのである、併し之は日本で創まつたものでは無い、支那から輸入したものゝやうに考へる、それは左傳に、
上公の禮は九獻にして畢る
と見えて居る、之に基いたものと考へる
それから四め十めと云つて、男女の年が四つ違ひか又は十違ひを嫌ふのであるが、それは嫁止の語に通ふといふので御幣を擔ぐのである、之に反して男より一つ年上の妻は、鐵の草鞋で捜しても添へと云つて居る。
すべて祝儀には七と五と三との數を好んで用ゐる



が、之は何故であるかといふに、同じ數の中でも、一三五七九の數は之を陽として奇數と名け、二四六八十は之を陰として偶數と稱するので、即ち陽は日に象どり陰は月に象どり、日は物を生じ月は物を枯らすとしてある、ソコデ陽數を貴ぶのであるが、是は矢張り支那から來た陰陽說に本づくので、決して日本在來のものでは無い、然らば其陽の數を悉皆用ゐさうなものであるに、特に七五三の三數のみを用ゐるのは如何いふのであるかといふに、一は初め

で弱く、九は終りで衰へるといふ誤想から來て、ソコデ一と九とを取り去つて、中の盛んなる數のみを取つて使用するのである、併しさうかと思ふと、時としては七難九厄など丶稱して其數を避けたり、又は二十五、四十二を男の厄年と稱し、十九、三十三は女の厄年と呼びて之を嫌ひ、また並び年とて、男女ともに二十二の年には結婚するもので無い、若しも強て結婚すれば、必ず不吉の事が生じ、又は生涯不幸に暮さなければならぬと云ひ傳へて居る

第二は方位と年時に關するものである、此の方位と年時といふもの丶吉凶に就いては、古へ専ら軍學者流の唱へた説で、多くは築城や合戰の必要から割り出したものである、例へば、北の方に水門口を設けるとか、南の方に櫓を建てるとかいふのは、畢竟攻めるのに難儀で防ぐには便利であるといふ築城法に依つたもので、また孔明の六曜日と稱する先勝、友引、先負、佛滅、大安、赤口の中で、佛滅の日には合戰を避けるとか、戌の日には

出陣せぬといふのも、是また野戰攻伐の法に則つたものである、然るに是等の法式を直ちに吾人の家宅行事に應用するといふのは、甚だ智慧のない話と思ふ、併し今尚は此の迷信は、諸種の中でも最も有力であつて、その人心を支配して居る事は多大なるものであるが、殊に結婚に就て嫌ふのは

丙午の年である、

この年に生れた女子は、良人を喰ひ殺すとか、又は子供を喰ひ殺すとか、但しは身代を喰潰すとか、この三つの中必ず何れか一つは免れぬといふので、非常に之を忌み嫌らふのである、それがため世の父母たるものは、成るべく丙午の年には子供を產まないやうにしたい抔と、あられもない謬想を懷く者さへある、のみならず萬一にも姙娠する事があれば、之が成人の後を氣遣つて、故意に流產するやうな破倫不德な罪惡さへ行はる丶さうであるが、實に迷信の力といふものも恐るべきである、

また干支に就て云へば、虎は一日に千里往つて千

里還るといふので、寅年のものを嫌ひ、申は去るに通ずるといふので之を忌み、從つて此の干支の年には結婚が少ないが、之に反して酉年と戌の年には結婚が多い、それは酉のやうに子供が澤山に出來るやうといふのと、一は戌のやうにお產を輕くするといふ迷信に基くのである、

月でいへば、正月と五月と九月の三月を忌むとも云ひ、又はさうで無いともいふ兩說がある、けれども正月と九月とは別として、五月は一體に忌むのである、何故といふに、五月の異名を病月といふからである、次に嫌ふのは七月で、之は一名佛月といふに基づくので、その次は十月であるが、之は云ふまでも無く、八百萬の神々が出雲へお集になつて、宮殿は御留守である、即ち神無月であるといふに由るのである、

次に日に就て云へば、前に示した孔明の六曜の中で、佛滅と赤口の兩日は嫌ふのである、同じ友引の日でも、葬式には之を嫌ひ、商賣の開業式などには最も此の日を喜ぶのであるが、隨分世の中は勝手なものである、

第三は言語に關するものである、言語の迷信は單に婚禮のみでは無いが、殊に此の婚禮に就ては、忌み詞というて必ず相警めなければならぬ言葉があるので、縱ひ自分は夫等の迷信を除外して居ても、もしも先方にお構なく忌み言葉などを婚禮の席上などで用うると、頗だ失敗を招くものであるから、其所は場所を見て遣らなければならぬ、全體我國は古へより言靈の幸はふ國といふ如くであるから、從つて言語に關する迷信も極めて古くから行はれて居るので、古事記などを繙きますと、天孫瓊々杵命が、大山祇命の娘なる磐長姫と木花開耶姫の姉妹を召させ玉ひし時に、姉姫の醜きを嫌つて妹姫を皇妃となし玉ひしをりに、父なる大山祇命が、わが娘二人並べて奉れる故は、磐長比賣を遣はしゝは、天津神の御子の命は、雨降れども風吹けども長へなること石の如く、常磐に堅磐にませ、

また木花開耶比賣を遣はしては、木の花の榮ゆる如くませ、とうけひて奉りき、かゝるに今磐長比賣を還して木花開耶比賣をひとり留め玉ひつれば、天津神の御妻は木の花のあまひのみましなむと白し玉ひき、かれこゝをもて今に至るまで、天皇の御命は長くはまさゞるなり、と記されたるを見れば、この磐長といひ木花といふ人名の語義に

運命を支配する靈力

があると信じて居るのである事がわかる、現今でも生れ性を見て名を付けるとか、又は名が勝過ぎて弱いから改名するなどゝいふ事は、決して珍らしからぬのである、

サテ婚禮について今尙ほ何といふ言葉を忌むかといふに、まづ第一は返るといふ詞である、故に式が濟んで還るにも、決して還るとは云はない、必ず開くといふのである、若し誤つて還るなどゝ云へば、それこそ先方の機嫌を損ずるのである、それ故に盃までも返盃せぬのが法となつて居るのでも察せらる

る、次にはシといふ言葉である、即ちシは死に通ずるといふので斯くは忌むので、四の膳をヨノ膳、

酒の四献をヨコン

とさへモヂルのである、若しも四といはねばならぬやうな場合には三が一といふのである、二と四の言葉を嫌ふのは婚禮の時ばかりでは無くして、近頃之に就て可笑しいのは、電話の番號で、何れの局でも四十四番とか又は四百四十四番などゝいふ番號は、誰も彼も之を嫌つて申込む者が無いので、電話局でも夫等の番號だけは架設しない事にしたさうであるが、實に迷信の力といふものは、迚も理論で壓へつける事が出來ない程勢を有して居るものである、

之に次での忌言葉は去るといふ詞で、之はチヨツト前に干支の所でいつたのであるが、それが亢じて、猿毛の馬には乘らぬとか、猿樂町をエテ樂町、猿屋町をエテ屋町とさへ呼んで之を避けるのである、次には切レルといふ言葉で、是ばかりは斷じて用ゐないのである、であるからして、本郷湯島の切道し坂

は、切ルといふ字が付くために、此所を通れば僅か十町か十五町で往けるものを、殊更に遠廻りをして此所を避けるといふ風が、今も尚ほ行はれて居るのである、此様な縁喜からして、祝儀の贈り物には、進物用の切手を取違するもので無いと、明治の今日でも云つて居る、否、實際爲ないのである、

　第四は器具調度に關するものであるが、古書に依れば、嫁入道具と云つて、種々な器具や調度が記してあるが、その中でも貝桶を第一の調度してある、蛤の貝は皆様も御承知であらうが、決して外の貝とは合せても蓋が合はぬもので、例へば、貞女兩夫に見えずとて、身持の正しい操の全き女子は決して兩人の男に從はないといふやうに一度結婚して後は、再び爲ぬものであるとの教への爲に、貝桶をば嫁入り道具の第一位にしたものであるとの事である、而して蛤をお吸物に用うるのも又この心であるとの事である、婚迎記に、貝桶とは貝覆ひする桶といふ事なり、受取り渡しの貝桶には、貝かた〳〵一つ入れるなり、その貝桶に紛れぬやう、覆ひに貝桶と書くなりとある、或説に、神代の昔、事代主尊その弟大己貴尊を憎みて殺さんとせられし時に、神皇産靈尊の命にて、鳥貝姫は人形を造り、蛤貝姫は眞井の水を持來りて此難を救ひまゐらせ、後に大己貴尊の須勢理姫と婚禮し玉ひしより、鳥貝姫蛤貝姫の名に寄せて貝覆ひといふこと起れり、又人代になりては、景行天皇の即位五十三年十月に、東國へ御幸ありて、上總の國より常陸國鹿島へ渡らせ玉ふ時に、大空に覺賀鳥の啼き過ぐる聲を聞き玉ひ、その鳥の形を見んとて海中へ出御ならせ侍れば、白蛤を獲玉ひしより、鹿島の浦の蛤貝を拾ひて貝覆ひをすること初まりたりとも云ふが何れも當にはならぬのである、是はもと香合せ、花合せ、繪合せなど〻同じく、貝を合せて勝負を爭ひしものなるを、何時か結婚の禮に用うるやうになつたもの〻やうに考へる、之は私一己の考へでは無い古人にも此の説が多いのである、

銚子に雄蝶雌蝶の形狀をした折物をつけるが、全體彼れは野に舞ふ胡蝶の姿を摸したものでは無く、全く蠶の蛾の形狀を摹したのである、それは蠶の蛾といふものは澤山の子を產むので、その心を取つて子孫繁昌を祝する爲であつて、番ひ離れぬといふ意味では無いとの事である、併し何れにしても迷信から來たものである事は疑ふべからざるのである、

次に蓬萊の島臺とて、洲濱の臺に松竹梅に鶴龜などを作り、之を祝言の座に置くことは古代から行はれた式ではあるが、今と昔とは其用ゐる方が大いに違ひがあるので、昔は唯

風流のため客への馳走に出したのであるから、必ず松竹梅に鶴龜と限つたのでは無い、或は遠近の景色、或は時々の花卉などを作つたものである、元來島臺の起りは、昔堂上方が花合せや草合せなどを爲る時に、臺へ載せて席へ出したもので、卽ち之に基いたのである、然るに何時の頃よりかして之を婚禮の席上にのみ用うる事となつたのである、

婚禮の時に盃を伏せる事を嫌ふが、それは古へ合戰の後、敵の大將の首實檢が了ると、其首に酒を飲せる時に盃を伏せて出す事に定つて居るので、それで之を忌むのである、それから柳樽の事であるが、婚嫁用心記に、柳樽とは柳にて拵へたる手樽の事なり、柳は水にあへばふやけて洩らぬゆゑに用ゐるなり、柳樽を宴內喜多留と書くを法となさば、桐の箱にて作りたる簞笥長持は、切りの箱と書かねばならぬ事となる、これ僻事なりとある、實に以上列記したるものは皆孰れも僻事で、此外まだ澤山あるが、それらは何うか早く掃絕したいのである、



刻苦して成功せる産婆の實歴談

根岸可那子

私のやうな者が、人様を救ふの又はお助け申すなどゝいふ事は嗚呼の沙汰で、寧ろ自分が皆様の御力を拜借せねばならぬので御座いますが、これに就ては聊か所以のある事で、その央よりは記者の方も克く御承知の事で御座いますから、御目ざはりとは存じますが、御聞に甘へて御話を致しますれば、元來

私の家は舊幕下で、極々少祿を戴いて居つたので御座いましたが、慶喜樣が駿府へお引移りの時に御供を致して參り、その後丁度私が十二歳の折、お暇を頂いて再び東京へ立戻りましたもの丶、兩親ともに商賣などゝいふ事には慣れませず、さうかと云つて長く遊んで居るといふ譯に參りませんとは申しながらも、ツイ浮々と頂戴した祿のあるまゝに春と過ぎ夏と暮して、最早私が十六の春を迎へました年のことで、尤も私は姉妹大勢有つたとの母の話で御座いますが、多くは幼少で亡くなりまして、その頃は僅かに三人の姉妹で御座いましたが、家に居ります者は私と妹のみで、一人の姉は前方餘所へ片附きましたので御座います、然るに其姉が一人の遺子を貽して敢なくなりますると、その小兒の父親は手前共へ御出になつて申さるゝやう、かく是まで此方とは十年以上も繋がる緣のことゝて、親と呼び子と稱へてまゐつたものであるが、今回彼女が亡くなつて見れば、自然後妻をも迎へなければならぬのであるが、去りとて他より之を迎ふるときは、從つて此方との往來も疎遠になるの道理、就ては年配の上より云へば少々懸け離れて居るけれども、彼の遺れ紀念もあることとなれば、私を是非にと兩親へ向つて懇望遊ばさるゝと、兩親より私へ逐一言ひ含められまするので、私も快く承知を致し、亡き姉の紀念を大切に夫に侍いて、先づ足かけ三年程は何事も御

座いませんで平安で居りますと、不圖した事より良人は病の床に就きまして、遂に還らぬ旅へと旅立たれましたので、涙の中に野邊送りも濟せましたが、玆に濟みませんのは、何分まだ年齒の行かない上に、是までは良人の戴く給料で生活を立て參りましたものが、今俄かに其稼ぎ者に亡くなられましたので御座いますから、最早明日より如何して家計を立て佳い事やら、當時と違ひまして其頃の女子と申しますものは別に獨り立ちの出來るなどゝ申す技藝や職業といふものを授けられて居りませんから、御相談の上で實家へ戻り、父母兩親へは濟まないとは思ひながらも、まだ何といふ目當もなく、只如何かせねばなるまい、將來獨身生活には何が相應からうかと云ふやうな、誠に取り止めもない考へに日を送つて居りまする折柄、某所より縁談を申し込まれましたが、最早自分は生涯獨身生活を營まうと決心したので御座いました、けれども振返つて年寄りたる兩親が、尙ほ妹一人を抱へて苦辛して居るのを見ましては、

坐ろに心の鈍りますのみならず、仲に立つ人も兎や角と勸めて吳れますので、餘所へ嫁ぐのも一つの孝行かと存して、父母の言に順つて再び片附いたので御座います、是は私が十九の歲へ年のことで、何も御幣を擔ぐでも何でも御座いませんし、また參つた先方も、當時陸軍の工兵で建築の方の係りで御座いますから、先づ收入も相當で、その良人の性質と申しましても、別に是ぞと非難すべき點も無いので御座います、然るに當今も大部流行さうで御座いますが、兎角諸官省の建築係の御役人になりますると、此方では別に催促致しませんでも、持つて來た菓子折を開けますと大枚の御鳥目が入つて居たり、又は時々氣散じ抔と稱へて、歌女の巷などに伴れ行かれますので、如何も是が私の氣を痛めてなりませんから、暫らくは耐へて居りましたけれども、遂々耐へ切れずして、一日良人に向つてそれを止めて貰ひたい、私共は御上より頂くもので、十分とは行かなくとも、先づ相當には生活が立つて行くのであれば、

如何か一厘一毛たりとも、自分の取るべき筋道でない處より入つて來るものには手を觸れて下さるな、若も今日以後そのやうな事があッた時には、自からお暇を戴きますと申して諫めますると、その時は良人も快く之を承知せられましたので、私も是で安心と思ひましたが、其は束の間で、また〱袖下などが行はれますので、最早私の諫言も無駄だと存じまして、大人しく相互ひの利害を說き、且つ私も是まで其等の心配の爲に早產や流產



をいたして、身體も非常に衰弱いたしましたので、醫師の診斷書を差出して快く離別を致したので御座います、

サテ斯やうに離別は致しましたものゝ、生家には兩親が、前にも申し述べました如く、一人の妹を扣へて寄る年波の厭ひもなく聊かの生業を致して居りますので、自分の不仕合せも重ね〱とは云ひながら、年老ひたる父母に比ぶれば物かは、たゞ兩親に對して相濟まぬと、日夜種々に心を摧きましたが、何分私の育ちます頃は、丁度御維新前後の事と云ひ、且つ

は静岡へ行き亦東京へ戻りといふやうな始末で御座いますのみならず、今とは違つて學校といふものは御座いませず、寺子屋の御師匠さんと申した所が、瓦解の折で御座いますから、定ッた御師匠さんといふものは無く、多くは御勤めの傍ら小供の世話をする位、それも勤めの御役所が變るど往ッてお終ひになるといふ次第で御座いますから、私が八歲から十二歲までの間に、五返御師匠さんを替へるといふ始末で御座います、それも好いと致しまして、その頃女子に敎へますものは、漸く女今川とか又は女大學などゝいふものが精一杯で、只今のやうに女子に學問を仕込む事は致しませんでしたから、覺えるものは僅かのみならず、再び東京へ出ましてからといふものは、頓と手習等を致す暇が御座いませんので、文字の入用な事では、所詮身を立てる事は出來まいと一時は存じましたが、サテさうかと云ッて

　女の髪結にも成り下れまい

といふので、然らは何か內職でもと存じましたが、

是また今日のやうに、世の中が開けて居ませんから思はしき職業も見當りません、ツマリ何うしたものかと心を苦しめつゝ居ります矢先に、不圖自分が豫て早產や流產等のために苦しみました事を思ひ浮べましたので、このお產といふものは

　女子の一大事である

といふ事に氣が付きまして、是まで自分も此のお產では苦しんだが、之に就ては世の中に思ふまゝに手が屆かないで苦しんで居る方々は嘸澤山な事であらう、去れば目に文字は少なくとも、思ふ念力岩をも通すといふ諺もあれば、自分も勉勵さへすれば、よもや成し遂げられぬ事はあるまい、若し幸にして成し遂げらるれば、自分の身を立つるは勿論、及ばずながら貧困な方々を救ふ一端にもなるであらうと考へましたので、以前自分が御厄介になりました榊さんの許へ訪づれて其由を語りますと、先生も大層御贊成なし下さるのみならず、種々御便宜を與へて下さいまして、辛うじて矢の倉の櫻井先生の傳習所へ

入塾を致して、日々下谷の茅町から通ッて居りましたが、暴風雨の時などは隨分辛う御座いましたが、また〳〵

暴風雨よりも辛い事

が御座いました、と申しますのは、最早今より二十何年の前の事で御座いますから、外の事は存じませんが、產婆の事に關した書籍も當今は澤山に出版されて居りますけれども、まだ其頃といふものは一冊も出來て居ないので御座いますから、毎日その日の學科を、半紙に二枚程づゝ蒟蒻版刷にしたものを渡されるので御座います、然るに其刷物のインキが海い上に、文字が所々缺けて居る

ので、それも私が以前十分學んで居りますれば、さうでも御座いませんが、前に申し上げたやうな始末で御座いますから、偏や作ばかりでは考へが及ばないので御座います、剩へ教室で先生が何か黑板にお書きになるのを筆記いたさうと存じますと、生憎手の影になり、それを見て居れば自分の手許が御留守になるといふ工合で御座いますから、家に歸つてから復習の時の苦くみと申しましたら、實に一通りや二通りでは御座いませんので、曩に榊先生が、產婆になる者は汚ない事と辛抱とが大切であると被仰つたが、その穢ない事位は辛抱するにしても、是では迚も學說の方の我慢が仕切れまいかと存じましたが、世の諺に、何も初めより先生は無いとも申しますから、是ではならぬと自分で自分の氣を引立てまして勵みましたけれども、何うも翌二十年、只今では內務省で試驗をなさいますが、その頃は東京府廳で御座いました、その試驗に迚も應ずる事は出來まい、若しも及第する事が得られなかつたならば、最早斷念るの外は無いと決心は致しましたもの〻、萬一にもと存じて怠りなく勉强をいたし、試驗に出ますると、神佛の加護か先生方の御骨折か、僥倖にも免狀を頂いたので御座います、依つて是は偏へに先生方の御引立と今に於ても肝に銘じて居ります、

それより開業は致しましたもの丶、今も或一部分では左樣で御座います、まだ產婆かと云はる丶位は結構でありますが、大抵は昔の流儀を逐つて、一口に取り上げ婆アさんかと申すやうな次第で、その語氣の中には一種の冷嘲を含んで居るので御座いますそれも無理ならぬので、以前の產婆と申しますものは、たゞ熟練によつて行つて來たのみで、當時のやうに、生理とか解剖とか申すやうな學理は一向に辨へませんので御座いますから、云はゞ危險千萬であつたので御座いますが、當時は却々それでは試驗が通りません、左れば其等の學說や實地を硏究いたして、兎に角開業するので御座いますけれども、今でさへ左樣なので御座いますから、況して今より二十年前には、開業は致した者の却々顧客は出來ない、と云ふのは、一つは產婆と申しますれば年老のもので無ければ不可ないと云ふやうな習慣が、世人一般の頭に浸み込んで居りますから、私のやうな年若の者では信用して下さらないので御座います、併し月

日の經つに從ひ、追々と御得意も出來まして、僅かに腕を試すことが出來まするので、幾らか心丈夫には思ひましたもの丶、その頃同時に開業いたしました友達の吉田某といふ方は、立派のお住居にお入りあそばし、車夫を抱へて御出でなさると云ふ御全盛で、時折り私が伺ひますと、まだアナタはその羽織を召して御出ですか、着物もさうでは御座いませんがなど丶冷笑はれますので、實は心外千萬とは存じますけれども、何にいたせ開業匆々ではあり、且つ兩親の手許も前に申したやうな次第で御座いますから、人目を忍んでは淚にくれて居りましたが、氣の小さい女としては隨分堪へられなかつたので御座います、併し何も辛抱が大事であると存じまして、僅かばかりの御得意なりとも、自分の職業を大切と勉强いたして居りますと、明治二十三年に至りまして帝國大學の醫科で、どうも此頃の產婆は、技術が未熟なるにも拘はらず、兎角鼻息ばかりが荒くて、之では患者のもの丶迷惑は一通りで無いといふ事より

して、模範的の産婆を養成したいとの思召で、若干人の講習生を募集せらるゝといふ事を聞き込みましたので、是こそ勿怪の幸ひ、願ふても無き仕合せと存じまして、直ちに申込みを致しまするど、殊の外濱田、千葉などいふ先生方もお喜び下さいまして、御親切に御世話下さるので、私も力を得まして一生懸命に勉強いたし、その翌年

講習を終り免状を頂戴

いたしましたもの丶、是も畢竟自分の力ではなくして、偏へに濱田先生や千葉先生等の御蔭に依る事と深く肝に銘して感謝いたして居ります、何故かと申しますに、私が今日の機運に向ひましたのは、その初めは榊先生や櫻井先生等の御手引で御座いますけれども、この講習會に於ける濱田先生や千葉先生等の御誘導を被らなかつたならば、迚も今日のやうには參りますまいと存じますので御座います、

まだ是から先き、私の身の上は如何に變るか、又は異らないかといふ事は、豫じめ測り知る事は出來ないのでありますが、まづ今日の所、私は

生涯この職業の研究

といふ事に頭を据えて居りますので、暇さへ得ますれば、醫科大學は勿論、諸先生方に就て研究を怠らないので御座います、その爲いか、昨今は御覽の通り助手の方も三四人宛は始終居ります位に皆様の御贔負を被りますので、年老の母と共に喜んで居ります、併し貴君も御承知の彼の時代の事を考へますと實に夢のやうで御座います、とは申すもの丶、あの苦しみを忘れてはならぬと、毎時も母とも申して居るので御座います、それもそれとして、私もたとひお一人でもお二人でも、今日まで御助け申す事が出來ましたので、

僅かに初めの一念

を通すことが出來て、そればかりは嬉しいと存じます、尤も是は今日以後とても、尚ほ引續いて致したいと常に心掛けて居るので御座います、

予の敬服する女子教育家の面影

高見勝

一日降りしきる雨を衝いて、當代女子教育界の泰斗三輪田眞佐子刀自を其邸に訪れた、开は予が日頃から崇拜する刀自の謦咳に接して、その高說を拜聽しやうといふ而已ではなかつた。

訪問は丁度是で三度目で、最初の時は病中、二度目は不在といふので毎時も心を遺して歸つたのであるが、實は今度も、二度ある事は三度とやら少しく不安の念を抱いて居つたにも拘はらず、輙く拜眉の榮を得る事に成つた、案内について奥へ通れば、此所は八疊敷い應接室で、日本室の構造ではあるが絨毯を一杯に敷き込み、中央には椅子に圍まれた卓子が二脚程好く位置を取つて居る、その他には別に目を驚かすやうな装飾も無いけれども、何處となく清楚として自ら襟を正さしむるやうな趣は、まだ主人に接せずして先づその高風が慕はれる。

鬱蒼たる植込みの庭園を隔てゝ大きな校舍が建つて居る、刀自の邸宅といふのは即ち校舍の一部で、畢竟三輪田氏の一家は、平素多くの學生と同じく斯邸内に起臥して居らるゝのである。

待つこと少時にして刀自は出て來られた、予は刀自の風采等については別に書立てる必要も無い、既に其人の事業や人格は世間で知悉してゐる故に、最早七十に垂んとする老婦人にして、如何にも壯健で、しかもその温乎たる風丰は、數百の生徒が慈母の如く慕ふのも無理はないと感じた。

予は直ちに來意を述べた、刀自は一考せられた後、特に休暇中に於ける女學生の心得といふやうな題目を撰んだのは如何なる理由に因るのであるかとの反問に接しましたので、されば孰れの學校を問はず、また男女の學生を論せず、年ごとに來る休暇の中で、尤もその學生が愉快に且つ悠揚に身心を休養するも

のは、所謂暑中の一ヶ月か乃至一ヶ月半の休暇であると考へる、平常學校の日課を學つゝある時には、總て敎師の監督の下にあり、又は家庭に於ては父兄の監視を受け、復習その他の事には一も遺漏はあるまいが、この長き休暇中には一切放任されて、云はゞ父兄若くは敎師の監督外に悠遊するのが普通である、去りながら此時に於てこそ最も父兄や敎師の殊に注意を拂ふべき時期であると考へる、然るに此の忽がせにすべからざる時期に際しての



戒心を與ふべき事に就ては、從來世上に斯樣の書籍に乏しいやうに見受けるので、若しも左樣いふものが有つたならば、如何ばかり彼等の爲になるであらう、換言すれば若し此くの如き著作があつたならば、彼等は之に依つて若干の利益を得るであらう、否、彼等は如何に斯暑中の休暇を利用して、より多く有益に、より多く趣味あるものとして過すことが出來るであらう、約言すれば、來る年每の暑

中の休暇を徒らに過さしめないやうにする事が出來るであらうと、先づ斯ういふ趣意で、割烹とか又は裁縫とかいふやうな家事向の學課を、如何にして此間に應用すべきか、それらの心得又は其他の用意等について然るべく御執筆が願いたいと述ぶるや、刀自は始終を聽取り默頭られて、その御趣意は妾も極めて贊成する所である、無論自分の監督する生徒等は、日頃より其邊の注意も怠つては居らぬが、廣く世間の女子の爲に、記述した書籍を頒つといふ事は極めて必要な事と思ふから筆を執らうとの御返事を得たので、是で予が訪問の用向は滿足なる結果を得たのであるが、尙ほ其他に參考として、御高說を二三伺つたから其を左に記述しやう。

三輪田學校には予の知人の令孃達も多く通學して居る、其等の人々は何故官立の學校を撰ばずして私立學校に通學させらるゝやとは刀自の質問である、予は之に答へて、要するに女子敎育は人物の感化が一番大切な事であつて、夫には敎員の出入が繁き官立よりも、個人の經營せられた私契的敎育の方が便宜である少くも予等の私立を取るのは其意味より來たものだが、併し私立とても何處でも宜いといふのでは無い、即ち其人の德望を慕うて、人格を基礎として撰擇の標準とせねばならぬのであるとやうに答へた。

刀自は之に對して別に可否は言はれなかつたが、

個人の感化

といふ事に就ては自分も平素から考へて居るので、多くの生徒に對しても又下婢等に對しても、自分の日常の行爲を以て第一の手本と爲せるやうに骨を折つて居る、例へば刀自は每夜寢に就かるゝ時は、必ず一定の場處にマッチを置かるゝので、若し之を無斷に使用するは兎も角、新來の女中などが不審に思つて片附けでもすると非常に窘なめらるゝ、といふは、何れの家庭にしろ夜中不時の事が起らぬとは限らぬ、その時マッチは何處かと狼狽するやうでは困るとの刀自の周到なる注意より出でたもので、婦人

としては平素此くありたいものである。

また刀自は最も語に力を籠めて、兎角婦人といふ者は、男子と異つて虛榮心に富んで居るから、自然

驕奢の風が增長する

ものである、就中今の女學生などは尙々近來甚だしいので、ツマリ理想にのみ耽つて居る、自分の學校などは成るべく其點に注意して、服裝は華美を避けるやう最も嚴格に取締つて居るので、毎年新入の學生等は隨分この取締りに困しむ樣子だが、追々に感化せられて其卒業前には入學當時とは全く變化して克く此取締りの精神を呑み込むやうになつて來るのである。

それから寄宿舍の生徒等に對しては十分の注意をせられ、食事の如きも奢りのないやう、さればとて粗匆のないやう、一度刀自の試みられた後に與へられる事になつて居る、併し牛乳と鷄卵とは一般食用に許されてある、それは婦人が出產の際に醫師より必ず食用品として牛乳又は鷄卵を供せらるゝので、その時に方り若しも之等を嫌ふやうな事があつては健康を害するから、豫め之が習慣を付けて置くためである。

刀自は又如何なる場合にも必ず專門の道に從はれる、例へば病氣の時に、縱ひ他に自己の信ずる藥餌や加療法があるとしても、必ず醫師より敎へられたる道を守りて毫も自我流は出さない、

これ即ち服從の性であつて

子は親に從ひ、生徒は敎師に從ふ、凡て目上の人には從ふ事である、而して刀自が語られた中にも最も敬服すべきことは、刀自は如何なる場合とても、

通帳で物品を買はれない

それは通帳といふものは、其時現金を支拂はないから、ツマリ買ひ好いものであつて、一尺の木綿も二尺求めるといふ事になる、又一尾ですむ魚も二尾求める事になり、イザ月末に至つて豫算を超過して大狼狽をするのである、現今の女學生たちが頻りにいふ理想的家庭、それは何の事も無く出來るやうに思ふが、

左様容易に決して作り得るものでない、よし作り得たにしろ、家庭の經濟に紊亂を生ずるが如き事があつては、自然

家庭の平和を破る基

となる、かの收入の少なき家に於て、年末に至り八方を飛廻る困しみをするも、歸する所は家庭に於ける餘裕を生ずると將不足を生ずるとは、一に

主婦の采配如何

に由るものと云はれても仕方があるまい、そこで刀自は平素は八百屋米屋を問はず、凡てに通帳を用ゐず現金拂ひである、やゝもすれば刀自の授業中などは、魚屋が二三十分間も待たさるゝやうな事もあるさうだが、出入の商人も刀自の氣質を呑みこんで居るから別に何も云はないとの事である。

その他刀自は暑中休暇の如きも、成るべく多くの生徒と共に靑松の間波靜かなる海邊に行かれて、日々學校にて學び得たる割烹とか又は裁縫とか、その他家庭に必要の科目を實習せしめ、優游の間にも自然の家庭に於ける趣味を知らしめて見たいばかりでなく、出來得るなれば成るべく年に二三回位は卒業生等と共に會合して有益の談話でも交換するとか、尚ほ進では、時々互に家庭に往來して、

慶びは分ち悲しみは慰め

などし合つて、永久に交際を保ちたいものだと話された。

予は以上列記せるがごとき刀自の實踐談を傾聽して、如何に刀自の注意が些細なる點にまで及べるかを感嘆した、世にはその聲を大にして實の揚らないもの丶多き今日の社會に、刀自の如きは極めて其聲を潜めて他に聞えざらんやうに爲らるゝ其反面に於ては、常に自ら身を以て多數の生徒は勿論、邸内に於ける婢僕までを率ゐらるゝのであるから、未だ曾て儘にならぬの又不平不滿の念に堪へぬのといふやうな事は少しもないので、毎時も胸中は光風霽月の如くであつて、毫も雲翳の遮るものがないから、見るからに其愉快に滿ちたる精神の爽快は顔せに表は

れて居るから、生徒等の懐くは言ふまでも無く、予も亦雍乎として其徳に化せらるゝの思があつた。

新式菓子製造法

梅田嬌菓

登呂々羹

原料調合率　△白寒天一本　△清水一合五勺　△上等粗目糖百五十匁　△上等水飴十五匁　△佛掌薯汁廿五匁

先づ細長い白寒天を一本、水中に三四時間浸け、水膨して其含水を能く握絞り、細かく千切つて銅鍋か琺瑯塗鍋へ投れ、水一合五勺注ぎ込んで七輪烈火に掛け、能く煮溶かし、沸騰せしめてから上等粗目糖百五十匁を入れ、時々杓子で掻まはしつゝ糖塊を融解し、其煮上がるを待つて下ろし、別器へ毛篩を當て煮汁を濾過し、塵芥糟を取除け、漉液を以前の鍋へ戻し入れ、再び七輪火に掛け、更に上等水飴拾五匁加へて暫時沸騰せしめて濃く煮詰め、試みに煮液を少許掬ひ垂し見計り、其煮液が四五寸位の長さに滴れ續いて落つるを程良い煮詰加減として火から下ろし置き、更に上皮を剝ぎ離した佛掌薯を廿五匁山葵擦で擂下し、擂棒を持つて充分擦混ぜ殖やして其泡液中へ前の煮汁を少々づゝ數度に注ぎ込み、攪きまはし、直に深サ一寸横縱六寸位の漆塗重箱中を濡布で撫で濕し、其中へ流し入れ、風通しの宜しい平坦な簀箱上へでも列らべ、半日間程靜に動搖せぬやうに放置しおいて充分冷し、凝結して後重箱の内縁に水少許注ぎ入れし箱肌を離し、平板へ裏返して抜き出し、庖丁を濡布に撫つけ持ち、幅一寸三分、長サ二寸位の形狀に押切して、其切口を斜に附合して菓子皿へお盛りなさい。

佛掌薯は成べく上皮を剝ぎ、一日間程清水中に浸し置き、惡汁を抜出した者を擦下ろし、充分擂棒で擂交せ合して、輕く泡沫を擦殖やさなくてはいけません。

佛掌薯揑蔓饅頭

原料　△白砂糖五拾匁　△新挽煎種粒拾匁　△碾茶粉一匁位　△佛掌薯液拾五匁位　△早仕立割餡

乾いた鉢中へ塊ない白砂糖五拾匁投れ、次ぎに碾茶粉を一匁程入れ、平掌で能く擦交せ薄緑色に染め、新挽煎種粒を十匁投れ、雑と掻まはし混ぜて後、其中へ上皮を剝いだ佛掌薯を拾五匁程山葵擦で下ろし入れ、其薯液に糖粉を徐々と折重ね、疊みこむやうにして柔かに揑ね集結し、白砂糖を撒布した箱中へ出し、周圍に砂糖を附けて六匁位に切り分け、其種縁を指頭で薄く摘み延べ擴げ、其中へ八匁程の早仕立中割餡玉をのせ、徐々と手先で壓詰め入れ、種皮を寄せ合せて確と括りつけ、小判狀に丸め轉ばして好格を整へ、其儘にても尚上面へ燒火箸で何か燒目を附けて、意匠を施して稍風に曝し、周圍を凝して後菓子箱へ入れ、冷室内へ、貯へお使ゐなさい。

但し新挽煎種粒は、菓子煎種製造所か菓子屋でお求めなさい。

女鑑投稿規定

投稿はすべて婦人に限り、〆切は毎月五日と改め翌月の本誌に掲載す、但し俳句は選者の都合により爾後締切期日を掲載前々月末日迄とす、

兼題和歌の甲乙、短文、新體詩、兼題外の短歌俳句それ〴〵別の用紙に認められたく、又同じ用紙に二人またはそれ以上の名を並べることなきやうに願ひたし。

短文、新體詩の當選者には各天賞二圓、地賞一圓人賞五十錢秀逸繪葉書を呈す。

兼題和歌、雜題和歌、俳句の當選者には各天一圓地五十錢、人三十錢秀逸繪葉書を呈す。

●和歌兼題

五月　新樹　藤

六月　燕子花　電話



佐々木信綱先生選

胡蝶

天

岩代 樋口雪子

日もさゝぬ森の古沼椎の葉の
くろめる陰に黒き蝶飛ぶ

(評)やさしくうつくしき蝶をうたへる歌のみ多き中に異彩をはなちて着眼最もすぐれたり

地

相模 藤原下枝子

春風の京に入りゆく花賣の
前にうしろに舞ふ胡蝶かな

(評)調いふしやさしき白川少女の面影もうかびて

人

横須賀 柏原みな子

今日もまたやまぬ小雨に人も來ず
蝶も舞來ずさびしく暮れぬ

(評)蝶の題には少しいかゞと思へど着想新らしきをもて採る

秀逸

千葉 松丸はな子

網ほせる漁村も見えて湖の
岸の菜の畑蝶いくつとぶ

大坂 木村春江子

沿ひゆかん小さき蝶の夢のせて
すみれなかるゝいさゝ川邊に

名古屋 十文字華子

病やせし妹をいたはる温泉の
庭わたゝかに胡蝶舞くる

東京 平塚日百合子

花かけにねむれる猫のやさみゝに
夢さゝやくか蝶のとまれる

東京　小山てる子

京にとつぐ姉を見送る暇路や
朝風かるく蝶舞わかる

東京　神田けい子

長閑なるゆめや見るらんさゝ川の
はなのいかだにねふる胡蝶は

兵庫　湖東靜子

いかばかりのとけき夢をむすぶらん
花をしとねに胡蝶ねむれる

埼玉　香取うめ子

蝶と成て身を花陰に隠さはや
人の世の罪見るに得堪へず

埼玉　深谷八千代子

畑打の少時やすらふ鍬の柄に
來てとまりけり美しき蝶

松山　田村多豆子

咲匂ふさくら山吹ひとゝせの
春をつくしてとふ胡蝶かな

東京　松原岑子

亡き妹が墓にたむけじひともとの
花にも蝶のたづねきにけり

美濃　月島眞砂子

花召せと呼ぶ聲かろき少女子を
胡蝶追ひゆく春日和かな

美濃　傍島みゆき子

花賣りのかへりし跡の門の邊に
あはれ胡蝶のひとつまとへる

美濃　遠山よしの子

夕映や春の花咲く園に來て
胡蝶を追ひし昔し戀しも

甲府　風間千代子

けふひと日小蝶となりて春の野を
心のまゝに遊びてしかな

美濃　花園女史

胡蝶まふ菜の花小路うすれ行く
賤の少女に夕日さすかな

美濃　井上とも子

花賣りの少女の過ぎし門の邊に
殘りて獨り蝶の舞ふかな

名古屋　山根しげ子

双蝶のむつるゝ行くへなかめつゝ
心そらなる春の野邊かな

越後　山本芳子

花かごを背にしてねむるをとめ子の
わたりえさらずとぶ胡蝶かな

美濃　陂部せき子

とらへ來し胡蝶逝きぬと妹の
日記かなしき春雨のまど

岐阜　後藤英子

花賣の都へ急く小車に
蝶したひ行く若草の路

常陸　岡田萬子

青麥の四五寸伸ひし山畑の
日かけのとけく白き蝶とぶ

岐阜　中村たま子

菜の花のわたりかこめる藁小屋に
蝶まふ見つゝ翁藁うつ

美濃　傍島さで子

渡し船かさなりあひし絵日傘の
上と下とにとぶ胡蝶かな

美濃　西村きん子

後の世はてふとうまれて花といふ
花のかぎりをわれあこかれん

美濃　岡崎つう子

むらさきの被布の房ふく春かせに
胡蝶まふなり里川堤

東京　諏訪すゑ子

亡き人の魂かあらぬかおくつきに
てふもねむれる春の夕ぐれ

大坂　竹村敬子

若草に眠れるちごのゆめのわを
めぐりてまひて蝶去りあへず

大坂　竹内敬子

いづ方に蝶は行けむ我ばかり
菫花さく野べに殘して

甲

○あくがれて菜の花畑幾廻り蝴蝶追ひつゝかつ追はれつゝ　府下　能村けい子

○そよ〳〵とふく春風にこゝちよく花にこてふのゆめまどかなり　東京　青木たま子

○ひら〳〵と花より花にまふ蝶の羽袖に花のつゆぞかゝれり　青森　川合りく子

○少女子がふりゆく袖にまふ蝶はいづこの花を離れきつらむ　秋田　伊藤光子

○少女子の水くむ袖にちりかゝる花かと見れば蝴蝶なりけり　大阪　磯　俊子

○賤家に梭の音して桃咲きぬ女蝶男蝶の生るゝ日なり　下野　高木美代子

○菜の花の散るよと見しはかはびらこあたりはなれず遊ぶなりけり　下野　高松雪子

○春着縫ふ手をはやすめて窓押せばしろきこてふの舞ひ入りにけり　廣島　鈴森きみ子

○春風のふくがまに〳〵散る花をむつれててふの飛ぶかとぞ見る　東京　田代糸子

○詩の神のみ手に夢みしそれのこと白き蝴蝶の花に眠れる　名古屋　中村濱子

○リボンさす少女のかみにひら〳〵と蝴蝶狂へり春の野にして　伊賀　佐々木いすゞ子

○なもとある植木の欄に舞ふ蝶の朝日にはゆる美しき羽根　千葉　益子操子

○菅の根の長き春日も花に醉へる蝴蝶追ひてし昔戀しも　神戸　今西操子

○鈴菜花散るかと見れば春風に夢破られてとぶ蝴蝶かな　神戸　竹井花子

○薔薇の香をしたひてよりし黃なる蝶早舞去りて菫のもとに　神戸　清水

○美くしく黃金色なす菜畑に蝴蝶の群れの飛ぶけしき見ゆ　美濃　酒向椿子

○蝶一つ夢よりさめて飛びたちぬ霞を分けて何地ゆくらん　長野　荒木とみ子

○春なれや十步にたらぬ庭ながら菫さくなり蝴蝶まふなり　名古屋　中村ちよ子

○蝶々や鳩に餌をやる少女子の牡丹色なる振袖に飛ぶ　秋田　三浦しゑ子

○あいらしき少女子ふたり打つれし菜のはにとまる蝴蝶おひゆく　神奈川　飯田白露子

○花にとび枝に葉上にやすらふる蝴蝶の夢やたのしかるらん　兵庫　古東すみ子

○雨はるゝ花のながめのうれしきにたまをちらしてまふ蝴蝶かな　名古屋　不破きみ子

○花の床露をまくらにねむる蝶の夢みやいかにたのしかるらむ　東京　檜波よし子

○後の世の　は櫻にわれ蝶に短かき春を送らんとぞ思ふ　伊賀　北村すゞ子

○美くしき蝴蝶とまれる心地しぬわが背君がみ手にふるゝ時　東京　鵜澤すみれ子

○雲へはて〻花を襟にいれし子は夢にも蝶のおとや追ふらん　東京　奈良八重子

○　大阪　小西松子
追て見つ追はれても見つ花の野をふりのたもとの蝶にむつるゝ

○　埼玉　高橋よし子
春ばかり蝶々なりて花毎にたづれて見まし野に宿るとも

○　神戸　梶原京子
花かぞと立寄り見れば花ならでつばさ嬉げに蝴蝶飛ぶなり

○　能登　栗倉すみれ子
ふと見えし黄の衣つけし蝶いづこ右も左も菜の花にして

○　松山　上原のぶ子
春なしもおのがこてふの世の中は花より外のゆめなかるらむ

○　山口　村上操子
花といふはなに眠れるひと春はてふの夢ともおもはさるらむ

○　岩代　岸野常子
野末遠く白羽の蝶の脊に乗りて亡き子来りし夢を見しかな

○　岩代　岸野菊子
うなゐらが唱歌のしらべ長閑にて花野一里を蝴蝶舞ひまふ

○　岩代　岸野せい子
蝶一つ飛ひゆく方に里見えて菜の花咲けり磁の如き家

○　越後　松永繁子
花いかだ一つ流してまた一つ流してやれば蝴蝶のりゆく

○　神田　花野しづく子
こてふ飛ぶ妹の袖の友禅を友と見てしか蝶のむつるゝ

○　岐阜　長濱闘子
花賣りの背に追ふ籠のなでしこに胡蝶したひつめぐりつるかな

○　須磨　有村芳子
われしなば白き小さき蝶と成りて君のみそばを守らんとぞ思ふ

○　須磨　有村紫子
野にさけるすみれの花の紫にやどりてねむる白き小蝶の

○　岩代　遠藤久子
鳳もまたでちるべくみゆる花の上にれふれる蝶のゆめやすけなる

○　土佐　秋月麗江子
とり〳〵の噂はたえて比翼塚のすみれ咲くあたり蝶まひ遊ぶ

○　美濃　加藤愛子
こと〴〵く蝶と散る花おひて来る人美しき小金井の岡

○　美濃　加藤里子
睦みなす菜の花添ひの家とへは蝶や舞ひきぬ春風の道

○　東京　中村千代子
ねふりたるこてふの夢やいかならん八重山吹の花をしとねに

○　美濃　梅田芳エ
誰れやらむ吾が文机にすゑ置し菫の花に蝶くるひけり

○　美濃　芳野紫水エ
黄金なす菜花の上をとこしへのしとねに春の蝶はねむりぬ

○　美濃　花園まき子
菜の花をしとねの蝶の夢さめて靜けく散りぬ花のひら〳〵

○　美濃　花園八重子
蝶や二羽縫ひては交す菜の花の小路すぎ行く栗毛若駒

○　名古屋　木下鶴子
咲匂ふ櫻の枝にねる蝶をかさなる花とおもひける哉

○　東京　吉岡鶴子
春雨に餘なかなれる山はたけは袖しめりててふのたち舞ふ

○　神戸　田尻保代子
ちる花のたゆたふかことそこはかと木の下かげをまふこてふかな

○　東京　松村とし子
うらゝかにかけろうもゆる花園を羽袖もかろく蝶のあそべる

○　神田　小林春子
此春も花にさそはれ蝶はきぬ思ひ出おほきはなの下蔭

○　横須賀　渡邊比佐子
温泉の里や花賣ありく少女子が束ねし髮に蝴蝶舞ひまふ

○　埼玉　横田やな子
すゞな咲く畑の中道ゆる〳〵とふりすてがたくとぶこてふ哉

○　美濃　杉山米子
咲きつゝく菜の花畑け美濃遠江二國かけて飛ぶ胡蝶かな

○　東京　神谷てる子
かざしをはまことの花とおもひてかこてふとまりぬその花の上に

○　美濃　杉山静子
遠江より菜花つゞき夕風に送られて入る美濃の蝶か那

○　美濃　吉田よし子
花かざす少女の袖にぬる蝶はいかなる夢をむすぶなるらん

○　美濃　長縄みか子
しめやかに春雨のふる鈴菜はた羽袖おもげに蝶の飛ひかふ

○　美濃　松田せき子
風に散る花かと見えて二つ三つあそぶ胡蝶の姿やさしき

○　美濃　西口こう子
苔むせる野路の地藏の花たての菜花戀ひて蝶二つとぶ

○　美濃　西田ひで子
うつろひの世にも似るかな胡蝶等は昨日の花をかへり見もせず

○　神奈川　渡邊君代子
妹の少さきたもとに風入れて胡蝶の舞ひまふ竹野過ぎ行く

○　東京　高橋珍子
去年の秋土となりにし庭の邊こゝろありけにとふ胡蝶かな

乙

○　清國　富成梓子
少女等が友ともなりて春の日をはなにおきふす蝶ののとけさ

○　下總　中川千鶴子
露を吸ふ花に眠れる我が園の胡蝶の夢やのどけかるらん

○　東京　千勝ふく子
あけ放つ窓に入り來し蝶一つまかきを越えて舞ひ去りにけり

○　磐城　木幡きよ子
花にねむる小蝶の夢や通ふらん過ぎし榮華の園の石橋

○　東京　倉重千惠子
花かげに圓居し居れば舞ふ蝶もけふの酒宴の友となりけり

○　近江　石王かず子
三年ぶりこひしき妹の墓詣で見なれぬてふと道連になる

○　東京　小栗つて子
少女子がむれにゐらんと飛ぶ蝶はふりはゆる袖の花と見るらむ

○　東京　鈴木ふき子
蝶二つむつれてさりし廣庭の木の間〳〵に春の海みる

○　下野　井上倚子
山鳩の聲もしめれる春雨に緋桃匂へてしろき蝶とぶ

○　千葉　金子智子
琴の音をきゝにこせしか檐先の蘇鐵の葉に蝶のとまりぬ

○　神戸　紫山あき子
風そよき黄金の草に浪たてばうかれ心に胡蝶とぶなり

○　神戸　松野みとり子
背の君の墓畔に立てる若き人の袖に安けく蝶のねむれる

○　秋田　三浦しよ子
美はしき花又花にあこかるゝ蝶の末こそあはれなりけり

○　相模　服部彌生子
眠る蝶花を見捨て菜の花の道行く人のあとにさきに舞ふ

○　伯耆　錦織よし子
蝶塚にさくらみたる夕まぐれそゞろ舞ひ來ぬ友蝶二つ

○　伯耆　錦織さち子
うらわかき松もひは澤に手枕のゆめとしもなき窓の蝶々

○　伯耆　錦織千代子
しろきときいろき蝶と妹背つれ欄にあそぶ靈構の庭

○　伯耆　錦織とみ子
札めぐる笠一つゝき花かげの地藏のかたに蝶の眠れる

○　神戸　足立ゑい子
春の野のうかれ心ははてぞなきとまると見えし蝶もとまらず

○　神戸　足立あさ子
春の野に舞くたびれて眠るかと見ればまた舞ふ蝶の花形

○　三重　北村みつ子
日當りに紙の蝶舞ひ三毛猫はあされ狂へる日ののどかなる

○　秋田　長谷川かなる子
美し名の胡蝶とあれて又の世は花より花に春を送らな

○　東京　鵜澤喜舞子
春の日は蝶の翅に夢にのせて花摘む袖にうたれて見はや

○　神戸　たか子
長閑なる日影のまとにうち見れば花たつれくる蝶二つ三つ

○　横濱　鈴木まつ子
このうへになかばさここそとおもふなり花菜にあそぶてふを眺めて

○　埼玉　松本文子
日あたりの椽に物縫ふ人妻に蝶の言ひ寄るあまた度かな

○　埼玉　前川光子
美しき蝶の女夫はひらひらと春の日れもすむつひあひつゝ

○　名古屋　熊澤かぎ子
夕をもまたの命としりながらここてふあそぶか花のその生に

○　越後　松永松葉子
紫のすみれ花ゆれこぼれたる露もにほひぬ胡蝶も舞ひぬ

○　須磨　有村とみ子
紅のはなに心も醉へるらんくるゝも知らで遊ぶ蝶かな

○　美濃　花岡靜子
歌いつゝ桑田堤に酒くめば蝶と散る花おぼろ夜の月

○　岩代　菅野和子
つかれては花のうてなにねむりつゝあかぬ胡蝶の羽衣の舞

○　東京　秋田とし子
絲洗ふ賤が乙女の美しき腕に蝶のたはむれつゝゆく

○　美濃　芳澤敏子
戀なりてそぞろはづかし若き世に二人が見たる胡蝶思ひぬ

○　東京　西村直子
黄金色のすゞな花さくやまはたはそてかへしてまふこてふかな

○　常陸　今泉磯千鳥子
草の葉に宿をもとめし蝶可愛や虹いづる待ちさまよひ出でし

○　美濃　芳野登代子
吾が友に送らむものとスケッチする菫の花に蝶はくるひぬ

○　美濃　梅田登子
吾れは今スケッチせむと摘み來にし菫の花に蝶はとまりぬ

○　美濃　梅田弘子
摘みかはし共にかざせし菫れ花慕ひて來たる蝶は綾なる

○　美濃　芳野富美子
黄金な　菜葉黄ろき菜の花にしとれの蝶は夢見ますかな

○　大連　武村るい子
いくちまちすゞなかなれる春風に袖ふりはへてまふこてふか那

○　東京　高野元子
咲にほふすゞなはたけに風ふけばこかれの色のこてふむれたつ

○　東京　河合清子
風に舞ふ雪かと見ればさくはなにむつれてあそふこてふなりけり

○　奈良　栗山高子
なの花の香をなつかしみ此朝げつかひの蝶のたはむれる哉

○　奈良　栗山健子
春雨にぬれて小蝶は我にはのしのひかきにぞしのひよりけり

○　岐阜　櫻井とら子
人も無き荒屋が門のくさむらになたれの咲きて蝶待ちわひぬ

○　岐阜　吉田まさ子
花まくられむるはそゝに蝶とびて浮世のそとにちご遊ぶなり

○　埼玉　横田秋子
春の野のつはな雫のつほすみれひとつ小蝶の舞出にけり

○　美濃　岡　武、子
ねむればと背よりおろせるをみな子の被布のたもとにつかれたり

○　美濃　杉山藤枝子
蝶遊ふ御堀渡りて九重の花訪ひまゐる白き蝶かな

○　美濃　杉山舟子
燈火に片羽焼かれしあはれ蝶のむくろ出て来ぬ朝のきよめに

○　美濃　吉田のぶ子
春の野の花なつかしみとふ蝶の羽風になびく我心かな

○　美濃　落合かぎ子
花の香に酔ひてやいれし蝶二つ衣袖かろげに風にゆられて

○　美濃　林こう子
いつしかと胡蝶の羽根やつかれけん菜の花の上に夢そむすへる

○　美濃　石田ふさ子
いたかれし君がかひなの羽根くろき蝶となるべき日をおづろかな

○　岐阜　山田はき子
蝶舞や王者の園の盛宴は三四日つゞきぬ花陰にして

○　美濃　加藤すゞゑ子
春の宮神は千人の胡蝶延舞はしめ給ふお伽噺や

○　岐阜　山田ゑい子
後前黄蝶白蝶飛び〳〵、菜花小路妹とし行けは

○　美濃　西村梅子
花の香にゑひてやれふるほとならしこしば垣れにとまるこてふは

○　美濃　加藤すゞ子
蝶とまれと云ひつれむれる背の子のもてるすみれによろ胡蝶かな

○　日向　江夏枝子
菜の花ののどけき春にさゞなみになをうれしけに蝶は舞ふなり

○　豊後　松田象子
わらはへの手さきのかれてあやうくも花の木陰に舞こてふかな

○　神戸　那美子
うつら〳〵胡蝶の夢や如何ならむ汽笛近鳴る鐵橋の上に

雲雀

天　岐阜　長濱關子

さかみなだ遠かすみして白帆みゆる
うまやぢ堤雲雀高なく

(評)一幅の畫を見るが如し

地　横須賀　柏原みな子

團居して開く饗餉の樂しさよ
雲雀啼き舞ふにひばりの野に

(評)物思ひなげなる、希望にみてる一むれの面わを春の光長閑にてらせるなるべし

人　岩代　岸野菊子

春の神の宴(うたげ)に侍して歌かたる
雲雀となりし夢を見しかな

(評)うつくしき夢をも見給ひしかな

秀逸　東京　高橋珍子

ひもゝさく菜の花畑朝ゆけば
聲ものとかにひばりなくなり

東京　千勝なく子

汽車は今鐵橋越えし大利根の
堤に落つる夕雲雀かな

東京　倉重千恵子

三日月の見ゆる空より落るかな
ひばりも今は啼き疲れけむ

伊賀　菊山かね子

たどる野は雲雀の聲に花の香に
浄土の光おもかげに見ゆ

埼玉　尾形久代子

臈たけき狩衣姿雲雀野に
笠かたふけて馬打たせ行く

埼玉　深谷千代子

城山の松は霞みて薄墨の
富士やゝ低し雲雀啼き啼く

松山　上原のぶ子

なにゝさはわかる雲雀か打霞む
空にはやとる野邊もあらぬを

岩代　岸野せい子

我せこと耕す畑のをちこちに
うたふ雲雀のうた長閑なり

越後　松永松葉子

春の日のうらうらかすむ雲の上に
心のどかになく雲雀かな

名古屋　熊澤かぎ子

朝日子のかげをあふぎてあかるらん
かすみのうちに雲雀なくなり

岩代　岸野常子

我せこと十畝の畑をたがやしぬ
うたふ雲雀にうたあはせはつゝ

美濃　傍島曉子

すみれ咲く野べを少女にまかせ置きて
大空高くなく雲雀かな

須磨　有村繁子

すゝなさく野邊は春風のどかにて
たそかれ空を雲雀なくなり

朝つく日にほふさくらの下かげを
なきて雲雀のいましたつなり
岩代　遠藤久子

麥刈の麥刈を呼ぶ聲消えて
雲雀高鳴く陸奥の里
岩代　樋口雪子

綠なす麥畑ナ里朝の風
雲雀啼く音に霧はれて行く
美濃　加藤里子

野つかさのすみれの床を立いでゝ
みそらにたかく雲雀なくなり
東京　中村千代子

うら〳〵と野末かすめる春の日に
こゝろひろくもなくひばりかな
東京　高野元子

糸ゆふもなびかぬ野への朝まだき
そらにあかりてなくひばりかな
東京　小島榮子

ほろ〳〵とつばき花ちる山かげの
かすむ朝日にひばりなくなり
東京　西村直子

あたゝかき椽にまろびて妹と
ひばりきくなり故郷の家
千葉　益子みさを子

きぬかはのきしに舟よぶ旅人の
笠をかすめてなく雲雀かな
下野　井上尚子

日は落ちて紫匂ふ夕月夜
ひばり鳴くなり天つみ空に
名古屋　中村浪子

里の子が麥笛ふきてかへりくる
夕山畑に鳴くひばりかな
埼玉　横田やな子

だゝすみて野中の道の石ぶみの
文字よみをればひばりなくなり
埼玉　横田秋子

相模 藤原下枝子

馬追て家路に歸る畑道の
ゆくてに落つる夕雲雀かな

新潟 岩本芳子

ひとこゑをそらにのこして春の野の
わさぢに落る夕ひばりかな

美濃 金森しやう子

春の野のすみれのとこをとくいでゝ
かすみの上になくひばりかな

美濃 長縄みの子

さらぬだにうきたつものを春の野の
かすみかくれに雲雀なくなり

美濃 杉山靜子

夕雲雀きゝつゝ廣き大木曾の
河原に立ちて白帆見るかな

美濃 西村梅子

けさもまた花くもりせる野つかさの
あたりのひばりこゑをやすめず

常陸 岡田萬子

紫の筑波つゝきの麥畑
春日長閑に鳴く雲雀かな

岐阜 芳翠敏子

うまやぢの美濃と近江の國さかひ
窓によりても聞く雲雀かな

岐阜 山田ゑい子

麥畑菜の花畑れんげ畑
雲雀鳴く家の母の戀しも

東京 平塚白百合子

菜の花の末に寺あり春の野邊
雲より落る夕雲雀のこゑ

愛知 荒木とみ子

雨はれて友と別るゝ村はづれ
夕日斜に雲雀なくなり

神戸 今西操子

長閑なる馬子歌續く街道の
霞隔てゝ雲雀啼くなり

相模 服部彌生子

石佛のゐねむりおよす永き日の
雲井遥に雲雀囀づる

甲

○ 京 能村けい子
舞ひ上りまひ下りつゝ野雲雀の聲ものどかよ菜の花の里

○ 青森 川合ひさ子
大空にひれもすあそひつかれてはあさちに落つる夕雲雀かな

○ 青森 川合りく子
青そらにうたふ雲雀のこゑきけばそゝろに勇む人のこゝろも

○ 大坂 木村春江子
我がおもひくすしくゆらぐ春の野のまひるの空をまふひばりかな

○ 濟國 宮成梓子
學笛もなにかおよはん春の野にうたとふひばりの妙のしらへは

○ 下野 高松雪子
長閑さを四方に告げんと高く〳〵かすみしのぎて雲雀なくらん

○ 河内 竹内敬子
そことなく川の流の音もして雲雀なく野に霞む長閑さ

○ 東京 松浦きよし子
里つゞく曠野の空に雨晴れて春日のどけく雲雀なくなり

○ 能登 栗倉葦子
春風の文使なりと友は云ひぬさへつりながら雲雀とふ見ゆ

○ 埼玉 香取うめ子
金色の光りを浴ひて雲の上に歌ひ興する夕雲雀かな

○ 埼玉 松本文子
天地の幸を買ひたる歌笛をつばさ事とや野雲雀の立つ

○ 東京 花野しづく子
花たはをこゝら造りて飾らむと妹の手とれば雲雀なくなり

○ 松山 田村多豆子
おほ空に雲のたては立ものと思ひあかりくなく雲雀かな

○ 越後 松水紫子
四年振一つ草屋の母訪へば父おもほゆる夕雲雀かな

○ 東京 松原岑子
むぎ畠のひなにこゝろのおかれてやかすめる空にひばり鳴くらむ

○ 岩代 菅野和子
春の野をいよ〳〵廣く眺むらむのどかにうたふあげひはりかな

○ 東京 秋田とし子
今日も子に別れてわかる小雲雀の涙にくもる朝月の影

○ 名古屋 木下鶴子
ひばりなくそらをあふきて思はすも ふみはづしけり野邊のほそ道

○ 美濃 花岡靜子
あたゝかう春雨やみし麥はたけ雲雀飛び啼く朝風の村

○ 甲府 鳳岡千代子
翅なき人の心も春の日はひはりと共に空にこそなれ

○ 常陸 今泉磯千鳥子
さみどりの地の世いでゝ日の神に懸行やつげむあげ雲雀かな

○ 美濃 梅田春子
春の野にむらさき匂ふ花菫雲雀はわれやの友となすらむ

○ 大連 武村留意子
すたちにし古巣わすれて夕ひはりはゝこさくのに聲の落くる

○ 東京 河合清子
明わたる野中のかすみ立出てゝはやくもそらになくひばりかな

○ 東京 吉岡鶴子
春ひさす野中の水にかげうつる雲のあたりにひはりなくなり

○ 豊後 松田衆子
賤の女が鍬うちおきてそら高くあがるひばりをうかれてぞ見る

○　　　　　　　　近江　石王かず子
ひろきがりみどり五寸の麥の波に青うたゞよふ雲雀子の歌

○　　　　　　　　東京　鵜澤喜舞子
わきも子と畑打居れば新墾のかなたの空に雲雀なくなり

○　　　　　　　　千葉　金子さと子
温泉に近き麥畑つゝきみち三里ひばりなくなり上つ毛の國

○　　　　　　　　神戸　田尻保代子
うなゐ子が雲雀の巣をやあらしけん空に鳴くれのあはれなるかな

○　　　　　　　　淸水町　田代糸子
菫つむうなゐばろりが謡うたとあはせて空に鳴くひばりかな

○　　　　　　　　名古屋　中村濱子
あたゝかき春の日あしもかたむきて麥生三里に雲雀おりきぬ

○　　　　　　　　伊賀　佐々木いすゞ子
天上の舞姫降るしるべしてかすめる空に鳴くひばりかも

○　　　　　　　　兵庫　湖東靜子
思きゝ雲井はるかにのぼりつゝひばりやいかに心ゆくらん

○　　　　　　　　兵庫　古東すみ子
夕ひばり近くに聲の落ち來るはひなを思ひてかへるなるらん

○　　　　　　　　相模　藤原下枝子
羨やましく君を扶けてさみどりの野邊に出れば雲雀啼くなり

○　　　　　　　　横須賀　渡邊比佐子
親せこと耕す麥の田面よりあかる雲雀の唄のうれしき

○　　　　　　　　岐阜　吉田まき子
春の朝まよ吹く風も長閑にて行野路近く雲雀なくなり

○　　　　　　　　奈良　栗山俊子
たそがれてかへるたゝすの此野へに聲かしましくなくひばりかな

○　　　　　　　　美濃　井上とも子
うすづきし入日に羽うらこがしつゝ高き御空に雲雀なく哉

○　　　　　　　　岐阜　山田はき子
天地のやさしき姫の御使の雲雀の唄を野邊にきくかな

○　　　　　　　　岐阜　後藤英子
啼き上る雲雀に歌を言づけむ君がはた織る白桃の家

○　　　　　　　　神奈川　渡邊比佐子
草萌る牧場を捨てゝ春の水唄ふ雲雀の影の美しき

○　　　　　　　　美濃　目島眞砂子
すみれつむ少女一群かへりゆきて野邊の夕映雲雀なくなり

○　　　　　　　　神戸　足立みい子
おのれより高く雲井にあかれとや雲雀の親も子を思ふらむ

○　　　　　　　　東京　青木たま子
おつるとは見えしひばりのいつしかに行へもしらぬ雲になくなり

○　　　　　　　　神戸　梶原京子
空高くあがる雲雀も落ち來らん丘の柳にかすむ夕月

○　　　　　　　　東京　神田けい子
日は落ちてむらさき匂ふ夕そらに舞のをさめとひばりなくなり

○　　　　　　　　兵庫　田淵ふじ子
見しやいつこかすみのよそにきえ失て　おもはぬ方に鳴ひばりかな

○　　　　　　　　大坂　小西まつ子
夕雲雀霞にあかる聲のしてゆめにも似たる春のそらかな

○　　　　　　　　神奈川　飯田榮子
ゆきくれし春の花野にやすらへば霞のなかに雲雀なくなり

○　　　　　　　　伯耆　錦織千代子
巡禮のやすらふかけに花ちりて春日のどかにひばりなくなり

○　　　　　　　　名古屋　中村ちよ子
少女子のすみれ摘みつゝ遊ぶ野の花野の床にひばりたつなり

○　　　　　　　　神戸　竹井花子
菫咲く野邊を遠近さまよへば春日長閑にひばり啼くなり

○　　　　　　　　秋田　伊藤光子
空高く立離れても夕雲雀子を思ひてや鳴き下りけり

○　　　　　　　　秋田　長谷川かなる子
白馬の背にして嫁く妹を美しとみつ雲雀啼く野邊

乙

○　日向　江夏わかゑ子
雲雀なくこゑをたづれてあちこちに走るも千草の花をふみつゝ

○　大阪　彌　健子
雲雀なく聲なつかしみすゞな畑はけ行く袖は淡黄なりけり

○　下總　高木美代子
大空にうかれ心の果もなき野邊の雲雀は落つる時あり

○　磐城　木幡きよ子
見せばやな都の人の寢覺にも雲雀鳴く野の里の朝げを

○　埼玉　前川光子
軒端にも長閑けき風や通ふらむ籠の雲雀のひた啼きに啼く

○　福井　小西花枝子
春の野に手籠もちたる少女等とみな仰ぎ見る雲雀の歌に

○　須磨　有村とみ子
雲にひゞく雲雀のこゑや木工かちりのよさけし野邊の一家

○　土佐　秋月廣江子
花や人ひとや花なる世を見つゝあがる雲雀にならんと思ふ

○　美濃　清川鋭子
少女等が花摘み遊ぶ春の野は雲雀の歌と暮れて行く哉

○　美濃　梅田芳子
君が身を案じつゝ行く青空にさゝやく如く雲雀なきけり

○　清水町　小栗捨子
開け行く國の榮えをほこりかに雲井はるけくひばりなくなり

○　奈良　栗山たか子
すみれ咲野邊の日かげはくれかれてあかるひばりの聲のかしまし

○　東京　松村とし子
遠近にひばりたつめるこらは見えでかすみにつゞく春の野べかな

○　名古屋　山根しげ子
足音に驚かれつゝ芝生より堅みたしても立つひはりかな

○　神戸　清水みす子
麥畑に巣をくむ雲雀上下に鳴き暮らしけりいとし子ゆゑに

○　美濃　酒向椿子
空高く鳴き轉りし雲雀すら夕べの鐘に巣に歸るかな

○　美濃　酒向椿子
大空の雲の中より若草の芝生におちくる夕ひばりかな

○　三重　北村みつ子
君か里雲雀に明けてわか里はのどかなるかな雲雀に暮れぬ

○　岐阜　櫻井とら子
人遠き谷のせまきに麥生もひばり安すらへ又巣こもりぬ

○　神田　小林春子
ほがらかにうたふひばりともろともに我もしたしき友とかたらむ

○　美濃　加藤すゞえ子
小松原乘物とめぬ雲雀男が姿みむとの姫がのぞみに

○　美濃　飾島みゆき子
天女めきし少女の群の野あそびにみ空の雲雀春を讃する

○　美濃　林こう子
空たかくかへるも知らずなく雲雀芝生の雛も待つらむものを

○　美濃　後藤よしゑ
大空に暮るゝも知らずなくひばり巣のねくら寢にしめらむ

○　美濃　落合かぎ子
のどけさをかすみの中になくひばり塵のうき世をよそにとやみん

○　東京　神谷てる子
すみれ野ののどけきそらのうす霞かすまぬこゑにひはりなくなり

○　美濃　杉山藤枝子
春くれは故郷戀し終日を衣縫ひつゝ雲雀をきく

○　美濃　西村きん子
窓にいてし麥生の中に巣くひたるひはり三つ四つはやかひわりぬ

○　山口　村上操子
大空にあかりあかりてなく雲雀それも夕は野にそかへれる

○一時はすみれもつます殘し置きぬひばりのひなや安すくねむれば　岐阜　遠山よの子

○歸り行く雁を慕ひて大空にこゑをあげつゝ鳴くひばりかな　神戸　足立あさ子

○鳥の代を籠にかゝげて夕雲雀こよひの夢やいかに見るらん　名古屋　不破きみ子

○八重霞羽風に切りてあげ雲雀春を雲井にうたひくらしつ　埼玉　高橋よし子

○雲雀なくや風なよらふく暖路に茅花ぬく子嘻々と戯る　秋田　三浦しゑ子

○ゆく末の望ゑかきてひとりゑむ野のあさもやにひばりおもしろき　伯耆　錦織とみ子

○おさなごをさかしてつかれやすらへは麥かき分てひばりおふ見ゆ　伯耆　錦織よし子

○今日もまた花ちる窓の小雲雀は曠野したふて悲しげに鳴く　東京　奈良八重子

○山の端に薄衣つくる有明の月より高く揚雲雀かな　名古屋　十文字華子

○あかつきの夢はやふれて窓おせば數も霞みて雲雀啼くなり　神戸　柴山あき子

○夕餉出來て背子を迎ふる門の邊に姿はわかてひばり落ちつゝ　神戸　松野みどり子

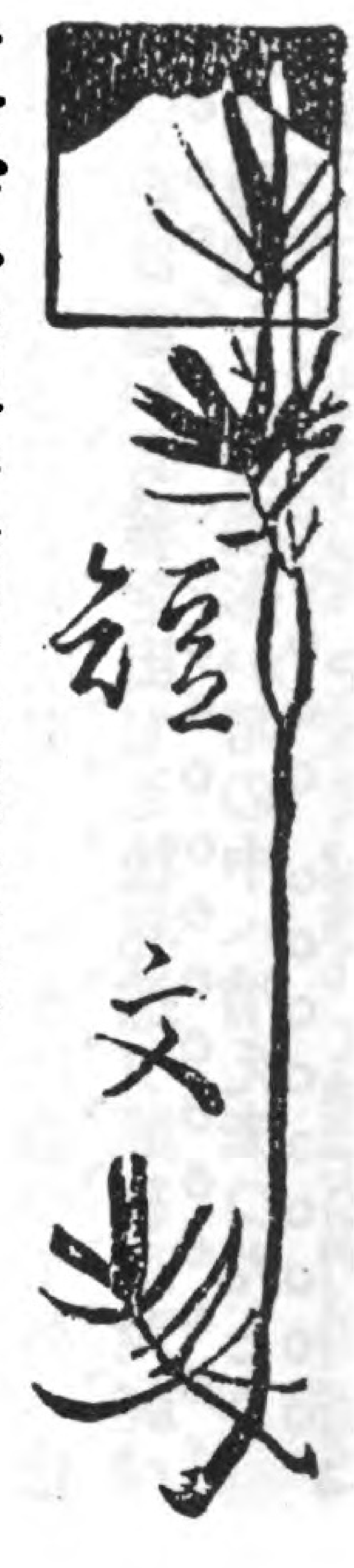
○春かすみ淺きて出つるやふ雲雀たのし野山をかけ遊ぶらん　秋田　三浦しよ子

○椽の上に小猫たにむる春の日に永きをかこちひばり鳴くなり　東京　諏訪すみ子

○夕されば雛を思うて親雲雀雲井より落つ春の野邊かな　下總　中川千鶴子

○おのれよりたかく雲井にあかれとやひばりの親も子をなしふらむ　神奈川　きみ子

○すみれつむ手をはやすめむ少女子のみ空にたかく雲雀ごゑして　廣島　鈴森きみ子



文學士鹽井雨江先生選

天

終列車　東京　奈良八重子

窓硝子がビリビリと音がして、淋しげに瓦斯燈があちらこちらについて居る八街の停車塲に、今し私を乘せた銚子行の終列車は、その歩みを止めた。外は木枯が闇の中を林から林へと吹き荒んで、或時は遠く去つたかと思ふと、又何處からともなく吹き起つて、硝子窓を襲うては、けたたましい音をさせる。私はショールの中に顏を埋めて、その音を聞いてをると、寒い荒涼とした冬の感が、身にひし／＼と迫つて來るやうに思はれる。

不意に入口の戸が開いて、廿四五の女が急しさうに入つて來た。さうして、入口に近い隅に座を占めて、風に亂れた髮をうるささうにかけ上げなが

ら、車内を見廻した、顔は白いといふよりはむしろ青い方で、細面の、眼の大きな、何處か病身らしい、それに何となく物淋しい様が、いたく私の好奇心を動かした。蒼白い片頰を灯影に見せて、東コートの膝も崩さず、兩袖をしつかと前に抱へて、寒さうにショールの中に頸を埋めてうつむいた様、時々苦しさうな咳をする様子を見ると、いまはしい肺病にでもかゝつてをるのではあるまいか。やがて發車の笛が聞えると、列車は又風の中を突進して行く。風を切る聲、車輪の響、窓にあたる風の音など聞きながら、私はいろ〳〵と小說的の空想を其婦人の上に馳せてをると、いつとはなしに、去年の秋肺病で死去つた友のことに及ぶ。髮の澤々とした、色の白い黒瞳勝な、美しい友の顔がありありと浮んで來る。

路傍の萩の花が半は咲いて、蟬の脫け殼に涼しい秋風が立ち初めた九月の上旬、友が肺を病んで七澤の温泉にあると聞いて、二里の道を車も借らず見舞うた折、『肺病にかゝつてはもう駄目よ、私あきらめて居るわ』と情なさうにいふ。『いゝえ肺病でも療らないとは限りませんわ、現にいくらも療つた人がありますもの、それに病氣は氣からと言ひますから、御力を落さずに精神さへ愉快にして、つまらぬことは考へなさらなければ、きつと早く療りませう』と慰めると『療りませうか？えゝ私きつと療るわ、又お正月には歌留多もとれるやうにね』と頰をうす紅に染めて喜んだその時の面影が思ひ出される。それから友の病の重つたこと、死んだ報知を受けた時のことから、死んだらどうなるだらう、もしか私が肺病にかゝつたとしたらなどと、とりとめのないことを、それからそれへと考へてをる中に、車は日向の停車場に著いた。外で驛夫が「日向！日向！」と列車のふちを呼んで行くと、後から風が吹いて來て、まるで其聲を吹き消して行く様にすさむ。夜が更けたので寂しさが一層さびしく感ぜられる。

彼の婦人はと見ると吃驚したやうに立つて外へ出た。私は窓から首を出して後見送つてをつたが、その纖細とした後影が暗の中へ消え去つたとき、何とも云へぬ淋しいやうな、哀れな様な感がした。

木枯は益々その威をたくましうしてゐる。

（評）才華も此處彼處にかゞやきて、よく整ひたる鐵路詠に敬すべし。寒く淋しき終列車中の感情も、よく寫されたり。

地

明星

埼玉　高橋とよ子

お寺の鐘が穩に和らかく響き渡ると、野も山も森もうつすりと黄昏れて、木の間がくれに見ゆる茅屋からは、夕餉を炊ぐ青白い烟が、ゆるやかに立ち登る。この平和な村のはづれを、帶のやうに流るゝ川の堤の上に、茫乎と佇んでゐる少年がある。年は八ツか九ツ位であらうか。浮世の冷たい風は、こんな小供の着物でさへ、容赦なく吹き千切つて、如月の梅も漸く蕾を破つたばかりの寒空に、情も薄い綿入一枚で、しかも縞目も分らぬつゞれ衣。

不幸の斧に刻まれた面に、心の窓とも云はれる目が、どんよりと涙の雲に濁つてゐる少年は、何となくつまらなさうな顏をしてゐたが、夕燒美はしく彩つた五色の旗雲の絶ゆる所、暗碧の空深く、暮の明星が、パッチリと清らかに目をあいたのを見て、

「やア、母やが出た、嬉しいな、どんなに俺待つたらう。」

と少年は急に元氣がついて、淋しい顏に花が咲いた。

「母や、いつ歸つて來るの、俺毎日此所へ來て待つてるんだ、お土産も何もいらないから、早く歸つてきておくんな、母や、ほんとうに何時歸つて來るの。」

と少年は涙を拭ひ、怨めしさうに明星を見つめる。

「秀ちやん」

と美しい女の聲、少年は不意に驚いて振り返へると、眞白な女の手が、自分の肩にかゝつてゐる。

「誰れかを待つてゐるの」

といつたのは、二十五六の美しい意氣な年増。

「あゝ吃驚した、鄉田の奥樣か……俺母やのくるのまつてるの。あれ彼所に笑つてる……あれが母やだつて、お婆ちやんがいつたんだもの……。」

と明星を指すいぢらしさ、奥樣はたまらず、ヒシと少年を抱きしめて、泣きに泣いた。

思へば、夫が戰死つた當時、實父は勿論、叔父や

叔母にまで、利害を説かれて、言ふことを聞いたのが、否、自分からも不利でないと思つて、此の子の家を出て、郷田へ嫁つたのが、さても、吾が身の罪であつた、浮世の塵には微塵も染まらぬ年頃であるのに、底深い不幸の淵に落したのは、誰れの罪でもない。自分はどうして、あの當時、あんなあさましい考へが出たのであらう。よし人の門に立てゝも、共に浮きもし沈みもしやうに、何の惡因緣で、わが血をわけた吾が子に、他人呼はりをさせ、其の上、こんな浮目を見せるのか。世間からは、郷田の奥樣とこそ立てられても、何で嬉しい事があらう。と、襦袢の袖で雫を拂へば、涙は更に湧くのである。

夜の幕は下りた。

「秀坊ヤ――イ」

と孫を呼ぶ聲。

(附評)戰後にありさうな人生の涙、思ひやられる。殊に、秀坊ヤーイと孫をよぶ聲には 限りなき涙がこもつて思ひやらるゝものがある。

人

野春雨

東京　神田けい子

見渡す限り、菜花の黄、麥浪の青さに連り、彼方の堤には紫の菫、此處の畦には紅の蓮花草、色と云ふ色を集めて描き出された極彩色の春の景、薄絹の樣な霞が棚引いて、向の岡も、野末の森も、さながら眠つたやう。胡蝶の舞、雲雀の歌、野にも山にも滿ち渡つてゐる。今日は花曇の匂やかな空。

菜の花の畦を行き盡して、楢や樫栗などの雜木林をぬけて、とある小川の岸に立つた時、向の麥生から舞ひ上る雲雀の行方を眺めるともなく、空を仰くと、今迄一面の薄曇であつた空の一方、鎭守の森の上に、渦を卷いた樣な黑雲がさわいで見える。雨かしら、雷ではあるまいか。枯葉や古根のの間から蘆の芽が茜色に吐いてる岸をつたつて、岡へ上らうと、朽ちてぐら〳〵する板橋を、やつとで渡ると、大粒の雨がポッポッ、黑雲は墨を流した樣に、漸々廣がつて行く。餅草嫁菜を一ぱい前垂に摘んで、ほこらしげに見える少女の群、土筆を兩手に握つて、數を爭つてる男子等も、吾と引かへて岡から下りて行つた。足もとの土筆二

三本拔くとたん、ざつと音がして、此度は稍細いのか降つて來た。中々止みさうもない。麓の野守の軒にかけてむと、今下りて行つた男の兒だらう、破れた穢い疊の上に、土筆をならべて數へてる。麥綠雨に濕ひて、色一しほ濃なる畦道のむかふに、さつきの少女の一群が走つて行く。昵と見てると漸々霞の奥へはいつて消えてしまつた。雨は次第に小降になつた。見渡す限り雜草青々として俄にのびたやう。まばらに續く灰色の家は黑づんで、山々は青く烟つてをる。橋を渡らずに、小川に添うて下ると、稍廣い川と合する處へ出た。藁葺の農家が二つ並んで、家の内には機杼の響せはしきに引きかへ、水車はゆる〳〵廻つて、散りかゝつた岸の桃に、小舟か繫いである。そばにかけてある四手網に、薄紅の落花點々として見えるのは、今の雨のしわざではあるまいか。

（附評）優美なる敍景、まさにこれ有聲の畫。

秀逸

◎◎靜けき春　　下野　井上尙子

何と云ふ靜な日であらう。烟のやうな雨は音もない。ぼたり〳〵と椿が落ちる。鳩の羽も打ちしめつたか、羽音が重々しい。櫻の枝に雀が二三羽とび立つ羽風に、花片が池の面におちた。緋鯉が浮んで水泡を吐く。右近櫻が盛りの隣の垣をもれてくる尺八の音が、ゆるく、強く、いひしらぬ寂靜をこめて、身に響く。室の中は陰氣で、頭を押へられたやう、崩れさうな床の白桃は、友が美しい歌を添へて私が聊かの慰めを得れば滿足であると返歌を望んで送られたもの。友は私が慰めをうくると思ふのであらう。衣縫ふ手もたゆたひがちで、おもはじと思へばなほさら思ひは思ひに續いて、空想は空想を生んで、果てもなく廣ごり、恰も大そらにただよふくものやう。心のいとの亂れはげしうまとめんすべもない今の私、望み通りに調ふ日はいつであらう。世にときめいて咲き出る時がなく、埋れ果てゝも恨はない筈の、もとより色も香もない野の名なしぐさとはおもふけれど、私も人の子、身、相應の望がある。人心によるだらうが、私は此のしづけき春の夕を

秋にも劣らぬ寂寞を感じた。世も人も春と賑ふけれど、私は春とは思はれぬ、おもひにふけるまに、彼方の室に燈火が付いた、後の窓を押せば寺の櫻ばかりが、うす暗い中に、はつきりと見ゆる。不意に犬が鳴いたので驚た刹那、夕ぐれの鐘が、音もしめつて春雨の中を響いてくる。鐘つく主はかの愛らしい雛僧か。寺の櫻は今しきりに散つて居るだらう。

（雨評）春雨音なきの窓下、少女が春愁のながめ、何處となく詩趣ある文である。

○◎花散る家　三河　橘多賀子

長き恨を枝に止めた繪凧の姿も雨に瘦せはて、骨ばかりが花に淋しう殘つて見ゆる如月の末、靜かな丘の家に匂うた紅梅白梅が、はやホロ〳〵とこぼれ初める。

古い母家の軒なれば、咲いた紅梅白梅の樹も皆古く、丘の下まで咲きつゞいて、野に行く徑の、所せく散り亂れては、駒の脊にたゆたふ武夫は無けれど、花の奥より洩る丶機織る優しい人の歌聲に、笠かたむけて振仰ぐ旅人の胸には、花やかな想像も湧くのであろう。

長閑に午を歌ふ白鷄の群れを追うて、梅林の中を丘に辿ると、花より明けて花に暮れ行く茅屋の軒に、白髮の媼が、拍子輕らな梭の音に合せて、長閑な山の歌を巧に唱うて居る。

靜かな境、靜かな家、温く柔い春の光りは、その母家の土壁の内を、花やかに照らし、や丶疎なる花の梢を透いて、桔梗色に擴がつた空を流る丶白雲も見える。もし散り行く花の香を止めて、春の氣みなぎる空に浮ばゞ、其所に吹くとも見えぬ春風がさら浪うつて、幽ないさ丶川と流れて居るのを見るであろう。

あ丶夢のふる里、花散る家、妾は十年昔に別れた乳母を思ふ毎に、かの梅咲く丘の家を、いとど懐しく思ふのである。

（雨評）優美なる詩趣はげに忘られがたき花散る家に候はむ。筆今少し銳鍊のありたき心地す。

◎理想　三重　北村みつ子

「一樣、それは眞實でござんすか。」いと落ちつける袈裟の前は、凜として聲も振ふ。

『眞實なら、嬉れしうござんする、さりとても、人目の關は、如何やうに遊ばすやら、女だてらの細い心は、さて氣にかゝる事でござんす。』紅芙蓉、雨にしをるゝ樣にも似て、艶にして凜たり。遠藤思はずもうなだれた。勇に於ては當世の荒武者、無ぞり太刀の手前もある。『ふ、して御前は？』

『ほゝ。』笑つた。深紅の口唇もるゝ齒の白さ。

『ほゝ、樣でもない事。』

『何？』きつとなる。『御前、何とおぢやる。』

『さればでござんす。樣でもないと申したは、契りは易いものながら、二つ眼のある鬼がござんす。さあ、ないと申したはこゝの事、同じ花でも刺あつては、何時さゝれるか知れませぬ。樣も男なら、ほゝ、刺とる刄もござんしやう。』

『如何にも、御前は賢女ぢや。』

美くしとあかず眺めた。ちやりんと鳴つた大刀の男々しさ、さて、遠藤もなか〳〵苦しい。

『賢女ぢやが御前、いかにして打つ。』

『されば、高うは云はれませぬ。樣！人目の關の戀ころも、耳でござんす。』

『えゝ。』耳よせる。花蕾の口元、うるみを持つた涼しい眼、袈裟の小聲は聞き取れなかつた。髯むくつけき頬にも浮ぶ笑みの、流石にいたく血は狂ふ。

遠藤はほつとした。

『む、御前よいか？』

『ようござんす。』

人知れず暗涙を飲んだ。

✿ ✿ ✿ ✿ ✿

こゝ迄、妾は話しますともう、秋子さんは赤く眼を泣き張らして、熱い涙がぼろ〳〵する。

『秋子さん。』

『靜江さん。』二人は堅く手を握つて『妾等が理想の人よ。ね、きつと……』

『はあ、きつと。』

秋子さんと妾は、何時でもかう云ふのが常の事で、ある時、二人はかう云つたのでした。それは、おぼろに霞んだ春の宵、秋子さんは、『おぼろ月よ、ねえ靜江さん。』『袈裟なの？』

『はあ、袈裟なのよ。袈裟の殺された晩なの。』

『ですね。』
袈裟は笑つてるでせうかしら?

（雨評）意匠も筆も工夫せられたるところは、面白いが、後半何んとなうもの足らぬ心地がする

◎斜陽　越後　松永松葉子

山畑二畝の麥畑、耕し終つて、腰を起すと、長閑な春の日も、今は西に傾いて、二人の姿は麥の波に砕かれて居る。「あなた、斜陽つてこんな時。」「たれから習つたね……。」「あら又からかひなすつて。」一日の仕事の終つたのが嬉しく、土鋤を肩に家路へ歩み出した。これが秋の道であつたら、霜を踏むべきであらうが、春の若草踏むも實に惜しい程。雲井の雲雀も追々下りて來る。

胡蝶は、永い一日を、花から花にとびまはつても、尙飽きたらぬかしら。花と胡蝶、よい配合だ。春の夜、幾代を契り結んで、花にやとる胡蝶は、如何なる夢を結ぶかしら。私花となつたら胡蝶となつたら、否否胡蝶の命をつなぐ露となりたい、それも春の露である。

誰が摘みこぼしたか土筆と、菫が、泥にまみれて居る。若し私が手に取る者が、鍬でなく、筆であつたら、これに對して、急度詩を得るのであらう。併し私は百姓娘、鍬や鎌を持つは自己の職務、田園生活が趣味がおほい。二人はかうやつて、清い空氣を呼吸して歩いて居る。人間と塵埃とが、花の領土を迫害して居る樣な景色を見る人に比して多大の幸福であるよ。都人が牛馬に等しいと思つたとて。

一日若草野邊に放たれた牛が、のそり〳〵牧童におはれてくる。荷馬は怨めしさうに急ぐ。太陽は彌西へ傾く。空は種々に彩色せられた。繪筆とる身になれて居つたら、腕一杯に寫さうが……只美くしいと眺め入つて居る。草屋の方を見ると、風呂の烟か、夕めし炊く烟か森からゆつたり登る。妾等は早や河岸にまで來て居つた。糸柳は水に泣たれて、若い娘が洗ひ髮して居るらしい。さあ鍬を洗はうと、春の水に土を落す。一寸冷い。夕榮の空の色は水に映じて居る。柳株に川せみが一羽、目をきよろ〳〵させてゐたが、水音に驚いて、柳の影へつつとかくれた。

水は流れてやまぬ。誰が永き春の日のすさびか、櫻の蕾二つのせた笹船、一つ流れて來た……私なども昔は笹船流して遊んだ。幼い折がなつかしく思ひ出される。鍬は奇麗になつた。手足の土も落した。汗は入浴して洗はう。桃の木かけの風呂入りかげんかよからう「一浴して、そこから間近い臺所、膳も出て大きな椀には麥飯も高くもられ、二三種の河魚それに香の物[illegible]實においしい二合の酒に父は笑ひ興しなさるし、母もそれに歌を添へられる，私等の家庭にはいつも暖い春風が吹きまはつてゐます、たとへ麥飯でも舌打ちせられる」かう考へると、すいた腹が益々すいてくる。小屋の牛も窓から頭をさしのはして待て居るだらう。父母は尙今御まちでせう。しづくのたれる鍬を肩にして、樂園たるわか家の門まで來た。秋月寺の暮鐘こそ霞の奥から響きくれ……斜陽は最後のうつくしさを表して、二人をあかく照す……心はたのしい團らんのうれしさに滿ちて居る。

（雨評）平和なる田園に可憐なる 新夫婦のさま、羨ましう讀み申して候

◎卒業　石川　河村白合百子

お、もう卒業式。思へば、四年に餘る此の長い年月、何をして過して來たであらう！毎日學校へ來て、どれだけの事を學んだであらう！考へて見ると、實に何だか物足りぬ心地がする。只一口に四年と云へば、何ほどでもないが、一日〳〵と積んで、今日になつたのを思へば、實に長い間である。其の間、夏でも冬でも、朝は早くから、我事の樣に、暑くはないか苦しいことはないかと、何から何まで氣を付けて下すつた兩親の惠ほんとに思つても勿體ない程である。こんなにして、漸々卒業するまでになつた私、これからは何をして、此の恩に報いたら宜いのでしやう。斯う思ふ後から、皆樣が進んで、上の學校へいらつしやると聞けば同じ血は持つてゐる私、やつぱり皆樣の樣に紫袴胸高に、女學生生活をして見たくないこともない。否ほんとはして見たくて堪まらなくなる。ですが、私は其の樣な身分では御座いませぬ。人は身分相應と云ふことが御座います。それに、小學と云つても、高等まで出してもらつた私　虛榮心を增長

させよとて敎はつた學問ではありませぬ。此の樣な望の起つた時、其れを抑へるだけの力を、養ふために、學んだ學問です。私はやつぱり、此まゝ父母の手傳をする樣に生れて來たのです。何も學問する許りが務ではありませぬ。私は私で、皆樣が錦を飾つて御歸りになるときは、やがて此田舍で立派に成功して、御目にかける時で御座います道は違つても目的は一つで御座いませうと、之れは私の級でも最も才媛の聞えの高い御方の皆樣が、學校の休み時間、ストーブの廻りで、將來の希望などを御話しなすつた後で、ひそかに私に云はれたことで御座います。」

(閲評)平凡のやうではあるが、心情のこもつて居るところがやさしい。

◎鈴の音　東京　檜皮興志子

新聞配達の鈴の音は、中々威勢のよいものである。たまたま朝寢をすると、學校へ遲參するなと云ふ樣に響いて、夢の中からよび起してくれるのも、これである。

こんもりと茂た杉木立にかこまれた氏神の社の前に下がつて居る大きな鈴、赤白のよつた長いきれで、其の鈴を一つふると、低い淋しい音をたてる。願のある身で、この鈴をふると、陽氣なところのない、その音は丁度神樣の御聲とも聞えるであらうか。

一週間前から飼ひ始めた玉の、赤いよだれ掛に、小さい鈴をつけてやつた。玉は愛嬌もので、たれにでもじやれるので夜のまどゐの時などは、可愛げな鈴のねの、たえまがない。小さい子の木履の鈴音は、そのおぼつかない足どりにまかせてなるところが、又なく可愛らしい。自分も小さい折り、親類から戴いた木履を、うれしさのあまり、時々出しては、そつと疊の上ではいて、裏に附たすゞを、ならして見た事があつた。

いつもはわづかな一時間も、お留守居となると、中々長い。時計の音ばかり、靜かな室にひゞいて、妹も弟も常ほど話がはづまぬ。もしやと思た下駄の音は、横町できえ、今度はと思た車は、家の前を走り去つて、いよ〳〵心細くなる折から、玄關に鈴のおと。と同時に、みなほゝゑんだ。中にも

涙ぐんで居た妹には、何よりもうれしかつたと見え、よろこびの色は顔にあふれて、燈火よりさきに、玄關に母を馳せ迎へた。

（雨評）意匠は一寸面白い。感情想像修辭は今一いきの文である。

◎如月の一夜　能登　栗倉すみれ

けさより降り出でし如月の雨は、未だ晴れやらず。一人居の此小窓にも音づれて、何となう佗しき心地こそすれ。けさ旅立ち給ひし背の君は、如何にか濡れ玉ひし。今宵は花瀬の里に宿り玉ふ筈なり。嘸ぞ疲れ給ひて、今頃は美しき夢結び給ふらむ。さるにても、戀しき故鄕の父母や如何に。歌がるた遊び興未だ盡きざる去んぬる日、遠く離れし此處、知らぬ家庭の人となりてより、み情厚き御舅姑様、將たみ優しき良人の君によりて、僅かに慰められつ、さあれ、情に脆き涙多き我女性の身として、折節は、そのかみ偲ばれて、少女時代のなつかしく、田舍は平和なり長閑なり氣樂なり將た詩趣に富めりと日頃愛でゐたりしも、日をふるまゝに、賑しき故鄕のなか〳〵に忘れ難く、飛ぶ鳥に、流るゝ雲に想ひを乘せて、幾度か故山の空仰ぎけむ。ましてや、背の君在まさぬ今宵如きをや。文机の上には、先つ日屆きし實家よりの玉章あり。今更の如く讀みゆけば、山鳥の尾の長々しう認められしみ訓へも、しみ〴〵と嬉しう、何の露か一滴二滴字を濡しつ。（以上は、父が滿腔の愛と誠とを以て申進じ候也、賢き御身にしあれば、かゝる敎へはとくに知られてならんとは存じ候へ共、良きが上にもよかれかしとの父が婆心にて候。宜敷〳〵肝銘下されて貞操なる良妻のモデルたらん事をこそ心掛下され度……天然痘流行の折柄自愛下され度念じ居るにて候ぞや。——如月のはじめ、——もと御身が書齋たりし六疊の部屋にて、母に代りて父より——愛のすべてを濺げるすみれ子どのへ。）我は遂に泣きぬ、聲を忍びて面伏せたり。嗚、父上様!! 母上様!! 我は健やかなり、ゆめみ心にな懸け給ひそ。親より賜はりし此身、夫に捧げし此身、つゆ怠りは申すまじ。あはれ、我も人の子たるものを、離るゝ五里のなつかしの地に、寸時も忘れず、此身の幸福と、此

身の健康とをのみ祈り居玉ふ父母君のみ情けに對しても、など女の道踏み違やして、村人に笑はれてよかるべしやは、我は堅う堅う心に誓ひつ、オ、さても、夜はいたく更けたるらし、舅上樣は未だ寢ね玉はぬにや、折々は灰吹き叩き給ふ音のきこゆる。

（附評）心情はやさしう思ひやらるゝが、瑕がなほ申し分が多い。

○『まゝごと』

岩代　樋口雪子

「俊チヤーンー」と前の竹籔の椿の花が散り敷いてゐる曲坂を、跳れながら、隣の清ちやんが呼びに來ました。俊子は床の中から、

「ハアーイ」

ひつそりした家の内から、突如に高聲を出したので、

「俊は何だれ、そんなに大きい聲を出して」

と臺所の母さんにしかられた。お爺さんも目を覺まして、

「エライ寒い朝だに、今すこし寢てなれといふに。」

俊子は雨戸を一枚繰つて、飛ぶ樣に出ていつた。

近所では花屋敷と云つて、東風が門の柳を戰す頃から、落花が小流に堰を作る頃までは、鶯が鳴いて居ります。俊ちやんの家は[illegible]であるから、村でも一番えらい。春の光は麗かに照して、朝

餉の竈の煙が、ずん／＼天に昇つて行きます。今朝も早くから、鶯が鳴いて居るので、二人は椿の花輪を作りながら、仲善く遊んでゐます。清ちやんが玉の樣な聲で、春の彌生を唄ひ出すと、鶯がハタと鳴きやめた。その時、縁端の障子が、サツと啓いて、お婆さんが、

「サア／＼、清坊も俊も、こつちに來るだよ、好いものやるから。」

二人は駈け出して、「お婆さんお早う」つて云ひますと、お婆さんは、二人の頭をなでてるまねをして、

「清坊も俊もまだ顔を洗はないの、りう／＼大きい手をして、いゝかの、仲よく遊ぶだよ。暖くなつたら、お寺に連れてゆくからの……」

二人は、お婆さんが袂の中から、一つぱい出して下れた落花生を、兩手に持ちながら、行つてしまつた。

日が高くなりたので、あちらでもこちでも、鶯が鳴く。咲き殘りの梅の香りがプンと匂ふ。

「清ちやんは父さんれ」「私は母さんで、この人形は唯にしようれ」

「春坊にしたら」「そう／＼」椿の葉のお皿に、梅の花のお魚、松の葉に赤い南天の實をつけた立派な御座敷が出來ました。

「父さん、春が泣きますから、だまして下さい。私は御飯の用意をしますから。」

人形を父さんにやつて、俊ちやんは御料理が初まつた、土をけづつた御飯に、落花生のお菜で。

長閑な春の日を飛び出した鶏が、柿の木の上で羽を光らせて、カーと一聲鳴いた。餅をかついた五作は、ニロ／＼笑つて行きました。その時、母さんが縁端から、

「清チヤンも俊坊もご飯だよ」

「清チヤンおよばれよ」と、二人は手をとつて、いつてしまいました。春の日は高くなつて、あちらにもこちらにも、鶯の聲が賑かになりました。」

(評)前段は面白いが、中ごろより後が、面白くない。

、、、○朧の夜あるき　横須賀　渡邊比佐子

花に曇つたのかしら、今山の端を離れた滿月が、丁度吉野紙を冠つた様な光り。

鮮な門構の家から、柳を分けて、女が出て行つた。すると、今度は横町からイナセな都々逸が聞えた、かと思ふと、ツッ掛け草履の音を殘して、闇の中に消えた。自分は右に曲つて左りに折れた。[illegible]遠しい聲がする。其れは魚市場なのであつた。カンテラの油煙が潮霧を染めて、一入餅てゐる様な聲がする。舷を覗くと、皆んな白魚ばかり、明日が待たれる、通り過ぎても、まだ嬉しい。ツッと向ふを見ると、晒布を曳いたかと思はるゝ、それが小川で、近くなると、微に波を立つてゐる、其影が（かしこ）の文字の様に見えて流れる。あゝ、何んと云ふ優しい水だことと、こんなことを思ひながら、モー橋を渡つてゐる。目の前に富士が進んで來る。銀の様。思はず仰向くと、花響が肩を滑つて、下駄に囁まれた。

向ふから、音の緩い下駄の音が、見える様に聞える。ヤッパリ女丸髷姿に吾妻コート、自分を覗きながら行き過ぎた。

四邊は靜か。見返ると、製絨工場の煙りが高く、黒い腕を見せてゐる。なんとも薄い月が、亦包まれた。下駄の音はモー遠い、けれども、そこの二階から、琵琶歌が微に洩れてゐる。確かに石童丸……の様。をしい事、聲ばかり、音が聞えない、ほしい様な夜である。

(評)細の文は、優美なるけしきを洒落にうつす事を、頗りと心がけらるゝやうであるが、作に對ふ時の情を、今少ししんみりと動かすやうにせらるゝ事が大切である、それでなくては、文章が輕くなつて、深く人を動かす事が出來ませぬ。

、、、○我が境遇　東京　諏訪すゑ子

母の無い俊坊は、自分を母親の様に思つて懐いて、今夜も虫が知らすか、姉ちやんに離れるのは否だ姉ちやん何處へも行ッては否だと言ひ乍ら、我手を取つて眠つてしまつた。ナヽ、可愛らしいいとしい俊坊を、如何して置いて、東京等へ行きたいであらう？……是も運命……妹は先程伯母が使に出した。逢つては別れが辛いであらうから……早く今夜の終列車で御出でと……ア、思へば〱、此の可憐の俊坊に別れなけりや。ナヽ、俊坊や、姉ちやんは之から東京へ行くのよ。後で泣かずにね……お伯母さんの云ふ事を、よく聞くのですよと、心に云つて立ち上る折り、どんな夢に追はれてるのか、マー罪の無い、ニコ〱して……何にも知らないで……伯母は荷物を門口に置いて……早くおしよ、起きるといけないからさ……とせき立てられて……只々出づるは熱涙……此處は福島の片邊り、落葉に埋れし墓地には、亡き人の魂も凍らん計り、白う照る月を背に土新らしき奥津城の前にぬかづきて「お父様、お母様、私は是から東京へ參ります。お二方からお預りした文子や俊坊に、別れて參りたくは御座いませんが……事情あつて行かなければ成りませぬ。何卒いとしい二人の上を御保護下さい……では、當分御暇れ致されませぬ故、左様なら……と手を合せ……名殘つきせぬ離別の露の落ちしはいかな、いつの世迄も、凍らば永久に溶けぬらん。後に心前には進まぬ歩み、たど〱と……見送る人は離れとても無けれど、かげ乍ら別るゝ心のつらさ。停車場に至れば、最早發車の十分程もなし。ピー……汽笛一聲、車は我身を載せて、進き〱東京へ走りぬ。アヽ夢安らけき俊坊の醒めての後のいとし心、千々に亂るゝ姉の心や、いかに〱。

(評)心情はきこえたれど、筆の練熟が足らぬ。

、、〇亡友を思ひて

名古屋　中村奈美子

さはれ、妾の胸、あゝ曇り。妾が小さき此の胸の曇り、あゝ、何れの月日來りて、消ゆるであらう？

月よ、妾が胸の曇りに泣きしか。花よ、妾が胸の痛みに動きしか。白梅の姿いたう痩せて、風なきにひら〱と散る花瓣二片三片。梅が枝にかゝる月影、朧に霞み渡りぬ。あゝ、此の月を見るたびに、妾の小さき此の胸、曇りぬ痛みぬ。

あはれ、友は何處に妾を慕へるか、涙の日も數へ來つれば、早〱四十九日。おゝそれよ、今日は友の命日、さらば心ばかりの手向に、亡き友の靈を慰めむ、弔はむとて、新らしき水、香ある花を手折りて、かたみの新墓に。

思ひ出すだにいと哀れ。心あへるがまゝに、姉とし慕ひ、妹と呼ばれ、雲雀なく春の花野に、霞を分けて繪筆とりつゝ、胡蝶の夢を驚かし。夏や軒端に蚊遣焚きつゝ、けむたきとて、互に目をこすり、果ては里川の畔に螢狩して、秋月冴やかなる夕べ、露おく八千草を踏みしだき松虫鈴虫の音を聞き。霜繁き冬の日、互に炬燵に倚りし其の友、あゝ今やなし。

あはれ悲し、あはれ共の友！　今や此の新墓の下に長き眠りにつきてあるなり。今この靈を慰むべき送りものや、あはれこの花、この水、あゝ果敢なし。呼べど來たらず、語れど答へず、小さきこの胸砕けむばかりぞ痛む。痛む胸おさへつゝ、空を見上ぐれば、朧の月に歸る雁の聲、哀れいと深し。

、、〇病床にて

常陸　今泉磯千鳥

「私は何故から親不孝なんか知らと、一昨々晩の事を思ひ出しまして、泣きました。「芳や芳ちやんや！最早十二時過ぎですよ！早くお寢みなさい、夜そんなに遲くまで夜更しするのは、第一身體に毒ですよ、何書いて居るのか知れないけれども、又明日と言ふ手の附かない日があるんぢやないか……さア早くお寢みなさい！と、かうお母樣が仰言つた時、私は何故「只今終ひますからと言つたのに、何うして筆を置かなかつたんでせう！そして、二度目に「まあ、未だお寢みでないの！本當に戯談ぢやありませぬよ！お母樣、もう風邪引いたつて、知りませぬよ」と仰言つた時も、私は何故急いで終はなかつたんでせう……今日は四日、明日は〆切であるけれども……又た來月と言ふ日があるのに……あゝ、其の時急いで終まへば、此樣に風邪を引かなくつても濟むし、お母樣にもあんなに心配させずにすむを、……あゝ、私は惡かつた、もう決してお母樣の仰言る事にはそむくまい。お母樣の仰言る事には、決して無理はないのだ」と、私はしみ〱と今迄の事を悔いて泣きました。フトがいまきに手をふれて見ますと、泉とせきくる涙に濕つてビツシヤヨリ。「オゝ氣持の惡い事と、後へ少しすしやりますと襖がスーと開きまして、柔しいお母樣の聲。「お飯、お粥でもしましようか？オヤ〱又何所か痛むの、目にそんなに涙をためて……おゝ大した熱だ事、それは屹度寐て許り居るからだよ、さア少し起きてお覽なさい！」と私の手を取つて起して下さる。「オゝ、此樣に髮が亂れて！」と言はれて、一寸ふれて見ましたが、私は急に悲しくなつて、泣き伏しました。ついでに頰の邊りもさすつて見ましたが、ズーと肉がこけて……その頰こそ見えませぬか、やつれた姿が目にあり〱と映つて來ます。私は猶もいろ〱の事を想ひ浮べながら伏しつゝあるのです、頭は亂れ亂れて、何物もありませぬ。只あるのはお母樣のお言葉のみ……私はそれを操りかへし操りかへして泣きました。

（兩評）一寸面白い意匠ではあるが、筆がなほたど〱しい。

、、

○觀劇感　岩代　菅野和子

妾の母は、背堅氣の、何事につけても、當世思想の融和といふ事が望まれない。若し自分の主義を飽迄主張するものなら、僅かに、女學校卒業の通弊!! 御轉婆!! の一言で凹まされて了ふ。いつも「それだからお前を……」を言はれぬうち、詫びないと、御機嫌がわるい。然し私は、慈愛深き母親に抵抗しやうとはせぬ。それに、何の爲か、芝居ときたら、絶對に厭嫌して、恰で蛇蝎視して居られる。私は其子に似ず、幼少から大好きである。芝居があくと、お友達は朝の挨拶の冒頭に「それ!! あなたの好きなもの……」「來てよ」背中叩かれ、深く考へ過ぎて、笑はるゝ事さへあるのです。その代り、脇見もふらず、熱心に見て來る事は、他の人のと見解が違つて居ると自覺してゐます。

此度妾の町に、田舍で大評判の志村一座が興行した。久しく見なかつたので、母に懇願した。

隨分芝居については、母と爭論した事もある。特に新劇についてである。舊劇については、單に「芝居など馬鹿がして、利口が見る物、あんなつまらぬ」と排斥する位の所。新劇ときたら、人格品性論など持出して、なかなかきかぬ。私は母さんとの間に、反目が起つてはならぬから、「する人が不德だから、狂言や感化の方面をけなしては、非道いでせう」と言放して置いた。恰度けふは隣の靜ちやんが誘ひに來て吳れたので、一寸の機に許された。

其夜の狂言は「嫁が淵」

村民の敬愛を受けし小學教師矢上の妹おりかは、無慈悲極まる豪農井原代議士、子爵招待會の座配に賴まれ、姫娘の身となり、唯一人の兄に申譯たゝず、嫁が淵に投身を企て、人に助けられて、妾となり居る所を、落ぶれたる兄と邂逅する筋なるが、其繁累より金満家の裡面をうつし、友愛の眞を穿ち、下宿屋の野心、佞人の魂膽を畫き、終局を憤怨奮怒をすてゝ、理想の親睦平和に結びつけたのであつた。

彼等俳優、人格零な輩の演するものとしても、幾回泣かせられたか判らむ、學校修身教訓以上と思ふ。善人、惡人、不境遇者の因果應報の直觀教授である。男の方々の、登場人物に對する評罵は、眞に痛快でありました。

觀者のうちには僅かに、これと同じ性行の人があるとすれば、どんな陰險家も、諂諛者も、邪惡の人も良心に恥ればならぬ。これに依つて幾分家庭の改良、社會教育の一法となるであらうと思はれる。

或日、母さんに「嫁が淵」といふお話をしてあげたら、たいそー感動せられ、妾の下手な話手に、勿體なくも、暗涙を注がれた。「這麼話などこで知った」と申されたから、芝居の筋の事を答へると、「今度一遍見よう子」と被仰られた、せち辛い世の多くの人は、あまり眞の慈悲者もなささうだ。それらの人の反省と感化とは、芝居に依てなしうると思はれる。

（雨評）女子の筆としては、少しく溫和を欠いて居る。

○我が里　岩代　樹口雪子

若駒の嘶く陸奥は、私の鄕國です。春なれば、ホツト滿籟した吾妻の足下から東へ五里、下流は櫻淵といつて、銀糸の様な川が一條あります。それに、その流に添うて、若木櫻が幾千本といふ程植ゑられてあり。淸い水の底には、落花を追うてゆく若鮎が數へられる程です。月の輪から水上を眺めると、それはまるで錦繪のやうです。私の產れた村は、極く小さな山里で、洋服を着て居るのは、學校の先生と巡査ばかりです。勿論庇髮に結つたなどは、餘程のお轉婆でなくてはありませぬ。しかし、私の村には、都の人や他の人にまけない樂園があります。それは、村の眞中の丘にある、何寺といふので、三里も聞えると

いふ大釣鐘があります。私の村ばかりでなく、その近邊の百性家は、皆この釣鐘の音に起き、その音に床を延べるのであります。それだから、紅葉に埋れた秋の末にも、雪に閉ざされた冬の晨も、淋しいことなどはありませぬ。

菜の花曇に暮れる春の夕、ポットリ明ける夏の晨も、細い夢の様な月が殘る秋の暮も、鳴が鳴き出す冬の寒夜も、撞き出す鐘の音は、いつも微かな音であります。始めは強く、終はかすかに絲の如く、野越え山越え、奥の奥の山谿が家までも、響けて行くのです。その音が、また何とも云へない古寂びた神々しい響で、ゴーンと響いてくると、何にかも忘れてしまいます。

お寺には、古い鐘樓と、鐘つくお僧さんと、一人娘のお美枝さんとが居ります。木蓮がよく咲いて居ります。鐘は大抵お僧さんが撞きますが、たまには十六のお美枝さんが撞くことがあります。背錆びたやさしい音を出すので、あゝ、美枝さんだれと、私は判斷します。しかし五十里を隔てる東の人に撞かるゝ鐘の音は、あまりにかすかなのです「完」

（選評）言はんとせらるる意は面白いが、詞といひまはしが、まだ活き足らぬ。

〇一夜の感　東京　佐藤堂計子

寒中の夜は更けて、萬籟みな靜まつてから、床についた吾は、徐に思ひ出した。

弟の孝ちやん、今頃何をして居るだろう？孝ちやんがまだ三つの春であつた。母はふとしたいたつきから、突然、吾等を殘して、眠るが如く世を去られた。嗚呼、其時、吾も共に逝き度くあつた。剰へ、孝ちやんが、泣きながら、「お母ちやん、お母ちやん」と求だ浮世の風も白波の寄るべなき、無邪氣の楓の様な手で、冷き母の乳房に、取すがつて、さもうらめしげに泣いた。嗚呼、白紙の様な罪の無い、此幼兒よ、母よと、思ひつめた吾は、孝ちやんを、ひしと、抱きしめて、泣き入つた。

數ふれは、孝ちやんは、もう、十三だ。あゝ、果して三つの春を覺えて居るだらうか。あゝ、あの時の事思ひ出すと、たゞ孝ちやんが可愛想でたまらぬ。

「孝ちやん、早く立身して、亡き母に恩を返すのだよ。」

と一人言云つても、現在孝ちやんは筑紫のはて、吾は東都に在るのであつた。

夜寒むの風すごく、寒月中天に冴えてゐる、

東京　是永かね子

オヤ、袴をはいた女の人が、家の方に向つて來るが、誰れだらう。何だか悲しげな人だ事。肩つきがあんまりほつそりして居るので、さう見えるのかも知れないけれど、あの青白い顔といひ、少し俯向きかげんに歩いて居る風なん、何うしても樂しさうぢや無いわ。アラツ！、御隣りの八重子さんだわ！。でもさうぢやないかしら？、髪の毛の黑いのは、似て居るけれ共、八重子さんは頬のポチヤ〳〵した方だつたもの。オヤ〳〵御隣りの門に入つた！。やつぱり八重子さんだつたのね、マー驚ろいた、隨分御變りになつたこと。あの方は、私が女學校の二年の時にだから、最う四年あとに、田舍に御緣付になつたのに、何うなすつたのだらう、袴なぞはいて。……學問好きでいらしたから、もつと勉強する御つもりで、御出京になつたのかしら、でも、去年赤さんが御出來なすつたとかだから、まさかさうぢや無いでせうし、といつて「それは〳〵夫婦中がよいので、マー〳〵安神して居ります」つてつい先だつて、伯母さんが御母さんに話して御居でだつた位から御離緣なんて事は萬々あるわけは無し、ほんとにどうなすつたのだらう。

ふと氣がつくと、茶の間の方で話し聲がする。八重子さんの御母さんのやうだ「イエ、モー、今更先方を恨みもいたしませぬけれ共……やせた八重子を見ますとつひ涙が……落度も無い者に離婚つけて……」たしかに伯母さんだ。八重子さんが御離縁になつたら嘸かしお力落しでせう……。しいが何んな事情なのかしら。伯母さんは一體聲が小さいのに、涙にくもつて居るので、よくは聞きとれない。やがて、氣を取直したのか、はつきりと「で彼女はもう緣付かないと申して、昨日から神田の幼稚園に參ります。「やつぱり小供を忘れられないのでせう。」又聞えなくなつた。

何だか人事で無いやうな氣がする、私もあと一月ほとで人の奥様にならなければならないのだ。私が結婚とふものは何う考へてもおそろしいと云つたら、御父様は「馬鹿な」と御笑ひになるし、御母様は「そんなに心配する事はありません」と有仰つたけれ共……

オヽ工場がへりの女工達が通ると思つたら、室の隅はもうくらくなつて居る。

然うだ、晩に御母様にくはしく御様子を聞いて、明日にでも御隣へ行つて、かげながら八重子様を御慰め申さう。アヽ御氣の毒な！

○美文　東京　平塚白百合子

試驗の準備や何かで頭をくるしめたのないやさうと、朝はやく、うらの高い岡にのぼつて、あけぼのゝさまをながめてた。霞はふかう〳〵、そのそこには梅のにほひもこもつてゐるのであらう、まだ人々のたましひは、きよい夢路からかへらぬ、風もなく音もなく、天も地もなく、森も川も野もみな吐息のやうなものに蔽じて、夢のやう。

程なく、東の空はバラ色に、霞は色とられた。美しいいろ衣のやうなその霞がとけたと見ると、森の上に光りのない赤い〳〵日はのほつたのである。

遠山はなほかすみ深くして。たゞ見る家々は炊烟起り、末は霞のうらに。にはとりの音どこともなくきこえて、うるはしい春の朝は、あけゆくのである。

○忍耐の必要　甲斐　小澤星水

二月四日郵便ッ!!

待ちに待ちたる女鑑は着た、前日編輯局より送られた、給與所に何か知ら！おゝ考へ物であつた、と一人とみがう見て微笑んだ、折から母上は、私の前に立ち給ひ「作文は何うですの」との御言葉に、思はず顏の熱くなるのを覺えて、何とも答へ得なかつたが漸く氣を取りなほし「母様お恥しう御座います、此れ迄何回となく短文を出しましたが、遂の一度も思はしくありませぬ、今迄の拙なき文を雨江先生の御目をわづらはし、末だ御拜顏も致しませぬが何やらうら恥かしく、もう此後は決して投書致しませぬ、只々不學を嘆くのみで御座います！母上は「かゝる心の御前に、何で優等の文が作れましようか、決してかゝる意志の弱い事では何事によらず上達致しませぬ。何事も熟練ですから、屈せずたゆまず何度も々々もお出しなさい、いつかは必ず目的に達しましようよ「人間修業に忍耐が必要ですよ、若し此心なき時は決して物事成就致しませぬから」れ、よく〳〵考へて筆を取り照しきなさりて、如何なる困難とも戰はれれば、此後、世に立ちて、幸福は得られませぬ。今更母のかゝる事をくり返しても効はありませぬが不屈の心はよく養つて下さい!!!母上の一言一句身にしみて！「あゝ實に申譯御座いませんでした、と詫び入りて妾は倫種々考へた末、漸く再び筆を取り、一旦、捨てたる拙なき作文をながめ入りぬ」

○梅を尋ぬる記　秋田　三浦志世子

霞うら〳〵とたなびき渡り、朝日の光ははなやかに我窓を照し、庭の小鳥はたのしげにさへずりかはすなり。かゝるよき日を、むなしく室にて過ごさんも口惜しと思ひ、かねて聞きゐたる谷間の梅を見ばやと許り、三人の友だち兄弟と打ちつれて出かけたりき

美はしき春の景色ん眺めつゝ語り行く程に、いつしか山道に入りぬ。いづこも白雲の様に見ゆる中より、匂ひ來る花のゆかしさ。いづれか目あての花なるや、誰一人知りたるはなく、いと困じければ、道行く人に訊ねながら、やう〳〵につきし、嬉しさ何にかたとへん。
谷間は瑞もなく白うなり、吹く風に身も匂はん心地せられて、しばしはぼーぜんたりき。か〻し、てたのしく谷間に一日を迄りて歸りたる嬉しさ、今猶忘れがたく、後の思ひいでにもとかくは日記のはしに。

○春日和　長野　松澤まつ子

春雨晴れて、野邊の若草一入色まし、土筆つむ少女の袖も霞に消ゆる昨日けふ、軒の櫻ほころびそめぬ。うつろひかゝりし紅梅に、名殘の香を慕ひて來鳴く鶯の、まだ老いやらぬも、なつかしや。夜ならば、おぼろ月に花舟浮けむ遣水に、緋鯉三つ二つ遊ぶも嬉しく、一本柳けぶれる根方に、小犬の夢路たどれるほとり、黄のこてふ清き蕊に醉ひてさまようも何れか幽遠なる自然の賜ならぬはなし。此麗けき日和に、南の椽近く、都に嫁がれし姉君が、初子に祝ふ衣縫へば、眺むる垣根も一入光添ひたる心地しつ。老樅樅の松に巣くふ雛鶴は、兒が操のときはかきはに、齢も千代まで經よかしとの母君がみこゝろづくしか。此月と知り給うてより、好めるお茶さへ斷たれて、産土の神に姉上が幸を祈らせ給ふを、迷信ぞと笑はせらるゝ父君が、曉の夢を氣にし給ふもをかし。たらちねの情けの通じてか、よべ安々と女の兒あげまししとにほふ玉章よせられし時の御兩方の御様子。見奉る身もほゝゑまれて、わらはも始めて持ちし姪といふものゝ、限りもなく可愛ゆく、まだ見ぬ子が面影忍ばるゝ折しも、耳近う歌うほがらかなる鶯の音にふと我に返りて、いつか弛みつる針の運び又急がせぬ。吹くとも無き和風、なり〳〵鬢のほつれ毛をなぶりつ。午後を報ずる長念寺の鐘の音かすかに聞えしよと思へば、裏の車井に水くる音ゆるく響きつ、やがて臺所より木の芽たく香のさともれ來ぬ。

新體詩

文學十鹽井雨江先生選

天

白百合　上總　岩瀨不二野

越へ旅立つ朝薄月に、　峠、見おくる花賣お美代。
お美代十三おさげの儘に　別れ惜しとや、涙の玉を、
ヤさシ姿の袂に見せて、「お待申よ、風邪ひますな、
土產に笹飴、椿の油、　賴ますぞえ、旅ゃすらかに。」
雪の越後に二とせ旅寐、　水の信濃に二月假りね、
暮中にも、唯これぱかり。無事で御座れさ、祈を掛て。
案じ暮た、可愛のお美代。嬉からうと、其土產買て、
かへりや、涙の浮川底に、何が怨で沈めた身やら。
何が情く溺した身やら。斯と知たら、疾く戻りを。
賴ないのは人世の運命。いつそ、此儘奥津城上に、
流さう、油を、笹飴添て。　薄露とざす夏朝あけに、
流しや、咲たら、百合の花、白く咲たぞえ、むら〳〵と。

（雨評）可憐なる詩趣掬すべし。

地

友が一週忌に　三河　橘たか子

永久の別れの悲しやと、手と手をとりて伏し泣きし、
君が終焉のうき涙、掬びし袖は干かねど、
時の瀬めぐり早ければ、夢と流れし一年や。
故郷遠くはなれては、はらはぬ露の玉苔の、
埋みやしけむ、塚の文字。冷たき石の君なれば、
枯れし手向の花筒に、雨も淋しうそゝぐべき。
哀れやさしき友染の、袂ならべし文机に、
睦びし年の春秋は、夢か夢かや幻や。
わかき希望の含笑みも、今は悲しき夢の跡。
運命はかなう別れては、淋しう獨り殘る身も、
胸の病の癒えざれば、君追はん日も近からむ。
暗き冥路の闇の扉も、抱きて泣かば嬉しきを、
今宵はつらき追想に、歸らぬ人を忍び泣く、
涙ぞ多きまくら紙。殘るかたみの宵なれば、
君思ひ寢の小枕の、夢にみ魂も立まさむ哉。

（雨評）感情の深くこもりたるを愛す。

人

淡雪　岩代　樹口雪子

伽羅の香を身にしめて、紅梅匂ふ釣殿に、
うたよみ給ふ姫たちの、興もそゞろや春の雪、
草花紅き築山は、見る／＼白う包まれて、
花のうつりが清きかな。
姫おばしまに出ませば、華の繁みを鳴き出づる
鸑鷟の彩羽に美しく、日影は匂ひて、雲晴れぬ。
柳の若芽さみどりに、殘るは玉よ、うぐひすの
清き鳴く音の凝りしてふ。
日かげに消ゆる淡雪に、庭の飛石表はれて、
鳥よと姫はさゝやきぬ。

（雨評）綺麗なるところを見るべし。

秀逸

◎春のころ　土佐　秋月廣江子

春の光のうつろひし、雨の夕べを、おばしまに、
歡樂のかげうすれゆく、夢なげきそ、人の子よ。
風にまかする花びらの、明日の宿りをとへばとて、
猶たどるべき人の世の、五十の旅は遠かるを。
摘みし菫のまたもえん、野邊なる春をまちもせで、
今日も暮しの鐘のねに、騷ぐや、世々の姿かも。

（雨評）調に味ひはあれど、心に今一層の深きものありたき心地す。

◎花がたみ　　大阪　木村春江

みしは昨日の夢にして、うつゝにあはぬ七年や、
面影いかにかはりけむ。みしは夕べの夢にして。
おとづれたえし七年や。君が心のおぼつかな。
また逢までの紀念にと、賜ひしものを色よかよ。
名殘だになき花かたみ。あゝそのかみの思出に、
恨みもふかき花かたみ、詩集秘めないつ迄ぞ、

（雨評）流暢なる聲調賞すべし。結句更に工夫のありたき心地す。

◎　　東京　平塚白百合

鬢の毛ゆらぐ風みえて、櫻かつ散る渡船場や、
堤は花のとばりして、末はかすみの中に入る。
東風はらむ船足おそう、そだぶね一つ下りけり。
水紫の河の瀨は、波の綾のみさや〳〵と、
一すぢのこすゆるき艫うた。

（雨評）優美なる詩景の思ひやらるゝものあり。練熟の足らぬををしむ。

◎「長閑」　　横須賀　渡邊比佐子

夕の雨の今朝晴れて、障子にうつる桃の花、
風のまに〳〵色溶けて、落つる御庭の池の上、
水輪を畫いて迫りくる、花の小波、岸近く、
緋鯉たはしる其の上を、微に消えて、音もなし。
遙かに見ゆる繪日傘の、二つ三つ四つ花野行く、
前に後に黃白の、蝶々二片亂れ行く。
彼方此方に面白き、都流行の子守唄、
聞いて嬉しき春日和、風も長閑に運び來る。

（雨評）情景は見えたり。

◎春の川　　美濃　皐月綠子

菜の花かをる山里の、伏屋の軒を流れては、
調へ優しき音をたてゝ、行へや何處、はるの川。
流れの末は知らねども、情もあつき佐保姫の、
ふりの袂にたはむれて、匂をおくる昨日今日、
野こえ山越え里越えて、胡蝶の夢を追ふがごと、
花の木蔭をさまよひつ、響をもらすさゝれ浪。
主なき舟の岸にそふ、みどりも深き青柳の、
下枝にかろく色みえて、結びとめたる一雫、
醉へるが如く緩やかに、そこの眞砂に咽ひつゝ、
ひくきに落る川水の、長閑ぞ春の心なる。

（雨評）感情と想像と今一層活かすべし。

◎眞珠　　東京　秋田登志子

歌拾はゞやと春の朝、靜に磯を逍遙へば、

巖に咲きては散てゆく、眞白の梅か、浪の華。
海底遙ゝ珊瑚もて、築きあげてし龍宮の、
乙姫君の染め給ふ、戀歌か、それよ、浪の彩。
二世とちぎりし浦島は、待てど返らぬ黄泉の旅、
日毎に姫は悲しみて、涙は眞珠と凝りけむ。

（兩評）流暢なるところは見るべし。情の足らざるをしむ。

○京を去るとて

常陸　今泉磯千鳥

進る故郷を後にして、京に出でしも早や三年。
雪に螢に辛酸に、倦まず撓まず勵みてし、
學びの業の今日終へて、こゝに樂しき歸鄕の日、
老いてし母や待ちまさむ……。

大厦高樓天を摩し、銀座の街の繁榮も、
道行く人も電車なも、都の空もはた地も、
わが目に映つるは今日限り、足跡印すも今日かぎり。
せめては地よ紀念ぞと、足跡を永劫にそかまゝに……。
涙そゝぐを許るしませ……。

山高けれど汝が恩に、比べていかで優るらむ。
海廣ろけれど汝がおんに、比してはいかでものならむ。
われ今京の去ぬるとも、そは永劫は忘れまじ。
いざ、さらば、京の地よ、健全なれとわれは祈りぬ。

（兩評）想も辭句も更に一層の推敲を要す。中節の段殊に然り。

○ゆく春

三重・北村みつ子

ゆく春姫の口元は、紅美くしきさくら花、
笑ひ給へば七色の、花は天地に咲きにしが、
三春夢とはかなくも、春のみ車姫乘せて、
別れ給ふを夏の蟬、止めし片袖袂の絹は、
切れて地に咲く鹿の子百合。

○若きうれひ

能登　粟倉すみれ

病の絆の怒りとけ、もとの我が身になりたれど、
日毎拔け毛の目に立ちて、きのふ誇りしぬばたまの、
我が黒髪は、束の間に、いとも少うなりにけり、
結ぶリボンに榮えもなく、かざすかざしに氣を兼れて、
とはに秘めたり紙手筥。

あゝ、花咲いて鳥啼いて、長閑けき春は來れども、
沈みがちなる我が心。重き病も、父母の
厚きみとりに癒えたるを、此上の愁は願はじと、
思へど、青春の血はにえて、日毎顯えのやるせなく、
朝な夕なに喜しみる、鎖にくもる我がおもひ。

○我友よ

河内　竹内久子

一

菫は咲けり、香は高し、鳥はうたひて、蝶はまふ。
樂しき今日の春の野に、いざや、遊ばん、我が友よ。

二

かゞやく光り野邊にみち、水は美妙の音たてて、
春の平和をさゝやけり。見よ、我が友よ、我が友よ。

三

若草もゆる此の野邊も、夕べに秋の思ひあり。
清き小川の流れにも、あしたにつらき冬もあり。

四

さはさりながら、我が友よ、こもたゞ一時、やがてまた
ふたたびかへる春の日に、すみれは匂ひ、蝶はとぶ。

五

哀れつめたき人の世の　さだめになげく我が友よ、
しばし涙の日をとめて、樂しき野邊にあそばずや。

〇浮世繪を見て

東京　鵜澤喜舞子

「やれ來ましたぞ『來ましたか』」「母を殺した大罪人」
「可愛娘といひますに。」
「これもさだめて前生の、約束事でござんせう、
南無阿彌陀佛、南無阿みだ」。
「やれもう馬が見え出した」『瘦せた姿もその上に』。
みな口々につぶやける、群集の上を過て行く、
氷雨冷みし秋の雨……たそがれ時の町はづれ。
渦立つほこり一しきり、やがてこなたへ靜々と、
見よ進みくる一列を、異形の乞食まつ先に、
高く捧げし立札に、墨黑々と罪狀を、
血にあきたらし鈍色の　穂長の鎗を、その後に。
青きはだちし馬の背に、やうやくのりし小娘は、
水色衣をまとひたる、首にかけたる百八つの
涙のつれか珠數の玉、亂れず結ひし黑髪や。
「この小娘が繼母ころし、どうせいぢめた果てぢやらう。」
「繼などとむごいこと、少しは何か輕うして。」
「繼母なれど親ころし、かうした罪は道理か。」
また群れ人はつぶやくよ。
何を思ふや、小娘は、たゞうつむいてとぼ〳〵と。
一足づゝに消えて行く、霜よりもろき人の身を、
空にあざ笑む夕鴉。

〇里の春雨

名古屋　不破きみ

春雨そゝぐ村長の、軒の玉水しめやかに。
茶の湯の催し樂しさや、母は茶道にはらからの客、
鳳爪らしき青の葉に、客姿つくろふをかしさを、
笑うて咲くか、しら桃の　にほひこぼるゝ床の上。
小さき弟は、軒近き　庭の流に笹舟うけて、
菜の花山と積みなしつ、風のまに〳〵よせくるを、
やあ〳〵萬歳萬々歳、太和島根にこがの船のつたるきこ
呼ひなすこゑのをかしさも、と誰はゞからぬ氣樂さを、
鄰の人も來てぞ見よ、永くもあかぬ春の夕くれ。

〇幻影

上野　吉田靜子

天の女神が吐く息に、草木めぐむ春の日を、
かたく緊めたる我胸も、睡かぬことのなくてやは。
手を携へて諸共に、理想の花を手折らんと
誓ひし友は、山櫻　夕の嵐と散り失せて、
思ひは殘るこの部屋の、障子に映る幻影に、
戀しの君よととりすがり、消えゆく影を追ひゆけば、
恨みは長き草川、去ぬる秋の月の夜に、
ともに浮へし舟一つ、朽ちて破れてかげもなう、
怪しう汀に浮沈み、棹さへ折れしを、如何にせん、
對ひの岸の柳蔭に、又もや友の立姿、
手をさしのべて招けども、水の音高う、徒に
恨みをたゝむ青浪は、よせては返し流れゆく。

短歌

小出粲先生選

天

おそろしき海の底ともおもはれず
しほひにいでゝ貝ひろふころ
東京 西村直子

地

こと木まで皆おもしろくなりにけり
うつしうゑたる松のひと木に
岩代 岸野菊子

人

しづのめが冬菜をあらふ川水の
うごかぬかたや凍りそめけん
岩代 岸野常子

秀逸

下総 高木美代子

いたづらに盛りすぎたる身をもちて
今年も花にちりや殘らん
美濃 傍島曉子

くちふねの古板ましろ背戸垣に
かけならべたるほしわかめかな

甲

○遠山のかすみ吹とくあけぼのは花にも風の嬉しかりけり　神戸 足立ゑい子

源義家

みち奥のしのぶ敵のありと見えて亂れそめにし雁の一ツら　神戸 足立あさ子

○かれをつぐ男の子の耳にさゝやきぬ花をちらさぬほどにこそつけ　東京 能村けい子

○はら〳〵と朝露ちりて新緑の木かげ涼しき野がくれの家　神戸 井口その子

○ふく風にちるをなしとや梅が枝にたえずきてなく鶯のこゑ　東京 高橋珍子

○一人住むこのかくれ家に紅はあまり艶なる桃の花かも　美濃 杉山靜子

○梅のはなちるかと見しは淡雪のかさのまに〳〵ふれるなりけり　東京 神谷てる子

○古郷の山もかすみに消えはてゝそぼふりくらす旅の春雨　越後 伊倉やす子

○池水の底にかげさへなびかして青柳けぶる夕月のかげ　美濃 岡武子

○放ちかふ牛も眠りて春の野の伏屋のたあり桃の花咲く　常陸 岡田萬子

○ 下總 中川千鶴子
いたつきを慰めみとる我せ子の枕邊近き鶯の聲

○ 神奈川 渡邊君代子
花賣女ひとりすぎ行く京の町朝風淸く籠にあふれて

○ 大連市 武村ゑい子
かたことのいへぬわび子のいつしかも歌の庭にたちましるらん

○ 東京 河合淸子
あかつきによはなりぬらむ羽くゝみしひなおとろかすかりの聲する

○ 東京 吉岡龜子
みたれ髮けつると見えてうちなびくやなぎにかゝる櫛形のつき

○ 常陸 今泉彌千鳥
文束にまきて封せし花すみれ京なる君は如何見るらめ

○ 美濃 淸川鋭子
つぼみなりし昔か文机の八重桃は窓に向ひて一花咲きぬ

○ 美濃 花園まき子
桃の花匂ふ雙子の夕まぐれあまたの少女つどひけるかな

○ 美濃 花園まつ子
桃の花白きに赤き美しく夕日ぞ匂ふ東光寺の道

○ 美濃 花園八重子
春雨は夕べに晴れてやれ垣の緋桃に赤き夕日影かな

○ 美濃 加藤里子
ものはみな見てもきゝてもよき頃をなとかう月と人のいふらん

○ 美濃 加藤愛子
おもふとち手とりつられてすは山にのほれはのほる月もかなたに

○ 美濃 花岡靜子
此夕あさくま颪さいたらし雲の毛衣きぬ人そなき

○ 横須賀 柏原みな子
賤かけに鶯鳴きて畠打つ人長閑なり春の山里

○ 東京 中村千代子
亡き母のおくつきところたつぬればこたへかほなる虫の聲かな

○ 岩代 菅野和子
うちわたす霞のとばりくゝりきて舞ふや花野の蝶ゝのむれ

○ 美濃 傍島みゆき子
村はづれ夕くれさむき川添にほの白く見ゆゑのころやなき

○ 須磨 有村紫子
わけいれは分け入るまゝに花にしてみねも谷間も八重の白くも

○ 岩代 樋口雪子
昔見て忘られかたき子にもまた會はむよき日か土筆摘む野邊

○ 須磨 有村紫芳子
あな嬉し尋ねきにけるかひありて花さかりなりうばが故鄉

○ 須磨 有村とみ子
夕日さす田面のかすみたな引てあぜの細道かはすなくなり

○ 須磨 有村紫子
かれの音のひとつ／＼に消え行て松原遠く成りにけるかな

○ 東京 松原岸子
園のうちに蝴蝶まふ見ゆふるさとの野べのなたれも今か咲らむ

○ 石川 岸せい子
ものゝふの魂る恨や燃えぬらん狐火青き具利加羅の山

○ 岩代 岸野せい子
かじかなく谷川きしのさくらはなうきよのほかの色にさくらん

○ 埼玉 揖崎佑子
有明の月そかすみにつゝみおきてほの／＼くらむあけほのゝ空

○ 埼玉 梅崎久子
かはかせのさむき堤にはしためかゆき間にもえし若菜つむ見ゆ

○ 能登 栗倉すみれ
夕榮のそら美しき春の野にさまよひ入りぬよきうた得むと

○ 埼玉 梅崎梅子
鏡なす池のほとりの糸柳かせにゆらるゝさまそゆかしき

○ 埼玉 梅崎治子
目なれつるなちのむら山かすみしてさまおもしろきはるの曙

○
蝶花と愛でいつくしむ一人子の初ひな祝ふ今日のうれしき
東京 神田たみ子

○
おほろげに花も匂へるこの夕なにとて厭のいさを行らむ
東京 花野しつく子

○
若松もゆかしかれとも老松のすがたには猶およはさりけり
松山 田村多豆子

○
つみとらでおかば春野はみなからに菜花ならむを今はくやしも
松山 上原のぶ子

春雪
とがへりの花かとばかりおい松のえたにかゝれる春のあわゆき
東京 神田けい子

○
梅か枝を鶯なから手折りしと見しはしばしの夢にそありける
埼玉 高橋とよ子

○
花輪して遊びし昔しのはれていとなつかしき青柳のかげ
兵庫 田淵みき子

○
梅ちりぬるかは鶯やとかへよやなきの若菜みとり色よき
神奈川 飯田衆子

○
春といふ名のみ立ちつゝともすればふきそふ風に六ツの花散る
下野 高松雪子

○
病療えし祖母君ゐます南椽日影のとかに桃の花ちる
東京 奈良八重子

○
春雨の霞むなはてにたなやめのかさかすめ行くつばくらめ哉
東京 平塚白百合子

○
晴れ渡る島の原野司に擊かすませて雉子なきたつ
名古屋 十文字つな子

○
ひけ白き翁つりする里川の土橋の柳春の風ふく
愛知 荒木とみ子

○
貸家札斜に貼りし黒門の松の老木に春雨のふる
名古屋 中村千代子

○
去年の春ともに眺めし梅の花今は涙のたれとなる哉
大阪 礒俊子

○
春雨のめぐみかゝらぬ方そなき野路も山路も小草もえつゝ
神戸 今西操子

○
霜とけの土の香高くうちけふり春日のとかに若草もえぬ
上野 吉田靜子

○
紙なすく家にやあらん白桃の木の間に唄ふ少女子の歌
相模 服部彌生子

○
そよとふく風だに花のさかりには心つくしのかきりなりなり
横濱 鈴木まつ子

都の春
塵のみの都ちまたも春來れは鉢の梅咲き籠の鳥なく
神戸 清水しみづ子

○
春の夜の月にうかれてこき出てしその船歌もおもしろきかな
東京 佐藤たけ子

春雨
しめやかに宵の小窓を打つ雨にいよ／＼梅か香匂ひくるかな
秋田 三浦しや子

○
文机にいけたる椿散りにけり君は來らす淋しき夕べ
美濃 酒向椿子

○
そた負ひて山かつ渡る瀧の上の淺瀬によどむ山櫻花
千葉 金子操子

梅が香のこもるさへこそ嬉しけれこゝろづくしの妹の玉章
大阪 木村春江子

學窓燈
おこたらす誰文學ぶ窓ならむ宵のまゝなる燈火の影
陸前 山方ゆき子

竹裏鶯
呉竹のしげれる中にこもり居てふしおもしろき鶯のこゑ
東京 戸塚とも子

京へゆくなり
米原やいふきれおろしさと吹きて背戸の菜畑にうす雪つもる
東京 鈴木ふさ子

○
燒太刀の利根の川づらたえ／＼に霧たちのぼる雨のなごりに
東京 高橋牧子

○
急ぎゆく野中の道の梅が枝にふり捨てかたき鶯の聲
三重 北村みつ子

千鳥　越後　澤野幸子

はま川にみちくろしほのおとさえてかたむく月に千鳥なくなり

舊都花　名古屋　中村なみ子

心あらは花も昔をかたれかし吉野の宮の春のあけほの

夢路に友にあひて　兵庫　湖東靜子

君をのみしたひし夜半のおもひれにしはし語らふ夢を見し哉

○　埼玉　横田やな子

大空のいつくをはてとさためなく風にまかせて雲のゆくらむ

梅雨久　埼玉　横田欧子

水車音も此ころ數そひぬさみたれくらすとゝろきの橋

○　横須賀　渡邊比佐子

棒かなり風あたゝけきしつかやの日あたる椽に媼糸繰る

○　相模　藤原下枝子

朝霞み晴れ渡りゆく遠山に動かぬ雲や櫻なるらむ

○　越後　岩本芳子

をさまれるみ代のめくみの露にあひて文のはやしのしけり行かな

○　名古屋　山根しげ子

もえ初めし岸の柳に里をとめ衣ぬきかけ根せりつむなり

春月　石川　山岸靜江子

櫻ちるなはしろを田に飛ぶ蛙おぼろ月夜のかげをくたきて

春月　石川　山岸そと子

花の陰くるれは友はかへりけりよの間は月をまれ人にせむ

竹　埼玉　香取うめ子

人の中の人とならはやくれ竹のすぐなるふしを心とはして

○　甲府　風間千代子

咲つゝく花に光をゆつりつゝかすみにしづむ春の夜の月

乙

○　磐城　木幡きよ子

月影のふれてや花の散りぬらんふゞきに曇る朧かよの空

藤　神戸　那美子

あけほのゝ雛僧たちかかしましく鯉に餌をやる藤なみのかけ

土筆　松山　秋山紅葉子

友ならで生ひ出でにける土筆かな墓標の側に哀れ人呼ぶ

○　美濃　西口こう子

貝あさる少女の群れのかへりゆきて浮輪の如き波に月見ゆ

○　東京　高野元子

みほとけの廣き黄金のみくちよりときましゝのりのみ聲をぞ思ふ

○　美濃　梅田芳子

植ゑ置し桃に今年は花着きて一雨ごとにたのしくなりぬ

○　美濃　梅田春子

レール邊に今を盛りの桃の花四五ひら散りぬ汽車のひゞきに

○　美濃　芳村春代

間垣こす桃の花枝アーチして通る人々迎ふとぞ見ゆ

○　美濃　芳野萩枝子

汽笛ひゞく黒かれ赤き大木曾のはしおそろしき黒烟かな

○　美濃　芳野富美子

桃笑ひ鳥はうたへと我家は病めるいもせのきようもなきかな

○　美濃　芳野紫水子

緋桃咲く夕なべ小路つれ／＼に里よりかへる夫婦つれかな

○　東京　秋田とし子

誰かために身を任せけんつげの櫛折れてはあはれ見る人もなし

○　美濃　長濱園子

渡し船人のとたえへ水棹かがよぢれうつりぬ月の夜の川

○　須磨　有村さゆり子

二月や今朝咲き初めし花かげにわか烟のやせをなく夕かな

○　岩代　遠藤久子

おもふことなくてみるべきさかりをばふきおとろかす花のした風

○　東京　神田みれ子

窓ひらきのぞむ愛宕の御社につゝがなかれと君をいのりぬ



俳句

内藤鳴雪先生選

天

春の水化粧の棚に上りけり　相模　春野浪子

地

春の月吉野紙もて包むべし　横須賀　渡邊比佐子

人

雛と寝てうれしき幼心かな　同　齋藤松代子

よき人の噂もするなり桃の宿　神奈川　桃川雪枝子
町中に紺屋の軒や青柳　横須賀　高橋つれ子
秋色にあふながられし櫛かな
春の霞ほの紫に暮れにけり
朧夜や白き蝶飛ぶ古井筒　同　齋藤松代子
暖や二人つれ立つ物詣で
朝櫻笙の音もるゝ館哉　東京　勝田直子
月の下手飼の狐の舞ひにけり　同　境津つれ子
御意に入る東方朔や爺の脊　下野　土屋藤花子
山藤の紫匂ふ朝日かな　名古屋　十文字華子
筒井筒井筒はふりて緋桃咲く　愛知　荒木登美子
江の島の影静なり春の海　相模　春野浪子
春の月嬉しい影のうつりけり

春霞晴れて水あり小舟あり
汽車過る笛の音細し春の雨　名古屋　中村ちよ子
乳母の膝に猫駈け上る花吹雪　神戸　今西操子
紅梅の下に集ひぬ女の子　美濃　酒向梅子
梅咲かいて下行く水のかなりかな
姨捨の田の田毎をかけて霞みけり　東京　鵜澤薫子
夕日影雛の顔のほてり哉　同　鵜澤喜舞子
紅梅や草分けて訪ふ冠木門　神戸　足立あさ子
花戻り行逢ふ人に問はれけり　同　足立ゐい子
鮎逃げて行衛たづぬる日永かな　陸前　山形すみゑ子
うつくしき人の集ひや花見船　廣島　鈴森きみ子
嫁に行く人の噂や春の雨　下總　高木美代子
振袖の長き恨みや汐干狩　名古屋　中村なみ子
東風吹きて雲雀の聲の空高し　兵庫　古東すみ子
羽立てゝ風を待つなり雀の子　相模　藤原下枝子
月代や漣立てゝ上る鮎
鶯の留守を頼みて屑拾ひ
滋賀に来て松懐かしき朧哉　横須賀　三輪やす子
鉢の木に春風ふくや床の上
灯見て騒くや花の群鴉
白酒に酔ひ倒れけり雛の前　同　吉岡艶子
梅の道行逢ふ人の酒臭き
幾平の額吹かせん春の風　札幌　佐藤千代子
春風よ頬の皺を吹きのばせ　同　佐藤雪子
若草にひとりまろ寝や孕鹿　越後　岩本芳子
鶯の啼くや夜明の星一つ　千葉　金子操子
山吹や女棹さす舟小さき　岩代　岸野常子
梅活けて夕べ一詩を得たりけり
讀經する尼鼻赤き寒さかな　美濃　飯島曉子
紅梅や窓に味噌する尼一人　同　芳翠敏子

讀者文藝

貴人の馬車ゆるやかに春の雨　東京　秋田登志子
上京の懸の聲きく伯母の家　横須賀　柏原みな子
出代りの花を懐かしむや京の春
今土を出た眼遣ひの蛙かな　美濃　鷲見里子
背戸口や梅みて草履作る人
吟聲や東風に吹かるゝ鞍の上　同　河原君子
姫君を酔はせ參らす花見哉　同　吉野花子
神子殿の鈴振をかし桃の花　同　加藤波子
行春の蒲團干したる垣根かな　同　加藤愛子
行春の佛の顔も古びけり　同　加藤里子
おしろひも春の匂ひの蒲團哉　同　加藤君子
見て廻る絵馬堂の簷に風薫る　岩代　樹口ゆき子
窓外に野人の禮や梅の花
鴨去にて池面淋しき小雨哉　常陸　今泉磯千鳥

定價
一册　前金　貳拾錢
三册　前金　五拾七錢
六册　前金　壹圓拾錢
拾貳册　前金　貳圓拾錢

全國遞送無料

明治四十一年三月廿六日印刷
明治四十一年四月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　株式會社　國光社
東京市京橋區築地二丁目二十番地
右代表者　橋本忠次郎
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷人　守岡功
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　株式會社　國光社
振替貯金口座番號　壹壹七八番
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋　特八八番）

前號判畫披露

去る十七日午後一時より、規定により、判じ書解答者中より、本社支配人、編輯局諸員立會の上抽籤を行ひ、左の通り當選したり

解答

良妻賢母は家の寶

（龍、犀、劍、帆、ニゴリある故輪、家、野、寶）

貞女となれ

（手、猪、女、砥、鳴れ）

姦婦となるなかれ

（姦婦　四人の女を三と一に分けて戸鳴る、菜枯）

第一等　石見國鹿足郡七日市村　野上ひさよ子

第二等　熊本市新屋敷町百四十三　高本喜久子

第三等　岡山縣玉島町大字勇崎本宗西　竹久壽美子

第四等以下の解答者　▽神戸三木光子　▽熊本安成しづゑ子　▽石見野上ひさよ子　▽東京奥原とし子　▽新潟酒井むつ子　▽戸橋本さく子外百六十八名

最新發明薬 世界無比

あざ

入墨廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日に必らず美麗に除去すること保險附

新發明薬にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるること確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新薬也但し本剤は其製剤に二樣に區別し一はあざ、入墨ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の痣名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する薬を送付すべし價は各一剤分壹圓拾錢參剤半分參圓拾錢六剤分五圓拾錢拾貳剤分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割増し(患部の面積大なる人は大剤を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

梅毒根治新薬

本剤(薬名ドクトルばい)は幾多の研究實驗を重ね多年苦辛經營の結果成功したる最新最良の薬物なれば現世紀に於ける唯一の梅毒根治特効新薬なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症(即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんさう。よこれ。ようばいそうたいどく。蒼毒。ろいれき。骨がらみ。へんどく。ふしぶしのいたみ等)ならば如何なる頑固雜症にても特別製分にて誓って根治することを確證す從來醫療薬等百方手盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本剤を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ薬價壹剤分壹圓拾錢貳剤分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送薬、郵便切手代用は必ず貳割増しの事

●毛の必ずはえる確證薬

本剤は米國醫學博士の發明に係る世界無比の毛髪發生薬なり即ち腫物の痕はげの痕やけどの痕頭髪及はゑきわの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛のなき人本剤特別製分を用ゆれば忽ち毛髪蒼々と發生すること確證す本剤は世にありふれたる種々雜多の毛生薬とは其効眞に天地月鼈の大差あるに付玉瓦混同視すること勿れ薬價は特別製貳圓卅錢並製壹圓廿錢

世界唯一

痳病消渇の根治新薬

痳滅(りんめつ)

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範薬なり本剤はありふれたる普通の賣薬と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新薬を主剤とし是を內服して痳病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する良方に基き製剤せし新薬に付輕症は壹剤重症は持別製分にて必ず誓て根底より根治するを確證す但し彼の舊式洗滌剤の如き迂遠無効有害の姑息薬と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ薬價不廉なり薬用者豫め之を諒せよ

薬價壹剤壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割増しの事

東京神田區五軒町拾九番地

以上四薬 專賣元

日新館薬房

白色特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個入同上貳圓參拾錢

此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは荷も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質をなするは此石鹸特有の神効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を眩着する內國製の粗惡品と玉瓦混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

東京神田五軒町拾九番地

一手輸入 專賣元

日新館薬房

華族女學校御編纂

國語假名遣ひ一覽

折本　壹部定價　金拾貳錢　郵稅金貳錢

從來國語の假字遣を敎ふるに多くはたゞ五十音の順次のみによりてその語を配列するを例とせるが本書はまづその語原近きもの意義通へるものを一括して之を類推せしめむと計り成るべく記憶の勞を省かしめんとせり本社曩に華族女學校の御下付を得て世に公にす國語研修者文學者には座右必携の要書なり

大宮兵馬先生著述

國語譯文假字遣ひ法

全一冊　菊判大和綴　定價金拾八錢　郵稅金貳錢

本書は、中學校、師範學校、高等女學校生徒の敎科用及び參考用に供せんとす。書中の編次は、まづ普通の言文中に屢上るべき、各種の語につきて、其の發音とかなづかひとを敎授するに、從來の如く、生徒をして、强ひて之を暗記せしむる方法を採らずして、別に新案を以て、語原により、語意によりて、自ら推理して會得せしむべき方法を用ゐたり。其三の各條下に、更に細字を以て古語若くは常に言文に上らざる語をも叙列し、一切網羅して餘す所なきものは、各學年を通じて、中古以上の如何なる言文にも、適用せしめんことを欲してなり。されば學生は常に之を座右に備へ文章を作るとき若しくは讀書の際假名遣ひに疑はしき場合に對照するときは自然に正しき假名遣ひ法に習熟することを得ん

發行所　東京築地　國光社

東京高等師範學校教授 文學士 松本孝次郎著

家庭に於ける兒童教育

總クロース 菊版二百頁 定價五拾五錢 郵税八錢

本書は**兒童教育專攻家**として教育界に名聲隱なき著者が多年研究せられたる**學説**と**實驗**とに基き**實地家庭**に行ひ得らるゝやう極めて**平易且切實**に談話體を以て**兒童教育法**を説述せられたる者にして世にありふれたる家庭教育書類と全く其の**選を異**にせり而も何人にも解り易く容易に**育兒の妙訣**を了得するを得べしされば世の父母たる人は子女將來の爲**是非熟讀**せざる可らざるものなり

此書は亦**兒童教育**の任にある**學校教師等**には必缺く可らざる**良參考書**なり

重要目次 ◉第一家庭に於ける德育 ◉第二家庭に於て起り易き弊害 ◉第三兒童の賞罰 ◉第四遊戲の價値 ◉第五兒童文學 ◉第六兒童と自立心 ◉第七感情教育 ◉第八家庭と園藝 ◉第九兒童と言語 ◉第十兒童と圖書 ◉第十一青年教育の注意 ◉第十二男女の兒童 ◉第十三小兒室の構造及設備

發行所 東京市京橋區築地二丁目 電話新橋八八、二六九三 株式會社 **國光社** 關西大賣捌 大阪市南本町 **積文社**

女鑑

明治四十一年四月一日發行　毎月一回一日發行　第拾八年第四號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷